815 0932 k(1)

トエ4Q-73

帝国図書館蔵書

例言

この別記は、題號のごとく、別に、廣日本文典として刊行せるがつゞき、その附録別記なり。されど、この別記は、廣日本文典ありての上の用のものなれば、その別記を覽む者は、廣日本文典を覽ての上なるべきも、いくばくの妨げもなし。

此の別記よりしては、廣日本文典をば、本書と稱す、通篇行文中に「本書」とあるは、すべて、其意なりと知るべく、「この書」の意と誤解することなかれ。さて「この書」の意なる所には、すべて、「この別記」と記して、別ちおけり。

此の別記は、本書に說ける節々に就きて、別に、註釋、敷衍、參考、考證、辨解、持論、駁論、等あるを記したるものなり。これら、初は、本書の毎節の註脚中に附載じたりしに、餘說、議論、などの、竄入してあらむは、本書の行文に、斷續を生じて、通篇大旨の一貫に妨げあらむと、刊行に臨みて、俄に思ひつきて、凡そ、事の、枝葉に渉れりと思ひなさるゝ限りは、一々引きのぞきて、此の別記に一括したるなり、されど、毎節、碎屑なるものとはなれり。さて、此の別記の毎節の行頭(ギヤウトウ)に、

帝国図書館蔵書

26223 図書館

225447

(本、三五)など記したるは、本書の毎節の上欄上にある數字との符契なり。

草々に引きぬきたるわざにもあり、且、時、盛夏にして、微恙に罹れる際にもありしかど、除くべきものゝ、尙、存し、除くまじきものゝ、移れるも、まれ〳〵にはあるべきか。又、兩書毎節の符字を記しつけたる後に、また、加除したる所もあれど、符契の、離合して、いかゞはしき觀を生じたる所もあり。(されど、その飜譯せし所はあらじ)

又、兩書に引用せし例文、例句の出典も、大抵は、原書に照合したれど、溽暑に懊惱して、一二の遺漏誤脫も、或はあらむ、讀む者、諒せよ。

○余が文典中の語格は、凡そ、平安遷都の初より、後三條の朝の頃までの書中の用例に據りて立てゝ、私に、これを中古言と稱す。

後三條の朝の頃と限りたるは、言、文、未だ、兩途にわかれざりき、とればしき世を準としてなり。れよそは、竹取、古今、などより、狹衣などまでなり。

奈良朝以前の古格は、姑く異例とはしたり、然らざれど、二格幷立するやうの事起りて、(名こそよき、名こそよけれ、見らむ、見るらむ、ノ類)普通語格の基、立たず。又、中古言なりとて、用例の、尋常普通なる方に從ひて、一時の用語とれぱしきもの、(べらなり、給ふける、ノ類)又は、僻典と認めらるゝは、避けたり、言文一致の世の筆の跡なりとて、悉皆、金玉なるにもあるまじく、歌屑などいふもあるべく、瑕、瑜、混ずべきにあらず、且、傳寫の誤などいふことも、あるべけれど、なり。

紀、記、萬葉、に存する古格は、別に、自ら、其學あるべく、普通文の用例には、避くべきなり。書紀に斯る例あり、萬葉に然用ゐたるありとて、極めて古き、極めて希覯なる典例をも擧げ來らば、異例のみ出で來て、今人には、耳遠くして通せず、語格も一定すべからず。且、其古格、又は、中古言なりとも避典なるなどを採りて、初學の、作文に用ゐたらむには、師たる者、まづは削正すべからむ、初より敎へぬをよしとす。とにもかくにも、普通語格は、尋常なるに據りて立てゝ、初學をして、一應、語格文法を知らしむべく、それに據りて、文を作らしめて、決して、雅文の法に遣ふことなし。さて、上達して、專攻し、獨力にて博く古今にわたらむは、また、格別の事なり。

○和歌は、限ある字句の中に、限なき意を述ふべき事もありて、言外に餘意を聞かする作例も出で、隨ひて、言ひさして餘韻に付し、語句を略したる多し。(甚しきは、所謂「心あまりて、詞足らず」の難を受くるあるに至る。) 又歌ふに、調を取る方よりして、法外に馳騁すること、なきにしもあらず。又、歌詞とて、散文には用ゐぬ語格なども、あるなり。されど、和歌と散文とには、法格の相異なる所少からず、猶、漢文と詩とに、調格の相異なる所あるが如し。普通文法は、宗と、散文に就きていふものなれど、深く和歌の事をも言はず、度外に置きたるあり、和歌には、別に、自ら、其學あるべきなり。

用例に、戀歌なるは、一切採らざらむとは云つれど、いかにせむ、歌集、物語、大半は、戀にして、用例をあなぐりて、これぞ佳典なると、見れど、戀歌なり、惜しとは思へど、捨てゝ、また、これぞと見れど、また戀歌なり、斯く、頻々、戀歌にのみ撞着すること、出で來て、毎に齟齬せずはあらず。されど、必用なる用例にて、他に、急に見出でぬには、引けるもあり、己むことを得ぬに出でたるわざなり。

○余が文典の稿案、多く、先哲が苦心の餘澤に據りしこと、論ずるまでもなし。

然れども、余が新案に出でたるも、固より多し。師傅にて學びし人は、師說を もぢくに、憚りもあるべく、從來の學派を汲み、其學說を遵奉せる人には、余が新案は、謀叛の旗擧げしたらむやうに、思ひなさむ事も多からむ。されど、余は、獨學にて、師事せし所とてはなけれど、ろの嫌ひ、さらになきなり、余が忠節を致さむとする所は、唯、斯道の發達にあり。

余が淺學なるより、我が新案ならむと思ふ事の、案の外に、先輩の、夙く說きれけるを、知らずしてあるもあらむ、斯る事は、われのみならず、先輩の、先輩に於けるにも、まゝありなむ。又、先輩の、後進の、我の、人の、いづれか先き、いづれか後なる、わきがたきも多かるべし。明に、剽竊の痕跡を免れざらむは、さるものにて、說の暗合といふ事も、れのづからあるべきことわりなりかし。

○文法科は、言語を正しく用ゐ、文句を正しく綴り得るを敎ふるを旨とし、且、讀書、釋義、修辭等の力を養ふまでのものなり。然るに、世の文典中には、文法科外なる音韻學、言語學、修辭學、博言學、又は、辭書に屬すべき事にまで涉れる多し。

文體文格などいひ、趣味巧緻などいふ事、文法科には與からず、乾燥なりとて、語格だに正しくば、趣意は解すべく、絢爛なりとて、破格あらむには、解せられず、語格より言へば、作體は度外なるべし。

右等の學科も、文法科と、相聯關するものにはあれど、別に、其專門科のある上は、其深理等に至りては、各、相讓るべきなり。余が文典中に、助動詞、亘爾波、感動詞、接尾語等、語を盡して、列擧して說きたるも、實は、辭書の範圍に入れる嫌ひありて、文典の體裁を失はむの思ひあるなり。然れども、斯くせざれば、意義を別ちかぬべくも思ひたれば、然せしなり、已むことを得ずしてなり。

又、音節篇(Prosody.)の一篇は、却て文法科に屬すべきものなれど、余が文典には、姑く缺きたり。さるは、發音符の「アクセント」(Accent.)の如き、我が國にては、今、定めがたき事情あれば なり。封建割據の勢よりして「アクセント」隨地に相異なり、一地方なるをもて定めむには、たやすきわざなれど、日本文典は、名のごとく、日本全國にかゝるものなり、「東京アクセント」にて立てむか、全國所在の學校にて、敎へ得べきか、行はるべきか、「京都アクセント」にて立てむか、同一の事情ならむ、邊土の「アクセント」採るべくもあらず。和字正濫抄などに、發音の上に、平、上、去、などと說きたるは、皆、畿內邊の「アクセント」なり。柿と牡蠣との「アクセント」、東西兩京、正反對なり、此類、擧ぐるに暇あらず。關東にては、奴婢の名の「熊、虎、梅、竹、」などを呼ぶには、動植の實物を呼ぶとは、「アクセント」を異にすれど、(熊、虎、など、實物のかたの「アクセント」にて呼ぶゝ、雇人とても腹だつべし、關西には通せぬなるべし。「アクセント」の事、深く考ふべきなり。

山田美妙齋と稱する人あり、辭書を作りて、余が言海に「アクセント」を加へざりしを罵れり。文典を作り辭書を作らむはどの者が「アクセント」に心つかである理あらむや、加へざりしは、前陳の事情ありて、定めかねたれどなり、一地方の「アクセント」は、何の效をもなすまじく思ひたれどなり。扨、美妙齋氏の「アクセント」を見れば「東京アクセント」なり、余は、江戸にて生れて、十六歲まで、江戸にて成長せり、爾來、去就あり、前後を通じて、東京に住せし事、三四十年に及べり、「東京アクセント」ならば、一夜にも定むべかりしなり。

○次に、文法教授法の私案を言はむ。無心にして言へば、假名の字形、清濁の讀方などは、すべて、初等教育にて學ぶものなり、又、言語とても「山、川、草、木」とゝひ、「花は咲く、風の吹く」といひ「書を讀むべし」字を記さむ」といひ「山高し」海深し」などいふ、國人にして國語を讀むに、自然の知ありて、別に解しかぬることもなく、これを文法科にて、取立てゝ、事々しく說く必要はなきやうなり、從來の語學書に、難局のみ說きて、知れわたりたる事に言ひ及ぼざりしも、其故あるなり。然りといへども、文法といふ一科學の範圍としては、あらゆる文字言語を漏さず、一應は、說かざることを得ねど、記すなれど、さて、教授の上に至りては、教師に、自ら活用の手段あるべきにて、知れわたりたる件々は、必ずしも責めず、誤まるべき局處のみ責むべきなり、然らざれど、無益に時間を費すのみなるべし。左に、文典中の、必ず教示熟知せしめずては、ゐあらぬ局處を擧げむ、此外なるは、ひとわたり講議してありて、可なり。

一總論にては、文章語と口語とに差ある事。

一文字篇の假名にては、母韻、半母韻、の「い、う、ゐ」の別。「い、ゐ」ゐ、ゑ」え、を」の別。

濁音の「じ、ぢ」ず、づ」の別。拗音の「じゃ、ぢゃ」じゅ、ぢゅ」等の別。轉呼音の「は、わ」い、ひ」う、ふ」ゐ、へ」え、ほ」の轉。「あう」えう」かう」こう」等の轉。音便の「くらひて、くらうて」かひて、かうて」の轉などなり。(以上、畢竟は、第七六節にいふ假名遣なり、)

一漢字にては、文字に、音と訓とある事。

一單語篇の名詞、代名詞、數詞は、通過してよし。

一動詞にては、自動、他動、の用法を違ふまじき事。語根と語尾との別。正格、變格、九類の語尾活用の變化する狀、これは、力を極めて教へて、十二分に熟知せしめ、第一表の紙末なる語尾活用のみの諳誦を、自由自在ならしめて止むべし。殊に、變格の四類を責むべし。(佐變の「吟ず」感ず」周旋す」の類、殊に注意すべし)上二段、下二段活用の口語調を、文章語に混ずまじき事。動詞にて、活用を熟知せしめ置けば、後の形容詞、助動詞、の語尾活用に至りて、大に力を省くべし。

動詞の法にては、第一、第二の終止法、又は、連體法、を用ゐ誤るまじき事。

中止法の第一五〇節のあたり。其他は、通過して可なるべし。

一形容詞にては、「嬉しゝ、」「怪しゝ、」の誤。

一助動詞にては、所相の「罪せらる、」「解せらる」を「罪さる、」「解さる、」など誤るまじき事。(勢相モ、同ジ) 使役相の「解せさす、」「周旋せさす」の「解さす、」「周旋さす、」の誤。勢相、使役相と、敬相との別。指定の「恐るべし、」「起くべし、」「手を觸れべからず、」の誤。打消の「恐れべし、」「起きべし、」「手を觸れべからず、」の誤。打消の「す」と「じ」との差。四段活用の一種の半過去(第二三七節)を、下二段活用に誤用すまじき事。過去の「き、し、しか」の「暮しゝ、」「任せし」の別。「き」と「し」との第一、第二終止法の用法の誤。推量の「任せまし」と、打消の「任すまじ」と、の清濁、用法の別。詠歎の「なり」と、指定の「なり」と、の用法の差。第二六七節の類別。

一副詞にては、禁止の「な」を、動詞の第二活用に添ふまじき事。

一接續詞にはなし。

一互爾波の第一類にては、動詞にかゝる「が」の「と、名詞を繋ぐ「の」「が」との別。

第二類にては、「たに」と「さへ」との別。「や」と「か」との全部は、力を用ゐよ。

第三類にては、「と」と「も」と「ぞ」「も」との別「を」の二樣の用法、これも殊に注意せよ。

一感動詞にては、「や」と、疑ひの「や」との別。希望の「ね、な、なむ」と、半過去の「ぬ」の命令の「ね、」詠歎の「な、ぬ」の未來の「なむ、」又は、互爾波の「なむ、」との別。第四三六節の類別。

一熟語、疊語、接頭語、發語、にはなし。

一接尾語にては、他語を副詞とするもの丶中にて「ものから」の用法。第四八〇節の「み」の用法、等なり。

一文章篇は、文法科に於て、最も緊要なり、殆ど全部を通じて、熟知せしむべし。

右は、私案としていふのみ、他は、皆、無用なりといふには、固よりあらず。又、右の私案は、中等文典、廣文典、に通じていふにはあれど、中等と高等とには、說くに、自ら深淺精粗あるべきこと、いふまでもなし。畢竟するに、取捨裁斷の運

用は、人々の方寸の中にあるべきなり。

○中等文典の中に、今の日常の普通文には、稍、耳遠しと思はるゝ格をも說きれけるを、難ずる人もあらむか。然れども、文法の學習は、みづから文作らむ用のみにあらず、既成の文章を讀みわけむ力をもつけれかむが爲なる事、固よりにて、稍古き文(中等教育を歷たる程の人に應じたるといふ)をも、讀み取り得べきまでは、教育して置くべきなり、必ずこれを自作の文に應用せよといふにはあらず。但し、尋常中學にて、萬葉集など講じてある學校もありと聞く、それらは、程度を量らずといふべし。

○中等文典の文字篇中に、羅馬字の發聲母韻經緯表を加へたるは、洋學せぬ教員には、いかゞとも思ひたれど、羅馬字を借らねど、分明に說きあかし得ず、且、中等以上の學校にては、英語英文法をも課する事にもあれど、學生には、自ら理會にはやかるべくも思ひ、又、洋學せぬ人なりとて、音の原理を教ふるなかりの人は、羅馬字の音だかりは、知りてもあるべきことゞも思ひたれど、加へたり。又、洋學せし教員ならむ、廣文典のかたの動詞、助動詞、の活用表中なゞに、洋文法の用語をあてれきたるを採りて、附說すべし、生徒には、洋文法と、兩々對照し、互に相發明する所ありて、大に悟入にはやき利あらむ。

序論

我が國語學の事、中世、言文兩途となりしより、教育する事とはなりしかど、初は、唯、歌學家一派の、高尚なる專門に存せしが如し。百數十年前より、斯道の學者、やう〳〵世に出で來て、頗る其道を究めて、世に稱道し、其著作の發行せられしも、少からず。されど、世人、尙、これを專門の學とのみ認めて、普通の教育にとては、上することなかりき。蓋し、文章語と、口語と異なりとはいへ、國人の、國文に於ける、別に、事々しき教育を受げずとも、ねばろげにも、自ら意を通じ、その誤謬の如きも、人々、互に襲用して怪まず、粗用を辨ずるに足りてありしかど、これに重きを置かざりしなるべし。又、語學家の見も、これと同じく、唯、解し難く、誤り易き局部のみ說きて、他の、迷ふべくもなきには、論及せずしてありしなり。されど、著作せしを見るに、文法一科學の書としては、遺漏せること、甚だ多くして、文典の體裁を具備せるはなし。

西洋にて、文法といふ一科學は、或國人の、他國の語を學ぶひとする必用より

して、起りしもの、と聞ゆ。初め、羅馬人が、希臘と交通し、其文化を慕ひ、其國語を知らむとせしより、希臘文法を作りしを初とし、羅馬の盛なるに及びて、他國人、又、羅馬と交通し、其語を學ぶとせしより、羅甸文法は作られ、各國、又、これに倣ひて、各、自國の文法を立てしなり。(彼の紀元千六百年代) 各國、互に交通すれば、各國、互に、其國語を知らずはあるべからず、又、文法の誤は、交際の過を生ず、是に於て、此學も、次第に精密なる考究を歴て、あらゆる語格、說きて漏さず、普通教育必修の學とはなりしなり。

然るに、我が國の如きは、從來、外國の交通少なかりしかば、深く此道を講ずべきことも、自ら起らず、必用として教育せねば、人々、必用に思ひつかず、不必用と思へば、重んじもせず、隨て、斯道の發達せざりしは、自然の勢なりといふべし。近年、歐米と交通し、洋學盛に行はるゝに及びて、人々、彼の各國の文法といふものを學び知りて、爰に始めて、此學の必用なるを認め、普通に講せずはあるべからざるを覺るに至れり。

○上世、言文一致なりし世に當りて、語法の學などいふもの、あるべくもあらず、詠歌作文に巧拙あるも、人々の天才の意匠と、推敲の精粗とに出でしのみ。束脩を執りて師に就き、歌文を學ぶやうになりしは、藤原基俊、源俊頼、兩匠の頃よりの事なるべし。(源平時代より、凡そ、百年前) 此頃の書よりして、文章語と口語との混ずるを見る、文章語、漸く固定の姿を成して、尙、口語の調をも交へたるは、言文一致の遺風なりしならむか。而して、文章語の固定するやうになりしは、即ち、師弟の授受に起りしことにて、基俊朝臣の悅目抄、降りては、定家卿の假名遣など、當時授受せし狀を見るに足る。是等、語學の初とも見るべきなり。

悅目抄も、定家假名遣も、古格に比ぶれば、假名用法、已に亂れてあり。されど「ら」「ね」「へ」「る」「れ」「を」の如き、或は、當時、變遷の發音のまゝを記せるにて、なほ、言文一致なりしにはあらざりしか、一考すべきなり。又、定家假名遣といふ書は、後の假托に出でし僞書にもあるべけれど、後世、冷泉家、二條家、にて授受せし假名用法は、率ね、此書中の如くなれば、これをもて、定家卿の頃の師傳の狀を推しはかるには足るなり。

鎌倉の中頃、仙覺權律師、万葉集の假名遣をいひし事あり、南北朝の頃、明魏上人、(花山院師賢卿の孫)五十音反切に就きて說きし事あり、其他にも、類似の書、若干あれど、皆、語學史の材料とすべき價値なし。然れども、語法の事は、鎌倉、室町、を通じて、堂上專門家の和歌連歌等に傳へてはありしなり。

江戸開府以來、國書涉獵の博きは、北村季吟氏を推す、然れども、語學の學匠とは認めがたし。同時に、浪華の契冲大阿闍梨、梵音學に長じ、其力をもて、漢字音を考へ、万葉集に就きて、其所用の眞名の音を看破して、遂に、古假名遣の法を發見し、和字正濫抄を著して、これを論じ、動詞の活用にも及べり、(元祿中)これを、假名用法復古の首唱とす。其後、伊勢の谷川士清氏、日本紀通證、和訓栞を著して、(延享中)音韻活用の事を論じ、後、又、京都の富士谷成章氏起りて、書を著して、(明和中)名、(名詞)かざし、(副詞、其外、他語ノ上ニ用ヰル語)よそひ、(動詞、形容詞)あゆひ、(豆爾波)の四別を唱へて、動詞の正變活用、頗る委し、足らはぬ所はあれど、日本文典の嚆矢ともいひつべし。尋で、伊勢の本居宣長氏、紐鏡、詞玉緒を著して、係結の法、大に定まり、男、春庭氏、詞八衢、詞通路、を出して、活用、自、他、一定し、(文化、文政)後に若狹の義門上人、玉緒繰分、山口栞、活語指南、活語雜話、等を著して、(天保中)本居氏父子の說を補ひ、是に於て、動詞、形容詞、助動詞、豆爾波、の諸則は、大成せりといふべし。其他、先進諸氏の所說を補正せし諸家の著書は、擧ぐるに暇あらず。以上、國語學の略史なり。

○從來の語學書を通覽するに、先輩の苦心、欽するに餘りあるもの、固より多し。然れども、後進の忠言を獻せむと欲することは、なきにしもあらず。語學書の通弊として、編次、類別、の整理、去どけなく、又、所說の、論理に合はぬこと少からず。

まづ、音論、言論、文論、いづれも錯綜して、わいだめなく、體言、用言、の別はよけれど、助辭などいふもの、塵塚の如し。代名詞、數詞、の如きは、姑く、體言中にありとして、措けど、副詞の如き、區別せずては、ゐあらぬ語も、(かざし抄)に、他語と混じて、聊、說きしことあるのみ、後の書には、さらにいひしものなし。動詞の現在、過去、未來、の如き、詳論せしは見ゐず。自動(然る詞)も、他動(然する詞)も、各自に、能相、(然する詞所相、(然せらる、詞)使役相、(然せさする詞)を生ずるに、本支

を、平等に說きなし、主語、客語、說明語、修飾語、の語脈などに至りては、更に思ひいたらぬことゝて、主語に屬する亘爾波も、客語に接する亘爾波も、主客の別なく論ずるなど、斯る識別力にて、如何にしてか、語格を說くゝ怪まるゝかりの事もあり。

但し、天保中、尾張の鶴峯戊申氏の著はしゝ語學新書は、語學書中にて、特色のものにて、維新前に、一部の文典として、說ける所具微せしは、唯、此一書なり。然れども、只管、和蘭文典に模倣せし所ありて、頗蕪なるを免れず、是れ、其說の行はれざりし所以なるか。

語學者、動もすれば、古人は、誰も、語格を誤らず、いとも〳〵、奇しく妙なり、などいふは、心得られず、口語をそのまゝに書に筆すれば、文をなしゝ世には、誤るべき謂はれなし、さらに頗贊すべきにあらず、若し誤らば、會話に用を辨せぬ人なりしならむ、言文一致なりし世と、言文兩途なる世との變遷などには、さらに心付かずして、いふやうなり。又、「我が國はことばの國、唐土は文字の國」などいふ事も、常なり、かくては、日本人は、蝦夷の如く、ことばのみにて、文字なし、支那人は、皆、筆談のみにて、用を辨ず、といはむが如し、支那人とても、倉頡以前、皆、啞なりしにもあらず、今とても、無筆なる者は、ことばのみにて、思想を通ずるにあらずや。

言語に、雅俗といふことは、貴賤の用語に就き、都鄙の正訛に就きての別にして、古今時代の別にはあらざるべし。さるに、無下の俗語にても、古書にだに用例あれば、擧けて說き、後世の造語なるは、いかなる用語にても、俗として、一切擯斥す。さて、中古の造語にいたりては、上古に對して、さらに問ふ所なし。畢竟するに、國語家の、唯一に立つるすぢは、古を尙び、後を斥く、といふにあるが如く、其研究する所も、唯、古語にありて、擬古文を作るを期して止むものゝ如し。此の如くにしては、斯道の發達普及せざりしも、ことわりにて、普通敎育に重んぜられざりしも、理なり。古格なりとて、今世に死格なるは、古書を讀まむ時に、誤解せぬまでに、心得てはあるべきなれど、これを普通文に活用せむとては、迂なるを免れず。況や、勉めて、趣味もなき僻典など學びて、博を示すが如きは、同好には、ともあれ、人情に近からずとやいはむ、文を死地に陷

るとやいはむ。日常の活語を用ゐて、日常の活文を作る、是に於てか、文、始めて用をなす、斯道は、唯、辭達而已を期待せむのみ。

○事、枝葉に渉れど、戀歌の事を論せむ。およそ、世に、戀歌ほかり厭はしく憎むべきはあらざるべし。さるに、世の國學家には、歌集の戀歌を、講義錄などに說きて、靦として耻ぢぬも多かり、其意を問へど、歌は、情に發す、戀は、人情の至極のものなれど、斯道には己むことを得ず、など答ふ、たはことといふべし。夫婦の大倫は、さるものにて、よこさまなる戀は、慾なり、喜怒哀樂の常情だに、發して節に中らざるは、これを抑制す、まして、慾をや、これを抑制し得る良能あるを、人とす、造化より、この良能を賦せられながら、適用せざるは、人にあらず、情のゆく所を恣にして、抑制する能力なきは、小兒と禽獸となり、情慾のゆく所を恣にすとも、歌はよまねどならずとにや、さらば、歌といふものは、廢絕せしめてよけむ。又、或は、歌道に、假設の空題として詠ずるのみと言はゝ、歌は、至情に發するを旨とす、との論旨と衝突するを、いかにかする、戀の名歌を詠せしめむとせば、必ず實行せしめずては能はじ、歌のみは、至情より詠せよ、實行には、謹敕なれ、とは無理ならずや。己が妻孥に、今のまのあたりに、彼の中昔の淫奔穢褻の風を實行せられなば、いかに。

万葉集、二十一代集、何集、何物語、戀歌ならぬはなし、いかに當時の風習なりとはいへ、かくまでに、恥知らずしてありしこと、今の常情もて、量られず。我が朝家の中世の瑣尾、誰かこれを慨せざらむ、其原因、あまたあるべけれど、れのれがつら〳〵思ふ所は、戀歌などや、其一大原因なるべき。盜賊は、天下を横行し、武士は、大權を偷みつゝあるに、公家は、何事をかする、汲々として戀歌を撰集し、孜々として戀歌の優劣を鬪はす、歌合に、負けたりとて、憤死せし者さへあり、何歌かといへば、戀歌なり、れのれが、人の常情をもて量られずといふは、これらのことなり。堂々たる朝家の人士なるに、戀歌、是れ命にして、朝に戀歌の佳什を詠じ得ば、夕に死すとも可なり、と思ひ居たりしさまなり、言語道斷の事ならずや。朝家、いかでか衰微せざるべき、戀歌、實に、亡國の恨なり、古來、諸集中の戀歌、悉皆、抹殺削除すべきなり。

○國語家は、ともすれば、我が國は言靈のさきはふ國なり、餘國の言語は皆缺

舌なり、などいふ、己が國の美をことあげせむの心、惡しとにはあらねど、他國の言語を究めもせず、比べもせずして、井蛙固陋の見もて、ひたふるに自尊のみするは、心なし。

人の言語は天籟なり、唯、人種異なれど、其章を成す所、異なるのみ、更に軒輊すべくはあらず、我に異なれどとて、擯斥せむか、彼も、同じさまに打ちかへして、我をれとしめむ。世界に立てる國々にて、苟も言語ありて、人々、互に、自由に自在に、思想を通ずるを得むか、その國語の成立に、差違こそあれ、いづれか、言靈のさきはぬ國とはいふべき、唯、比較博言學もて、其異同を論せむのみ。然りといへども、文化の國と、未開の國と、其語法に精粗あらむは、一國内にても、貴賤都鄙の語に、雅俗あるが如く、免れ得ぬ所なり。今、若し、世に、萬國言語の共進會などいふこともあらむには、梵語、羅甸語、佛蘭西語、まづは優等賞を得むか、獨逸語も、金牌には、漏れざらむ。歐洲大陸の語には、名詞、代名詞、冠詞、動詞、形容詞、語毎に、男女性、人稱等あるは、繁に失す、然れども、誤解を生せしめぬ利もあり。日本語、英語も、金牌に伍することを得むか。日本語は、單複數を別つに、一定の規なきなど、缺くる所はあれど、冠詞なく、男女性、人稱、なき所など、甚だ簡にして、殊に、亘爾波と、助動詞の語尾變化とに於て、大に他に優る所あり、字母も、所謂、成熟音字(Syllabic)にて、四五十に過ぎず、(電信送達などに妙なること、外人も賞する所なり、)綴字も、英佛などより、遙に煩ならず、唯、漢字を混用すると、言文兩途なるとは、大瑕瑾なり。英語は、餘國の語にくらべて、第一流の位置を占むること能はざれど、語法、簡單なれど、他國人の、學ぶに易き特性あり、これぞ、英語の、廣く海外にまで行はるゝ所以にはある。

英語には、男女性の如きは、唯、代名詞にあるのみ、又、冠詞といふも、實は、形容詞なるを、他に擬して立てたるにて、英語に、冠詞はなきなり。

魯西亞語も、次流にはあらぬ由なれど、今尚、學者の語法を制定しつゝある發達の時代にあり、と聞けど、金銀牌の間にやあらむ。支那語は、單音語にして、語尾の變化といふもの、さらになし、實に、世界に獨特なり、審査官の、考へを惱ますものなるべし。其他の國語は、余が深く知らざる所なれど、言はず。但亞米利加土人の語の如き、すべて、名詞のみにて、動詞も、形容詞も、何もなしと

いひ、なにがしの國の宣教師が、新約全書中の一動詞の意を譯述するに、十六名詞を連ねて、始めて譯し得たりと聞く、かゝる國語は、縱ひ、思想を通ずることを得といふとも、これらをや、言靈のさきはゝぬ國とはいふべき、褒狀にもあづからぬなるべし。

○漢學にのみ長け、或は、洋學をのみ修めたる人の套語に、日本文は、語法、粗にして、精微緻密なる理論文など、記し得ず、腰、弱くして、雄渾豪岩なる辨論文など、作りなす、といふたはけたる言といふべし。この論を破らむには、まづ、談話の語につきていはむ。われはよそ、日本語は、講談に、精密なる學術の奧蘊を、言ひ取り、言ひまはされぬか、演說に、雄辨滔々、人をして、聳動傾聽せしむること、能はざるか、よもさる事はあらじ。この談話の語の、あるあらむ、これを書に筆せられず、といふ事やあるべき。己が未熟にて、善く文を作り得ぬにてそあれ。

そも、我が國にては、古來、男子の文章とては、漢文と限られて、國文は、昔より、學校の教科に立てられし事なく、正しく教育に上りし事なし。されど、世に、學者の鍛錬に成れる文とては、古今來なしといふべく、稀に、世にもてはやす國文とては、多くは、女子のはかなきすさびなどに成れるものなり。文の弱きにはあらず、作れる人、寫せる材料の弱きなり。扨、又、其緻密なる所にいたりては、數百千年前の人情世態を、今のまのあたりに見るが如きもの、古假名文に、自らあるなり。漢文訓點讀下し文のみ學び得て、詰屈なる文の外は、作り得ず、その詰屈文をもて、日本文と心得居る人とは、談ずること能はず。

歐陽修が醉翁亭記の事を、朱熹が記せるに、初說滁州四面有山、凡數十字、末後改定、曰環滁皆山也五字而已、如尋常不經思慮、信手所作、などあり。又、白居易は、詩文成れる毎に、無學の婆に讀み聞かせみて、その解し得るを期せりとかいふ。かゝる大家輩の、かはぎまでに推敲焦思して作り成せるには、精緻なるも、雄渾なるも、出で來む事、ことわりならずや、泰西の名家の名作といふものも、かくぞあるべき。國文に、古來、かゝる名家の、かくまでに苦心して作り成せるもの、ありや、なしや、れのれは、なしといはむとす。されど、國文といふものは、古來、いまだ、文章家の鍛錬琢磨を歷たる事なく、いまだ、發達の道につ

かずしてありしもの、ともいふべきなり。國文の道に盲なりながら、徒に批難するたはことは、さるものにて、鍛錬をも歴ず、發達を導きつる事もなき文に、鉄點を論ずるは、いはれぬことなり。既に、講談に、演說に、自在なる言語のあるからは、切瑳琢磨もすべく、鍛錬推敲もすべく、語法、語格の足らはぬあらば、人爲もて創制もすべく、かくして、學者の工夫を積まば、何ぞ、漢文をも凌駕し、洋文をも壓倒するにいたらぬ事のあらむ、文の罪にはあらず、人の罪なり。

○漢文とても、洋文とても、草昧よりして、後の如くなりしにはあらず、皆、數千百年間、世々の名家の手を歴て、法格の創制もありて、今のさまにはなれりしなり。支那にても、西洋にても、文字を改制せし例は著し。言語文章の法格の足らはぬを、學者の、人爲もて完備せしめし事も、往々、その例あり。

數年前、獨逸老帝「ウヰルヘルム」第一世陛下の崩せられし時、我が政府より、世に布かれつる告文に「ギーヨーム」第一世、云々とありき(獨逸にて「ウヰルヘルム」といひ、英國にて「ウヰルレム」といひ、佛國にて「ギーヨーム」といふ、同じ)そのをり、己れ、この事を識者に問へるに、歐洲各國の公文には、佛文を用ゐるなり、これも、獨逸政府よりの公報を、そのまゝに譯せられたるにぞあらむ、と答へぬ。公文には、歐洲各國にて、佛文を用ゐるといふ事、われのれも知れり、さるにても、皇帝の御諱なる固有名詞まで、他國の語、殊に敵視せる國の語を、もちゐるとは、あまりに心ゆかぬことゝ思ひて、再び識者にむかひて、ろも、歐洲各國にて、佛文をもちゐるは、佛國は、歐洲文明の中心なり、との故にてもあるか、はた、その國、歐洲にて、最も强盛なり、との故にてもあるか、と問へるに、いやと、今の佛國の文法は、百數十年前に、學者の改作に成りしものにて、その法格の端嚴なること、各國語の第一にて、文意の、兩樣に誤解せられむやうの事、絶ゐてなけれど、各國、これを、公文、條約書などにもちゐるなり、と答へぬ。不完全なる言語文法も、人爲もて補正せられて、終に、歐洲各强國をして、靡然として遵奉せしむるに至る、即ち、佛語の威力は、能く、全歐を制服せしなり。學者の力、語法の學、豈に、輕々に視るべけむや。

和蘭國の如きも、初は、佛語、獨逸語、を混用して、もとゐとすべき國語なかりしに、これも、百數十年前に、其國の學者、相集りて論ずるやう、已に獨立國とある

上は、一定の國語無くてやは、創造すべきにこそ、とて、やがて、羅甸文法に據りて、新に文法を制して、これを國語と立てつ。初は、行はれがたき事情もありしかど、普通教育に強行して、老少新陳の交替せるに及びて、終に、今の如くにはなりきとぞ。されど、和蘭の文法も、甚だ完備せるものなり。因に云、當時名詞の格をだに、まづ、羅甸の如く、六種に立てゝ、施行したりしに、實際に使用するに至りて、差支ふる事ども多かりしかど、更に審議せしに、蘭語には、六格を具へぬ事と決して、減じて、四格としたりとなり。以上の事は、和蘭の某の辭書の序に見えたりとて、往年、故箕作秋坪先生より聞ける所なり、洋文法にのみ據りて、和文法を論ずる者、留意すべき事なり。

又、魯國の如きは、今、尚、法格の一定せぬ語ありて、文法家、より〳〵考へて、定め得たる時は、政府よりして、賞典を給することありと傳へ聞けり。

我が文法の上にも、人爲もて補足せまほしき事、固より多かり。此の別記の第一〇四節なる中止法と名づけたる動詞の變化など、文法家の、最も考ふべきものにて、又、第一六一節の現在、過去、未來、の類別の如き、古例に合へりや、合はずや、は措きて、余がおふけなくも、大かたに制定したる、あながちなるわざにもあらじかし。

〇余が淺學なる、國語に於けるは、いふまでもなし、外國の文法、亦、固より、通曉する所あらず。印度、希臘、羅甸、さては、歐洲各國語、遍く渉獵する所あらむには、なほも思へど、力及ばず。碩學に質すことあらむとすれど、いかにせむ、洋學家は、さらに國文法を解せざれど、質す所、要領を得ず、國語家は、洋文法に於て、充耳の如く、其答ふる所、肯綮に中らず、唯、懊惱するのみ。洋學家に、國語を學ばせむよりは、國語家に洋文法を學ばせむ。あはれ、伊勢の學醫、若狹の學僧を、地下より起して、一部の洋文典、讀ませたらましかどと、毎に歎息せずはあらず。

〇漢文作れる者に、和臭の用語、文字の顚倒、など告ぐれど、其人、赧然として謝し、洋文記せる者に、法格の違ひ、綴字の誤、など敎ふれど、赤面して改むるは常なり。さるに、國文書ける者にいたりては、一片の書翰證書などに、豆爾波、假名遣ひ、の破格あるを諭せど、「譯サヘワカレバ、ドウデモ、イヽヂヤナイカ」、など

冷語するも、亦常なり。俚諺にいはゆる隣の糂粥味噌とやらむにて、狎れて
は、内を輕んじ、好奇の心にては、外を重んず、事體をもわきまへず、名教にもか
ゝはる、といふべし。譯だにわからぬところ、いふな
れ、己れのみ、わかる〳〵と思ひの外に、人にはわからぬが多きなり。今も、法
廷にて、契約書上の、語格解釋につきての爭論も、往々あるなり、外人の内地雜
居も、兩三年の後にせまれり、「ドヴデモ、イヽヂヤナイカ」の契約文など、寒心す
べきことならずや。

「立合ヲヿヲ要ス」と記せば、條件となりて、必期す、「立合ヲヿヲ得」は、權理に
屬して、我が自由なり、「立合ヲベシ」は、條件とも、命令ともならず。是等の
事、法律の術語にはあれど、普通にも記するものなり、漫然たる書狀文など
も、證據物件となることあり。

○國文語格を冷視するは、洋學者に多きが如し、學位などある人にさへ、少か
らず。さて、その書きたるには、一通の書狀にすら、文を成さず、用を辨せぬが、
往々あり。平生、筆執るに懶く、必用あるにせまられて、譯文など作るにいた

りては、學生が、教室にて、洋文讀本を、直譯に讀むが如きさまなる、多かり。常
は、語格などとて、冷罵はするもの〻、さすがに、人に示さむには、耻かしく、こゝ
にいたりては、かの冷罵せし國學者、漢學者にすがりて、潤筆出して、添削を請
ふ、いかに不自由なるにか。世に、翻譯の良書の乏しきも、多くは、洋學者の、文
つくり得ぬに因る。腹には、學もあり、說もあり、口には、善く辨ずるを得なが
ら、さて、文には作られずとは、筆の先の啞とやいはむ。何れの國にか、學士な
どいふ名ある者の、己が國の普通文、書き得ずといふ事のあるべき。

○國文の語格のくだけたる、支離滅裂せる、今代のはどなるはあらじ。其原
因をたづぬるに、多年の言語の變遷にも因るべく、學校の教育なかりしにも
因るべしといへども、其、大原因は、全く漢文の訓點にありて、その禍源となり
しも、近百年以來輩出せし訓點にあり。

四書五經にても、道春點などいふものは、訛れりし所なきにしもあらねど、な
ほ、古の菅家江家の點の遺流を受けて、捨假名、振假名に、自、他、能、所、過去、現在、未
來、などの語格、依然として存せり。然るに、かの寛政の三助先生の頃よりし

て、古訓點の振假名を捨てゝ、專ら音讀すること起りぬ。さるは、同訓なりとて、異字異義なるが多きを、唯、訓にて口拍子に覺えてのみありては、異字ある方に、注意薄くなりて、漢書を讀むに、異義あるを混同して解し、漢文を作るに、文字の顚倒、又は、和臭の用語など起る、そを防がむとし、矯めむとするよりのわざなりしと聞く。さて此の三先生の頃よりして、漢學漢文の、大に進みて面目を改めしことも著し。漢文專攻の上に就きては、さてもあるべし、(音讀するのみにて、漢書を解し、漢文を作らるべきにもあらねど)されど、これよりして、古訓點といふものは、破れそめぬ。

一旦破壞のいとくちを開きしより、後の儒家の何點何點といふものにいたりては、古訓點の振假名も、捨假名も、甚しく抹殺して、己がじゝ、あらぬものに改めて、(國學とては、さらにせざれど、さらに法をも格をもなさぬものを作り出でたり、その甚しきものを、一齋點なりとす。これぞ、語格破壞の禍源罪魁にはある。されど、當時、なほ、古訓點にて敎授する者もありて、後進、文彥が如きも、少年の素讀には、古點に振りしこと、多かりしなり。さるに、佐藤一齋先生、一代の鴻儒とて、重く幕府の昌平校に用ゐられ、多く諸侯に聘せられて書を講じ、門人、三千人に至り、齡、八十八をかさねたり。(安政六年歿) 師作りて、弟子述べ、爾來、全國の訓點、一齋點に風靡して、火の原を燒きて、撲滅すべからざるが如く、災害、終に海內にわたりぬ。然して、此事、今より、僅に六七十年前にあり。

漢學者とても、往時は、私に國文を攻めて、漢文作れど、漢文の美を成し、國文作れど、亦、優に其境に入れり、白石、鳩巢、二先生の文など、想像すべきなり。寬政以來、漢學專攻の者、先輩の如きたしなみなきのみならず、漢文作るには、國文は害なり、などいふ妄念を抱きて、却て擯斥することとなりて、必用ありて假名交り文を記す時は、(國文は、固より、作り得ねど、)己が唯一と學び得たる漢文讀下しの文のみ記すこととなり、其訓點は、かの破格なるより外に知らねど、文は、遂に支離となりて、さて、此末流に成育せる漢學書生輩の、圖らずも、天下の大權を執るに至りて、禍根、愈、固く、遂に、大日本公行の文體とはなりて、かくて、敎育は、全く塗炭の中に陷れるぞ、實に終天の遺憾なる。されど、今代の文

の、支離せるは、全く、近世の漢學者と新訓點との罪なり、と定むべきなり。

○人種、異なれど、言語の構成も、固より異なるべき理なれど、何れの國の文なりとも、原文を學ぶむには、原文にすがりて讀みつけむは、己むことを得ぬわざにはあれど、その讀みつけに、義を成さぬものゝ出で來むは、論なきなり。洋文直譯讀に、義を成さぬあるは、誰も知りてあれど、そを國文に移す時は、別に、義譯するを常とせり。漢文の訓點は、猶、洋文の直譯讀の如し、その訓點に、義を成さぬこと多きも、知れわたりたることなり。さるを、義譯の道を取らず、直に讀下しに記して、恬として怪まぬは、洋學者に耻づべきなり。

漢文訓點の義を成さぬ例、ひとつ、ふたつを言はむ。[此類、實不一而足]の訓點の如き、更に義を成さねど、原文にすがらむには、外に訓ずべきやうなし。されど、原文に就きて訓讀する間は、なほ[不]の字、[一而足]の上に居て、三字をつらねて打消すべきこと見ゆ。[マダ、外ニモ多クアル]の意、知らるれど、[一ニシテ足ラズ]と讀下しに記す時は、國語の語格にては、[マダ、外ニモ欲シイ]の意とならでは、解せられず。刻苦して漢文を學習せし上の人ならで、原義を解しもすべし、されど、さる人には、漢文ながらにてあれ、假名交りに書下すに及ぶ、書下すは、漢文解せぬ人にも讀ませむが爲なるべし、然る時は、解せられず。

是等は、實に、ひとつ、ふたつのみならず、など、義譯すべきなり。

[不雹氷炭之差]などはよけれど、[氷炭不雹]などを、[氷炭、雹のみならず、甚しきは、氷炭、雹ならず]など記す時は、[氷炭ハカリデナイ、氷炭ハ、尋常デナイ、無敎育の者には、氷モ、炭モ、無代價デハナイ]の意ならむなど思はむ、滑稽がましくはあれど、これより外には、解せられず。[雹、猶、止]とありて、[不雹]は、熟語にして、二字にて[何止]、或は、[不但己也]の意を成し、支那語にては、倒置しても、略語ありても、通ずれど、これを譯せむには、[雹ニ、氷ト炭トノ差ヒノミナラズ]とせど正しく、己むことを得ずと、[氷炭、不雹ナリ]と讀みてあるべきなり。

さて、右等の訓點書下し文は、不都合にはあれど、強ひて誤解の方(原文の意に對して)に解せど、なほ、國語の語格を、成すべし。然るに、新訓點の甚しきものにいたりては、正解にも、誤解にも、語格にも中らぬあり。古點には、[有顏回者]とあるを、新點には、[有顏回者]と改めたり、[顏回ニアル者アリ]といふこととな

りて、いかにとも解せられず、此類、甚だ多し。

「視而不見、聽而不聞」の古訓點は、他動を翻して自動に移し、意義、分明あれど、新點の「視而不見、聽而不聞」は、他動、終りて、他動に移り、いかなる義にかさとられず。「子路有聞未之能行唯恐有聞」「子路有聞未之能行唯恐有聞」「難乎免於今之世矣」など、皆然り、これを書下しにして、何の意義をか成さむ、今の支離の文、多くは、是れなり。

上陳の如きをもて、一國の通用文として、筆者も、善く思想を盡せりと思ひ、讀者も了解せりと思ひてあること、さても、不可思議なる世の中なる哉。

○英國の國語の如き、太古の「ケルテック」語脈なる「ブリトン」語「スコッチ」語、なほは姑く言はず、羅馬に征服せられて、羅甸語に一變し「アングロサクソン」人に侵入せられて、更に其語に變じ「デーン」人種入り「ノルマン」人種入りて、各々、其國語を輸入して、舊國語と混用し、侵入の人種は、その多數なると、勢力あるとによりて、輸入せし語も、其語尾變化、單複數等の法までも、各、其母國のまゝにて横行して、齊しく動詞にて、其變化に、規則といひ、不規則といふなど、實に雜駁を極む。世々の學者の力にて、辛うじて、今の如く、消化混一せしめたれど、其國語の成立に至りては、獨立國の體面に、耻かはしきものなり。

我が國の如きも、千有餘年來、朝鮮語、漢語、梵語、洋語等の混入したる、固より多し。然れども、外國語、いかに入るとも、新入事物の名目として、名詞にのみ用ゐて、更に、其他には竄入せしめず、動詞の活用、亘爾波、其他にいたりては、嚴として、本國の語格語脈を固守して、決して犯觸だにせしめず。千餘年、然り、今より後、千萬年に至るとも、依然として、此の如くなるべし。國體も、國語も、共に他の侵犯を受けしことなく、共に金甌無缺なること、神明の加護あるが如し。然るに、此の無缺の金甌に傷つけしものこそ起りたれ、そは、外國よりせしにはあらで、犯人は、蕭墻の中より出でたり、剩へ、文學界より出でたり、即ち、漢學者の新訓點の、語格語脈まで破れる、これなり。後進として、先哲を非議すること、愼ましくはあれど、斯道のために憂憤するあまり、もだしてあること能はず。

○今の普通の文體は、漢文訓點讀下し文なり。而して、文の、世に行はれて最

も効力を有し、最も勢力を有するは、教科書と、新聞紙の社説となり。斯文の支離を矯正せむ道は、漢文教科書の訓點を改むるにあり、新聞記者に、語格の注意を促すにあり。新聞をして、今の急に當らしめ、教科書をして、漸を後進に期せむ、更新の功を遂げむこと、難しといふべからず。支離文の病根に就きて、余が診斷は、彼の如く、處劑は、此の如し。

○一國の國語は、外に對しては、一民族たることを證し、内にしては、同胞一體なる公義感覺を固結せしむるものにて、即ち、國語の一統は、獨立たる基礎にして、獨立たる標識なり。されど、國語の消長は、國の盛衰に關し、國語の純、駁、正、訛は、名教に關し、元氣に關し、國光に關す、豈に勉めて皇張せざるべけむや。

○余は、「かなのくわい」發起者のひとりにして、持論は、言文一致にあり、是等の事、こゝにいはむと欲すれども、中古言文典には、とて、姑く措く、いつか、別に、世の國語家に質すことあらむ。

明治丙申臘月

仙臺　平文彦

廣日本文典別記

第一節

（本書、第二節）コヽニイヘル言語ハ、「ことゞ」トモ「げんぎ、よ」トモ訓ムベク、其意モ泛々、單語（Word）トモ、說話（Speech）トモ、國語（Language）トモ解シテ、可ナリ。後ニイフ國語モ、「くにことば」トモ、「こくご」トモ訓ムベシ。

○凡、音者、生人心者也、情動於中、故形於聲、聲成文、謂之音、（禮記、樂記）聲成文、謂之音、音發爲言、言之成文、爲詞。聲音ハ、言語ノ材料ナリ、言語ハ、思想ノ符號ナリ、談話ハ、人々、思想ヲ相通ズル具ナリ、言語ノ、象ニアラハルヽモノヲ、文字トス。

第二節

（本、第二節）平家物語、敵、平等院に、と見てんげれど、薙刀にて、切つて落す、三十四差いたる箭、腹に、一つゞ殘つたる、馬の足の及ぶ程は、手綱、かいくつて泳がせよ、涙をはらゝと流いて、人相もかんの事なれど、馬をさつと打入れたれど、皆、口語ノ調ナリ。

第三節　○洋語ニ所謂Grammar,モ常ニ文法ト譯セラルレド、各國多クハ、言文一致ニテ、Grammar,ノ語義ハ「言語(口語)ヲ正シク述ベ、又、正シク書クコト」ナレバ、文法ト言ハムハ妥當ナラズ、寧、語法トイフベシ。サレド、我ガ國ニテハ、法則ヲ、中古ノ言語ニ取レル(話頭ニハ用ヰズ)文章ニノミ用ヰレバ、言語ヲ次トシ、文章ヲ主トシテ、文法ト稱シテ可ナリ。

第四節　○開明ノ趨勢ハ、長ク言文兩途ノ弊習ヲ持續スベクハアラジ、到底、言文一致ニ復古セズハアルベカラズ。今ノ口語ニモ、固ヨリ法則アリ、敎ヘザレバ誤ラム、口語ノ語法モ、制定スベキナリ。然レドモ、各地、皆、其法則ヲ異ニスレバ、何地ノモノヲカ基(Standard)トスベキ、許多、偏鄙ノ土語ヲ斟酌スベクモアラズ、サラバ、東京語ヲ採ラムカ、西京語ヲ採ラムカ、兩語ヲ斟酌セムカ、唯、學士ガ論定スル日ヲ待タムノミ。

第五節　(本、第七節)儀禮、聘禮ニ「不及百名書于方」、註ニ「名書、文也、今謂之字」、疏ニ「名者、即、今之文字也。」

第六節　(本、第九節)平假名、以呂波歌、共ニ、空海ノ作ナリトイヘド、假名トイフモノ、空海ノ以前ニモ、アリシヤウナレバ、信シ難シ、尙、後ノ第八節ニイフベシ。

第七節　○今樣トハ、即チ、七五、七五ト、八句ニ詠ム體ノ名ナリ、以呂波歌ノ意ハ、佛家ノ涅槃經ノ四句ノ偈ナル「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」ノ趣意ヲ、眞言ニ演ベタルモノニテ、即チ「色は匂へど、散りぬるを、(諸行無常)我が世誰ぞ、常ならむ、(是生滅法)有爲の奥山、今日越えて、(生滅滅已)淺き夢見じ、醉ひもせず。」(寂滅爲樂)ノ意ナリト云フ。「有爲の奥山」トハ、上四句ヲサシテイフ、有爲ノ法ノ至極ハ險難ナレバ、奥山ニ譬フ、「今日越えて」トハ、有爲ノ法ハ、皆、磨滅ニ歸スルコトヲ知リテ、還源ノ思ヒヲ發シテ、無爲ヲ願フ時ヲイフ、イザ、今日越エテ、ト誘フ意アリ、「淺き夢見じ」(未來ナリ)トハ、世間、淺近ノ生死ノ夢ヲ、永ク見ルマジトナリ、無明ノ酒ニ醉ヒテ、生死ノ貧里ニサマヨヒテ眠ルハ、一向ニ迷ヒナリ、コレ、「醉ひもせず」(現在ナリ)ノ意ナリ、云々ト、或書ニ見ユ。

(本、第一〇、第一一節)此ニイフ段ヲ、列ト名ヅクル者アリ、然レドモ、動詞ノ語尾ノ活用ニ、四段、上二段、下二段、ナドイフハ、即チ、此ニイフ段ナレバ、段トイフベキナリ。(列ハ、縱行ノ稱トモスベシ)「ネ」ハ、古ク用ヰラレタリシニ、中絶シテ、近頃、

第八節　再ビ世ニ用ヰラル「ヰ」ハ、本居氏ノ作ナリ。

（本、第一四節）片假名、五十音圖、共ニ、世ニ、吉備大臣ガ作ナリト言ヒ傳フ。然レ𪜈、五十音ノ排列ノ狀、天竺ノ悉曇章（シツダンシヤウ）トイフモノニ據リテ、邦人ニ固有スル音ソミヲ擧ゲテ、作リシモノヽ如シ、悉曇章ハ、大臣ノ時代ニハ、未ダ我ガ國ニ傳ハラズ、弘法大師、入唐シテ、始メテ梵音ヲ學ビテヨリ、傳ハリタリト言フ、然ルトキハ、五十音圖トイフモノハ、密徒ノ作リシモノナルベシ、又、片假名ノ創製ノ時代モ、平假名ヨリハ後ニテ、初ハ、平假名ノ如ク普通用ノモノニハアラザリシガ如シ。（をこと點）ノ用ナド、其初ナラムカ、（をこと點）ハ、漢字ノ肩ナドニ差ス、サレバ（かたかな）ハ、肩假名ノ義ナラム、トイフ說モアルナリ、）

平假名、片假名、共ニ、古クハ、別體ノモノ、許多アルヲ見レバ、其初ハ、一人ノ創造ニハアラズ、唯、誰トナク、草書、楷書ヲ、書寫ノ際ニ省略シテ用ヰタルガ、年所ヲ歷ルニ隨ヒテ、其中ノ最モ平易簡便ナルモノニ、一定シタルモノナルベシ。

尙、平假名、片假名ノ作者、字體ノ起原、別體ノ假名、及ビ、以呂波歌、五十音圖、等ノ委シキコトハ、「假名本末」、其他ノ諸書アリ、就キテ見ルベシ。

第九節　（本、第一八節）長呼ノ符ナルーハ、元祿中發刊ノ「華夷通商考」ナドヨリ見ユレバ、外國語ヲ寫スヨリノ創作ナルベシ。（彼得ハ、洋人ノ名ナリ、）白石新井先生ノ「東音譜」ニハ、此ノ長呼ノ符ヲ「アルコル」「ビタ」ナド作リテ、アリ、洋字ノ長呼符ノ、o、u、ナドニ似テ、亦、面白シ。

一〇節　（本、第二〇節）聲帶（セイタイ）、又、聲絃（セイゲン）トイフ、氣道（喉頭ヨリ、氣管ニ通ズル所）ノ內方、側壁ニ橫タハル彈力性ノ膜ナリ、常ニハ、弛緩シテ、孔ヲ存シテ、空氣ヲ通ズレドモ、聲ヲ發スル際ニハ、緊張シ、相接近シテ、其隙ヨリ、息氣（イキ）ヲ强ク出シ、聲帶、顫（フル）ヒ動キテ聲ヲ成ス、猶、琴ヲ鼓スレバ、其絃、震動シテ、音ヲ發スルガ如シ。

一一節　（本、第二四、第二五節）ドハ、彈舌ノ發聲ニテ、國音ノ「ら」「り」「る」「れ」「ろ」ニ合ハズ、ドモ、歐洲大陸ノ發聲ニテハ、「ス」ノ純唇ナルニ合ヘド、英ノ唇齒ナルニハ合ハズ、其他ニモ、適合セザルアリ、サレド、此ニハ、姑ク其近キモノヲ借ル。

○以上、聲音ノ解、粗ナルニ失スルガ如シ、然レトモ、文典ノ範圍內ニテハ、此ノ如クニシテ、足レリ、深ク析ツニ及バズ。

一二節　○從來ノ音韻家ニテハ、喉、（阿行、也行、和行）舌、（多行、奈行、良行）牙、（加行）齒、（佐行）輕唇、

(波行)重唇(末行)ト類別セリ、然レドモ、其性質分類ヲ誤レルガ如シ、阿行ノ音ハ、氣息、聲帶ニ顫動ヲ起セバ、單純ニ發ス、喉ノ機關ニ關係ナシ、又、和行ハ、唇音ナリ、加行モ、牙ニ關係セズ。

一三節　(本、第二八節)一語ノ首ニ、良行ノ音アル國語ハ、「るつぼ」(坩鍋)アルノミ、コレハ、「いるつぼ」(錢壺)ノ略ナリト云フ。「らんりようの、舞のてぶりの、るゐなきに、れいならねども、ろく賜ひけり。」ナドハ、皆、漢字音ノ語ナリ。

一四節　(本、第二九節)母韻トハ、發聲ノ韻トナリテ、音ヲ成サシムル本ナルガ故ノ稱ナリ。サルニ、阿行ノ音ハ、噫、得、御、ノ如シ、固ヨリ、單獨ニモ發シ、一意義ヲモ成シテ、發聲ノ韻トナルト、否ラザルトニ關セザルヿアリ、サレバ、其音ノ本分ニ、別ニ、單純音ノ名ヲ付セリ。

一五節　二語ノ、合シテ一語ノ意ヲ成スヲ、熟語トイフ、發聲ト母韻ト、合シテ一音ヲ成スヲ、成熟音ト名ヅケタルモ、其意ナリ。(成音トモイフベケレド、清音ト紛ヒ易シ、)

○支那ノ韻書ニ、三十六母(亦、發聲トモイフ)アリ、即チ、本書ニイフ發聲ナリ、又、本書ニイフ母韻ヲ、單ニ韻トイヒ、母ト韻ト合シタルヲ音トス、是レ、略、本書ノ成熟音ニ當ル。

一六節　○梵字ニテハ、本書ノ單純音ヲ、悉曇(成就ノ義)トイフ、十二字アリ、(長短各五韻、并、空、涅槃)發聲ヲ、體文トイフ、三十五アリ、(牙、齒、舌、喉、唇、ノ五音聲、各、五、別ニ遍口聲、十、)字母ノ數、合シテ、四十七ナリ、又、摩多トイフモノ、十二アリ、是レ、悉曇ノ半體ノ點畫ニテ、體文ニ加フルトキノ用トス、即チ、本書ノ母韻ニ當ル、三十五體文ニ、十二摩多ヲ相加ヘテ、初章、四百餘ヲ成ス、是レ、成熟音ナリ。

一七節　○英ノ Consonant ヲ、子音、又ハ、父音ナド譯スルアルハ、非ナリ、Consonant ハ、母韻ト合セザレバ、音ト成ラズ、サレバ、音ノ字ヲ當ツベカラズ。(發聲ノ聲ノ字スラ妥ナラズ、サレド、佳字ニモ思ヒツカネバ、姑ク、韻書ノ語ヲ借リテ、音ト別テルマデナリ、)又、父音、母音、子音ナド、緣アリゲナル字ヲ取テ、命名スル者アリ、コレハ、漢字音ノ反切ニ、父字、母字ナドイフ俗稱アルニ因レルニヤ、(韻書ニハ、却テ、發聲ノ事ヲ[母]トイフナリ、)或ハ、母韻ノ[母]ノ字ヲ、女親ノ義ト心得テノ思ヒツキナルニヤ、サレド、母韻ノ[母]ノ字ハ、必シモ女親ノ義ニアラズ、音ヲ成ス本ノ

意ニテ、莊子ニ氣母トアルハ、元氣ノ本ノ意ニテ、又酒ヲ釀シ成ス材料ヲ、酒母(酴)トモイフガ如シ。父、母、合體シタリトテ、子トハナラズ、依然トシテ、親ナラズヤ。

一八節　(本、第三三、第三四節)也行、和行ノ音ハ、母韻ノい、う、ヲ發聲ノ如クシテ、二母韻(拗音ノ如ク)重發シ、謂ハユル二重韻(Diphthong)ヲ成シテ、即チ、半母韻ヲナスガ如シ、仕合(Siawase)ノ、しやはせ(Siyawase)トナリ、入合(Iriai)ノ、いりやひ(Iriyai)トナリ、工合(Guai)ノ、ぐわい(Guwai)トナリ、彌生(Iyaoi)ノ、やよひ(Yayoi)トナリ、黃瓜(Kiuri)ノ、きゆうり(Kyuri)トナルニテ、知ルベシ。半母韻ハ、Semi vowel, ナリ

一九節　○也行ノ[え]ハ、今モ、口ニ言ヒ分クルコトヲ得ベク、「はえる」(生)「みえる」(見)ナド、yeト發音ス。(洋人ノ、「蝦夷」、「江戸」、又ハ、「左へ」、「右へ」ナドノ音ヲ、常ニ、yeト綴リテ記スハ、然聞ユルニ因ルカ)

○然レドモ、「い」、「う」、「を」の三音、太古ニアリテハ、或ハ、其發音ノ別アリシカハ、知ルベカラネド、載籍アリテヨリ、此ノ三音、己ニ、各、字形ヲ別タズ、伊(阿行)以(也行)、衣(阿行)延(也行)有(阿行)于(和行)等、支那原音ニテハ、正シク別レタレバ、漢字渡來ノ當時、邦人ノ發音ニモ、其別アリタラムニハ、一々、用サ分クベカリシニ、古事記、日本紀、萬葉集等ノ眞名ニ、混用シタル例、比々アリ。降テ、以呂波歌ニ加ヘズ、五十音圖ニハ唯、阿行ノ字ヲ以テ、空間ヲ補塡セリ。斯ク、古今相通シ來リテ、事ヲ闕カザレバ、其相異ナルベキ理ハアリトシテ、字ハ、別ツコトヲ要セズ。然ルヲ、今、將、別ニ其字ヲ作爲スルモノアルハ、事ヲ好ミテ煩ヲ求ムルモノナリ。

二〇節　(本、第三五節)烏、詠、榮、垣等ノ原音ハ、「ゑ」、「ゐ」、「ゐん」ナルヲ、中古ノ假名文ニ、多ク、「えばうし」(烏帽子)「えいが」(詠歌)「えいぐわ」(榮華)「えんが」(垣下)ナド記シタルヲ見レバ、(垣下ナドイフ語ノ解ヲ見ムト欲セバ、余ガ著ハセル辭書言海ヲ見ルベシ、篇中ノ難語、スベテ然リ、)是等ノ音モ、夙クヨリ、發聲(w)ヲ失ヒタルヲ知ル。サレド、「わ」ハ、今ニ至ルマデ發聲ヲ存シ、且、「うを」(魚)花を見る」ナドノ「を」ハ、今モ、尙、發聲(w)ヲ存シテ發音スルガ如シ。

二一節　(本、第四二節)英語ニ、s、f、ノ、他音ノ下ニテ、z、v、ニ變ズルコトアルハ、連濁トモイフベキカ。

二二節　(本、四六節)東音譜ニ、拗音ヲ記スニ、「ヤ、ユ、ヨ、キ、チ、シ」ノ如ク創意シ、國學家ノ翻譯ニ「キャ」「シュ」「チョ」ナド、工夫シタルモ見ユ。

二三節　(本、四七節)古キ假名書文ニ「ぐ、ゐんじ」(源氏)「へんぐ、ゐ」(變化)「はく、ゐき、やう」(法華經)「く、わんぶつ」(灌佛)「し、やうごん」(莊嚴)ナドモ見ユレド、又「儒者」「文珠」「承和菊」「朱雀」ヲ「ずさ」もんず」「そがぎく」「すざく」ナド記シタルモ見ユ、乙ナルハ、拗音ヲ國音ニ和ラゲテ、直言ニ呼ビタルモノナリ、ナドモイヘド、乙ヲ和ゲデ、甲ヲ和ラゲザリシハ、如何ナル理ニカ。或ハ、乙ナルハ、古ヘ、拗音ヲ記スベキ假名用法、完備セズ、相通シテ記シタルヲ、後マデモ襲用シタルニハアラジカ。又「ぐ、ゐんじ」「へんぐ、ゐ」「はく、ゐき、やう」ナド、今ハ直音ニ呼ビテ、假名モ「げんじ」「へんげ」「はけき、やう」ナド記スヲ常トス。抑モ、前ニモイヘル如ク「じ、ゆし、や」(儒者)し、「ようく、わぎく」(承和菊)ヲ「ずさ」そがぎく」又ハ「がふく、わん」(合歡)ヲ「がふかのき」「ゆ、ぎ、ぎゐ」(雪消)ヲ「ゆ、ぎ、げ」「ゆくみえわり」ヲ「ゆくめり」ナド、古人ハ、約メティヒキ、サレバ、今、東京人ノ「やかん」(藥罐)かんのん」(觀音)かじ」(火事)けんか」(喧嘩)又ハ「けゐる」(消)めえる」(見)ナド言フモ、古今、同ジコトノヤウナリ。

二四節　(本、五一節)音ノ清、濁、直、拗、ノ區別ハ、假名ニ、標點ナキト、アルト、一字ニテ寫スト、二字ニテ寫ストニ從フ、是レ從來ノ習慣ナリ。然レドモ、音ノ本性ヲ、學理ニツキテ論ズルトキハ、合ハスコトモアリ、(殊ニ、拗音ナドイフ類別、甚ダイカヾハシ、)此ノ四種ノ音ノ、各自ニ獨特ノ音ナルベキハ、漢字、羅馬字等ニ、各別ニ、其形アルニテ知ラル。サレド、文典上ニ、唯假名ノ讀法、用法ヲ說カムニハ、清、濁、直、拗、ノ別ニテモ足ラム、因テ、今ハ、姑ク、習慣ニ從ヘリ。

二五節　(本、五二節)嘗テ片田舍ノ招牌(カンバン)ニ「んどん」(饂飩)トシタルヲ見タリ、一噱。「ん」ノ聲ヲ、俗ニ「撥(バチ)ス」トイフ、サレド、ソハ「ん」ン」ノ末畫ノ形ニ就キテイフナルベシ、聲ノ狀ハ、「撥ス」ト云ハムヨリハ、「壓(ガ)スガ如シ」ト云フベシ。

二六節　(本、五八、五九節)案ズルニ、梵音渡來ノ時、呵吽(アウン)ノ音ナド、古人モ、傳習シ發音シタルナルベシ今モ、小兒ノ語、形狀、音響、ナドヲイフ語ニハ、鼻聲、促聲、甚ダ多キヲ思ヘバ、古ヘトテモ、此ノ聲アリシナルベシ。サレド古ヘ、此ノ聲ヲ寫スベキ字ノ無カリシカバ、「に」「ニ」「无」「毛」等ヲ借リテ、通用シ居タルナラムカ、宇治拾遺、「實子にあらざる人、實子のよしたる事」ノ條ニ「卑下(ヒゲ)なるこゑにて、ひといらへ

て立ちぬ」(不服ノ返辭ナリ)ナドアルモ、今人ノ諾聲ニ發スルガ如ク「うん」ナリシヲ、字ナケレバ「む」ヲ假リシニテ、眞ニ「む」トハ言ハザリシナラム「かみかせ」(神風)「たかな」(筍)ノ「かむかせ」「たかむな」ナドモ、聲ハ「ん」ナリシナルベシ。サレド、「仁」「元」「毛」等ハ、一ノ成熟音ニテ、單獨ニ發シ「ん」ハ、他音ニ倍セザレバ發セズ、其性、其用、全ク異ナレバ、同一ナリト思フハ、固ヨリ非ニシテ、又、別ニ字形ノ出テ來シ上ハ、必ズ用ヰ分クベキナリ。

二七節　○又、促聲モ、古ヘ、發シタレド、字ハ無カリシナラム、和名抄ノ郡鄉名ニ「刈田」「蓁太」「治田」「發多」ナドアルモ、促聲ヲ寫スベキ字無ケレバ、已ムコトヲ得ズ、漢字音ヲ假リテ寫シシナルベシ。又、今ノ促聲ノ字モ、成熟音ノ「つ」ヲ借リタルナレド、己ニ促聲ノ字ト成レル上ハ、混ズベカラズ、成熟音ノ「つ」ハ、單獨ニ發シ、促聲ハ、必ズ、他音ノ間ニ發ス、其相異ナルコトハ「ん」ニ於ケルガ如シ。

二八節　○鼻聲、促聲を「鼻音」「撥音」、又ハ「促音」ナド「音」ノ字ヲ宛テ、命名スルハ、當ラズ、因テ、今ハ、鼻聲、促聲、ト名ヅケタルナリ。

二九節　○國語家ハ、濁音、半濁音、拗音、鼻聲、促聲、等ヲ論ジテ、古ヘ、其字無ケレバ、音モナシ、スベテ、我ガ國ノ正音ニアラズ、後世ノ訛語、若シクハ、外國渡來語ニアリテ、卑シキ音ナリト云。然レドモ、余ハ肯ハズ、古書ニ記シタルヲ見ズトイフハ、可ナリ、發音ニナカリキトイフハ、イカガ、己ニ、前ニモ述ベタルガ如ク、小兒語、音響、形狀等ノ語ノ、教ヘニ依ラズ、自然ニ發スルヲ見レバ、古代トテモ、人々發音セシナルベシ、而シテ、古書ニ記シタルヲ見ザルハ、未ダ、字形ノ發明ナカリシナラム、「言靈の玄るべ」ニ、鼻聲、促聲、半濁音、ヲ論ジテ、曰ク、「正しき古書どもには、絶えて用ゐたる事なし、といへども、世にある事は、古へよりありしなり、これを、後世に至りて、西蕃(カラクニ)より移りたる音なりとのみ、誰も〳〵思へるは、古書に見えざるよりの非(ヒガコト)にて、實は委しからざるなり、云々、いまだ、物言はざる程の小兒の音に、心を留めて、よく〳〵聞くべし、云々、いかに、後世なれどとて、小兒の產聲(ウブゴエ)まで、西蕃(カラクニ)の音にうつるべきことわりあらむやは。」後世、コレヲ標別シ書記スル法ノ出デ來シハ、是レ、人智ノ歩ヲ進メタルナリ、凡ソ、是等ノ聲音、今、人々、日常ニ發シテ用ヲ辨ジナガラ、動モスレバ、コレヲ擯斥セムトスルハ、古陋ノ見タルヲ免レズ。

三〇節　(本、六〇節轉呼音トイフ名稱ハ、本書ノ新案ナリ、當レリヤ。

三一節　○古キ假名文ニ「かきやる」(拾遺)ヲ「かいやる」トシ、「べく」(可)ヲ「べう」トシ、「まして」(況)ヲ「まいて」ナドシタルガ多シ、是等ハ、夙クヨリ發聲ヲ失ヒテ、韻ノミ存セルニテ、假名ヲモ書キカヘテアリ。(言文一致ナレバ)然ルニ、波行ノ音ハ、同時ノ書ニ、假名ノ原形ヲ存スルガ多ケレバ、當時、尙、發聲ノ存シタルヲ知ル、古今集、十五ニ「今來むと、言ひて別れしおしたより、れもひくらしの、ねをのみぞなく。」トアルハ、「れもひ」(思)ト「ひくらし」(茅蜩)トヲ言ヒカケ、又同書、十五ニ「雲もなく、なぎたる朝の、我なれや、いとはれてのみ、世をぞ歷ぬらむ。」トアルハ、「いとはれ」(最晴)ト「いとはれ」(被厭)トヲ言ヒカケタルナリ、此類、甚ダ多シ。此ノ「れもひ」(思)いとはれ」(被厭)ノ「ひ」「は」ハ、尙、發聲ヲ存シタルナルベシ、然ラサレバ、茅蜩ハ「いぐらし」トナリ、晴ハ「われ」トナル。(後世ノ和歌ニハ、轉呼音ニモ、淸濁ニモ關セズ、言掛クレド、古今集ノ頃ハ、然ラザリシナラム)サレド、桓武、平城ノ頃ノ人ナリト聞ユル玄賓僧都ノ歌ニ「山田守る、そうづの身こそ、わはれなれ、あきはてぬれば、問ふ人もなし。」(續古今、十七)トアルハ、「そうづ」(僧都)ヲ、「山田のそはづ」(案山子)ニ掛ケテイヘルナリトイヘバ、此頃、已ニ「は」ハ、發聲ヲ失ヒテ「わ」トナリ、又「う」トナリタルヲ知ル、(或ハ、「う」ノ「わ」トヒビキタルニカ)又、和名抄、職官部、玄蕃寮ノ訓ニ「はふし」(法師)ヲ「保宇之」トシタルモ見エ、同時ノ書ニ「御送りにもまゐるべけれど、明うなりぬべければ、外にありけるを、人の見むもあひなし」として、(和泉式部日記)頭ノ中將を見たまふにも、あいなく胸さわぎて、(夕顏)あいなきまで、御前ゆるされたるは、(枕草紙、九)ナド、「あひなし」ヲ、「あいなし」トシタルナドモ見ユレバ、漸ク變ジタル現象アリテ、當時、發聲ノ存否、假名ノ用法、甚ダ區區ナリシガ如シ。又、源平盛衰記、(三十五)ニ「信濃なる、木曾の御料に、汁かけて、ただ一口に、九郎義經。」トアルハ、「くらふ」(食)ヲ、「くらう」(九郎)ニ言ヒカケタリ、此ノ時代ニ至リテハ、發聲、全ク失セタルナルベシ。

三二節　○波行ノ發聲ハ、古ヘ、唇音(f、或ハ、p)ナリシナラムトハ、本書ノ第二七節ニモイヘリ。然ルニ、中世(七八百年前)ニ、一旦ハ、和行ノ唇音(w)ニモ轉ジタラムカ、ト思ハルヽコトアリ、「は」ノ「わ」ニ轉ジタルハ、更ニモ言ハズ、他ノ「ひ」ヘ、「ほ」モ、當時ノ假名文ニ、多ク、左ノ如ク通ジテ用ヰタルヲ見ル。

おほぬ(大炊)　もちぬ(用)　ぬ(四位)　やまぬ(山居)　うゑ(植)　ゆく(行方)　かをる(薫)　にほふ(匂)
いさほし(可憐)　たち(十市)

其後「は」ノ一音ノミ「わ」ノ轉ヲ存シテ「ひ」「へ」「ほ」ハ、スベテ、發聲ヲ默シタレド、書寫ノ上ニハ、尙、原形ヲ保存セラレテ、今ニ至レルハ、唯、習慣ニ因襲セルナルベシ。

三三節　(本、六五節)本阿彌ハ、苗氏ナリ、杏ハ、字ノ唐音ナリ、厥陰ハ、漢方醫ノ語、手足ノ經絡ノ名ナリ。「ぼつち」(發意)「けつちん」(厥陰)「せつとん」(舌音)等ハ佛書、醫書ナドノ讀癖ニテ、今ハ、普通ナラヌモアリ。

三四節　○前ノ第一八節ニモイヘル「玄あはせ」(仕合)「玄あひ」(仕合)「ねあひ」(居合)「みあひ」(見合)「いりあひ」(入合)「ぐあひ」(工合)「であひ」(出合)「たくあん」(澤庵)「さうあひ」(草鞋)「みれし」(水押、舟首)ナドモ、母韻ト母韻ト合シテ、半母韻ニ轉呼スルニテ、此ニ一項ヲ加フベキモノカ、訛音ナルカ。

三五節　(本、七一節)因ニ云「かりて」(借)ヲ、京畿ニテハ「かつて」トイヒ、東國ニテハ「かりて」トイフ、京畿ナルハ、四段活用ナルヲ、促聲ニイフナリ、東國ナルハ、四段活用ヲ、上二段活用ノ如ク訛シテ「かりる」トシテヨリイフナリ。

三六節　(本、七三節)上ノ發聲ト、下ノ母韻半母韻ト合ヒテ「さしあぐ」(差上)「さゝぐ」(捧)「ちあぐ」(持上)「たぐ」(繰)「てあらひ」(手洗)「たらひ」(盥)「やつこあれ」(奴菩)「やつがれ」(僕)「とゝふ」「ちゝ」(トヂ)「わがいも」(我妹)「わぎも」「あはうみ」「あふみ」(淡海)「くにうち」「くぬち」(國中)「はたれり」(機織)「はとり」(服部)「あまれり」「あもり」(天降)ナドトナルヲ、約音ナドイフナリ、而シテ、此ノ約音、阿行ノ「え」ニハナシトイフ、サレド「すくなえ」(少兄)ノ「すくなね」(宿禰)ナドモアルナリ。又、也行ノ「え」ニモ「ゆきぎえ」(雪消)ナドアリ、和行ノ音ニモ「すはえわり」ノ「すはやり」(楚割)「くゑまり」ノ「けまり」(蹴鞠)ナドアリ。(然レドモ、斯ク合スルヿ、固ヨリ、常ニ然ルニハアラズ)

三七節　○因ニ云、和歌ハ、句毎ニ五音七音ナルヲ常トスルニ、六音八音ニ詠ムヿモアリ、コレヲ字餘リトイフ、字餘リニ詠ミ入ルヽモ、母韻、半母韻ニ限ルガ如シ。「ほのぐゝと、ありあけの月の、月影に、もみぢ吹きれろす、山れろしの風。」(新古今、六)ナドハ、四句ニ入レリ、「わたつうみの、波間かきわきて、潛くあまの、いきもつきあへず、物をこそれもへ。」(讃岐)「わすれぬちひ、うらめしとれもひ、れもふとて

も、待つべきにあらず、いはむともいはじ。」(定家)ナドハ、句毎ニ詠ミ入レタリ。(亡友、榊原芳野「眞間のうらに、枯れてをれすがふ、亂れあしを、たしわけて波の、うへに宿る月。」)「さもあらばあれ」トイフ七音ヲサヘ、五音ノ句ニ用ヰタル歌、往往アリ、「ひたふるに、死なむ何かは、さもあらむあれ、生きてかひなき、物思ふ身は。」(拾遺、十五)ノ如シ。(さまらむれト讀ム)「いかゞすべき、世にあらむやは、世をも捨てゝ、あなうの世やと、さらに思はむ。」(新古今、十八)よがれそむる、寐待の月の、つらさより、二十日の影も、またや隔てむ。」(風雅、十二)閨のべや、なびかぬ松は、聲をなして、下草しをる、山おろしの風。」(同、十六)訪ふ人も、今はあらしぞ、たゝくらむ、人知れぬやまの、草の戸ざしを。」(拾玉、六)わすられなむ、ものとはかねて、思ひにき、心の占ぞ、まさしかりける。」(六帖、五、上)わらびをりし、栗栖の小野を、きてみれど、雨降りにけり、ほどろ〳〵に。」(夫木、廿二)　萬葉集ノ四ニ「うつゝには、更にもえいはず、(更毛不得言)夢にだに、妹が袂を、纒きぬとし見む。」山家集ニ「とりわきて、心もしみて、さえぞわたる、衣川みに、きたるけふしも。」ナドモアリ「御垣守る、衛士のたく火の、よるはもえて、晝は消えつゝ、物をこそおもへ。」(詞花、七)ト

シタル本モアリ。

(本、七五節)凡ソ、音便トイフモノ、本書ニ説キタル外ニ、尚、甚ダ多シ、而シテ、世ノ文典中ニハ、其種々ナルヲ、數ヲ盡シテ擧ゲタルガ多シ、然レドモ、余ハ、一説ヲ持シテ從ハズ。　蓋シ文法ノ範圍内ニ於テ、説キ數フベキ事トテハ、一規律ヲ以テ、他ノアラユル場合(少クトモ過半ノ場合、)ニ通ジテ、應用シ得ルモノナルベシ、稀ナル音便、又ハ、二三ノ語ニ特有スル音便ナドヲ集メテ、雜陳シタレバトテ、語毎ニ覺ユベキマデニテ、推シテ他ニ應用スベクモアラズ。　其通音、通韻、又は、延、約、略、加、轉、等ノ例ヲ擧ゲタルヲ見ルニ、多クハ、少數ノ語ニ特有スル者ナリ。　例ヘバ「ゆめ」(夢)は「いめ」ト通フ、トイヘド「ゆめ」(努力)ハ「いめ」トナラズ、「きみ」(黍)ハ「きび」ニ轉ズ、トイヘド「きみ」(君)ヲ「きび」トスベクモアラズ、「詩歌」「四時」は、「しいか」「しいし」ト延ブ、トイヘド「詩人」「四季」ハ、「しいじん」「しいき」ト延ビズ、「さしあぐ」ハ「さゝぐ」、(捧)「はたおり」ハ「はとり」(服部)ト約マルトイヘド、「さしあつ」(差當)ハ「さゝつ」トナラズ、「はたおり」(螽斯)ハ、ヤハリ「はたおり」ナリ、「すみすり」ハ「すゞり」、(硯)「ほんい」(本意)ハ「ほい」ト省カルトイヘド、「すみゑ」(墨繪)ほんくわい(本懐)ハ「すゑ」

はくわい」トナラズ、「まな(眞名)かな」(鉋)ハ「まんな」かんな」トナレド、「まな」(魚)かな」(鮓)ハ然ラズ、「なはし」(直衣)とりで」(取出)わらぐつ」(藁沓)ハ「なうし」とうで」わらうづ」トナレド、「なはびと」(直人)とりいれ」(取入)あまぐつ」(雨沓)ハ「なうびと」とういれ」あまうづ」ト言フベクモアラズ。其他、皆、此ノ類ナルガ多ク、スベテ、其少數ノ語ニ獨特ナル例ニテ、一般ヲ律スベキモノナラズ。殊ニ、希覯古辭ナル一二ノ音便例ナド、摘ミ出シ來リテ臚列スルナド、徒ニ、學ブ者ノ腦力ヲ苦マシムルノミ。

三九節　畢竟ズルニ、右ノ如キ語ハ、音ヲ變ズレバ、假名ヲモ易ヘテ記スモノナレバ、各、一個ノ語ト見ルベク、辭書ニ、各自獨立ニ出ヅベク、其通延約略加轉等ノ事ハ、辭書ノ各語ノ語原(Derivation)ニ讓ルベシ。若シ、概略ニモ、其理由ヲ示サムトナラバ、別ニ、綴字書ニ擧グベキナリ。

四〇節　(本、七六節)世ノ文典中ニ、假名遣ノ誤リ易キ語ヲ、アルカギリ列擧シタルモノアレド、文典ノ體裁ヲ失ヘリ、是等モ、スベテ、辭書、或ハ、綴字書ニ讓ルベキナリ。

○凡ソ、本書ノ篇首ヨリ此ニ至ルマデノ、假名、及ビ、音ノ解說ハ、單ニ、理論上ヨリ言フトキハ、其類屬次第ノ、錯亂シタルガ如キ所モアリ。然レトモ、余ノ此ノ篇ノ編輯ハ、スベテ、文法科ニ就キテ、學ブ者ノ便利ヲ旨トシテ、唯、會得シ易カラム、ト思フ方ニノミ就キテ、立案シテ、深ク理論ニ拘セズ、以下、全篇ノ體裁ニモ、此ノ趣意ナル所多シ、讀ム者、スベテ此ノ意ヲ諒スベシ。

四一節　○世ノ文典ヲ見ルニ、假名ノ字原、發音、音便、其他、全篇、スベテ、微細ナル原理ニマデ說キ及ボシタルモノ、往々アリ。然レドモ、文法科ノ目的ハ、誤謬ナク言語ヲ用ヰテ文章ヲ作ルヲ敎フルマデノモノナレバ、此ノ學科ニ於テ、深キ原理ニマデ立入ルハ、無用ノ事ニテ、徒ニ煩ヲ增スモノナルベシ。字形發音ヲ初トシテ、スベテ、言語成立ノ精微高尙ナル論ニ至リテハ、別ニ、自ラ、言語學、修辭學、博言學、等ノ專門科アルアリ、範圍外ニ涉ルベキニアラズ。

四二節　(本、七七節)漢字ノ數、唐ノ廣韻ニハ、二萬六千百九十四字アリ、宋ノ集韻ニハ、五萬三千五百二十五字、明ノ字彙(補遺ヲ合シテ)ニハ、四萬五千五百五十字、淸ノ字典(同上)ニハ、四萬七千二百十六字アリ、其他ニ、小說等ニ用ヰル俗字モアリ、新字モ、日ニ、尙、增殖ス。(元素ハ、五行(ゴギヤウ)ニ當ルトテ、炭素ニ衝ノ字ヲ作リ、蛇ハ石(ア)

決明ノ和字ナルニ、乾シタルヲ上海ヘ輸入セシヨリ蚫ト稱スルナド、字ノ增殖、底止スル所ナシ、）

今、都下ニテ、活字印刷ノ營業者ノ言ヲ聞クニ、漢字ノ活字ハ、先ヅ、三千種ヲ備フレバ、開業シテ、普通印刷物ノ注文ヲ受クベク、高尙ナル漢文物ヲ印刷シ得ベキニモ、五六千種ヲ越エザラムトイヘリ。

四三節　（本、七九節）漢字ニハ、六書、六義、ナドイフコトアリテ、字形、字義、ノ由リテ起レル所ヲ言フ、然レトモ、事、其專門ニ屬スレバ、此ニ略ス。

四四節　（本、八一節）書ノ八體トイフハ、「楷、行、草、隸、大篆、小篆、章草、飛白」ナリ、此ニハ略ス。

四五節　（本、八三節）稀ニ、一字ニテハ義ヲ成サズ、熟字ニノミ用ヰルモアリ、「揶揄」（擧手相弄也）ノ揶ノ如シ。

四六節　○字音ノ、原音ト變ジタルコトハ、後ノ第五〇節ニイフベシ。

（本、八四節）此ニ、訓トイフハ、本文ニ言ヘルガ如ク、漢字ニ、國語ヲ當テヽ讀ムヲイフ、支那ニテ、訓詁、訓義、ナドイフ訓ニアラズ、支那ニテ言ハヾ、譯ノ字ニ當ラム。

四七節　（本、九二節）漢語ヲ、日本化シテ動詞、形容詞トシタルモノ、稀ニアリ、裝束ヲ「さうぞきて」、散樂ヲ「さるがふ」、執念ヲ「しふねし」ナド用ヰタルハ、巧ナリトイフベシ、謠曲ノ安宅ニ「兎角の是非は、もんだはずして」、狂言詞ニ「左樣な事は、もんだひたうもござらぬ」ナドイフハ、「問答」ヲ活用シタルナリ、武家感狀記ニ、本多美濃守某ノ家人ナル稻垣掃部トイフモノ、其主君ヲ恨ミテ出奔セシ時ニ、書キオケル歌ニ「破れ笠、首にかけつゝ、こじくとも、天（雨）が下にて、簑（美濃）は賴まじ。」ナドアルハ、「乞食」ヲ活用シタリ。其他、俗語ニハ、「退治」ヲ「たいぢて」、「敵對」ヲ「てきたふ」、「濕氣」ヲ「しつけて」、「料理」ヲ「れうる」ナド活用ス、又「りきむ」（力）「もくろむ」（目論）「しやくふ」（杓）「しやくる」（尺）ナドモアリ。又、形容詞ニ「らう〳〵し」（勞々）「ちく〳〵し」（骨々）「愛らし」、「樵陶し」、「美々し」、「毒々し」、「凛々し」、「非道く」、「四角い」、「面倒い」ナド、皆、日本化シタルナリ。

四八節　（本、九五節）假名ニテハ、一字ヲ二音ニテ記スガ故ニ、斯クハ說キタレド、支那ノ原音ハ、唯、上ノ音ノ韻ヲ引クノミナリ。殊ニ「つ」、「く」、「ち」、「き」ニ終ハルモノ（入聲）ハ、全ク、二音ニ聞ユレド、支那ノ原音ハ、其末、Consonant ニ終ハルモノナリ、然レ

ヒ、其發音、邦人ノ口ニ上ラズ、因テ、末ニ、又、母韻ヲ添ヘテ、二音ニ呼ブナリ。(但シ、今ノ支那北方ノ音ニテハ、末ヲ失ヒテ、一字一音ノモノト異ナラズ。)

○漢字音ハ、其發聲ノ調ノ高低等ニ從ヒテ、平聲、上聲、去聲、入聲ノ四聲ニ大別セラル。(ヒヤウシヤウシヤウキヨシヤウニツシヤウ)

又、四聲ノ中ニテ、其韻ノ似タルモノニ從ヒテ、平聲ヲ三十韻ニ、上聲ヲ二十九韻ニ、去聲ヲ三十韻ニ、入聲ヲ十七韻ニ別チ、總計、百六韻トス、左ノ表ノ如シ。

四九節

平聲、(平道莫低昂)	上聲、(高呼猛烈强)	去聲、(分明哀遠道)	入聲、(短促急收藏)
一 東	一 董	一 送	一 屋
二 冬(鍾)	二 腫	二 宋(用)	二 沃(燭)
三 江	三 講	三 絳	三 覺
四 支(脂、之)	四 紙(旨、止)	四 寘(至、志)	四 質(術、櫛)
五 微	五 尾	五 未	
六 魚	六 語	六 御	
七 虞(模)	七 麌(姥)	七 遇(暮)	
八 齊	八 薺	八 霽(祭)	
九 佳(皆)	九 蟹(駭)	九 泰	
十 灰(咍)	十 賄(海)	十 卦(怪、夬)	
十一 眞(諄、臻)	十一 軫(準)	十一 隊(代、廢)	
十二 文(欣)	十二 吻(隱)	十三 問(慁)	五 物(迄)
十三 元(魂、痕)	十三 阮(混、很)	十四 願(恩、恨)	六 月(沒)
十四 寒(桓)	十四 旱(緩)	十五 翰(換)	七 曷(末)
十五 刪(山)	十五 潸(産)	十六 諫(潤)	八 黠(鎋)
一 先(仙)	十六 銑(獮)	十七 霰(線)	九 屑(薛)
二 蕭(宵)	十七 篠(小)	十八 嘯(笑)	十 藥(鐸)
三 肴	十八 巧	十九 效	十一 陌(麥、昔)
四 豪	十九 皓	二十 號	十二 錫
五 歌(戈)	二十 哿(果)	廿一 箇(過)	十三 職(德)
六 麻	廿一 馬	廿二 禡	十四 緝
七 陽(唐)	廿二 養(蕩)	廿三 漾(宕)	十五 合(盍)
八 庚(耕、清)	廿三 梗(耿、靜)	廿四 敬(諍、勁)	十六 葉(帖、業)
九 青	廿四 迥	廿五 徑	十七 洽(狎、乏)
十 蒸(登)	廿五 拯(等)	廿六 宥(候、幼)	
十一 尤(侯、幽)	廿六 寢	廿七 沁	
十二 侵	廿七 感(敢)	廿八 勘(闞)	
十三 覃(談)	廿八 琰(忝、儼)	廿九 豔(標、釅)	
十四 鹽(添、嚴)	廿九 豏(檻、范)	三十 陷(鑑、梵)	
十五 咸(銜、凡)			
上平 古廿八韻 今十五韻	上 古五十五韻 今二十九韻	古六十韻 今三十韻	古三十四韻 今十七韻
下平 古廿九韻 今十五韻	計 古二百六韻 今百六韻		

唐ノ天寶中ニ、陳州司法孫愐、唐韻ヲ作リ、二百六韻ト立テシヲ、宋ノ淳祐中ニ江北平水劉淵、壬子禮部韻略ヲ著ハシテ、通用ノ韻ヲ併セ、重複ノモノヲ省キテ、百七韻トセリ、コレヲ平水韻トイフ、今ノ通用韻、コレナリ、(但シ、元ノ陰時中、韻府群玉ヲ著シテ、上聲ノ[極]ヲ刪併シタレバ、今ハ、二百六韻ナリ、)今、古韻部ヲ、今韻部ノ下ニ列シテ、分併ノ由ル所ヲ示ス、坊間通行ノ會玉篇ナドヲ引用スル者、其字ノ下ニ、古韻部ヲ載セタレバ、スベテ、此ノ表ニ因テ、古今ノ韻別ヲ知ルベシ。

[東、冬、江、支、]等ハ、其韻部ノ首字ナリ、コレト同シ聲韻ノ字、許多アリテ、此ノ内ニ屬ス。

[眞、文、元、寒、刪、先、]ノ六韻(上聲モ、去聲モ)ハ、其韻、皆[な、に、ぬ、ね、の、]ノ舌内音ニ終ハル、[侵、覃、鹽、咸、]ノ四韻(上聲、去聲、共ニ)ハ、皆[ま、み、む、め、も、]ノ唇内音ニ終ハル、(言海ノ凡例ヲ見ヨ)然レドモ、今ハ、通シテ、皆[ん]トス。

[東、冬、江、蕭、肴、豪、陽、庚、蒸、尤、]ノ十韻(上聲モ、去聲モ、共ニ)ハ、其韻、皆[う]ノ喉内音ニ終ハル、凡ソ、漢字音ノ假名遣ヒノ誤リ易キハ、此ノ十韻ト、入聲ノ[緝、合、葉、]

五〇節

洽、]ノ四韻トナリ、言海ノ凡例ヲ見テ知ルベシ。

聲韻ノ高低類別等ノ事ハ、支那人ノ發音ノ上ニテ、一語ニ異義ヲ生ジ、同音モ音節ニテ分レ、(賈、賈、受、授、ノ音ナド、)又、詩ノ吟誦等ニ用ヰルコトナレバ、邦人ニハ、辨別スルコト難ク、又日常、漢字ヲ用ヰル上ニ、辨別ノ必要モナシ。但シ、詩賦等ノ韻語ヲ學ブ者ハ、專門トシテ、韻書ニ就キテ知ルベシ、又、支那ノ今代ノ音ヲ學ビテ通辨セムニハ、別ニ、自ラ、其學ノアルアリ。

(本、九七節)支那ノ北部ナル黃河南北ノ地ハ、彼ノ國人ノ、中原ト稱スル所ニテ、支那ノ本部トモイフベシ、殊ニ、前漢、(長安ニ都ス、)後漢、(洛陽ニ都ス、)四百餘年間ハ、文物、最モ隆盛ヲ極メタレバ、今ニ至ルマデ、全國ノ事物ニ冠シテ、漢字、漢音、漢語、漢文、漢書、漢學、等ノ稱ハアルナリ。(今モ、滿人、漢人ノ稱アリ、)其後三國ヲ歷テ、晉ノ末世ニ至リ、五胡ノ亂、十六國春秋ノ世トナレルニ及ビテ、北部ノ中原ハ、北狄侵入シテ、雜居ノ地トナリ、中原ノ本土人ハ、却テ、楊子江ノ南ニ移レリ、江左六朝(三國ノ吳、東晉、宋、齊、梁、陳、)奠都ノ地、(金陵、南京、)是レナリ。サレバ、江左ハ、春秋ノ勾吳荊蠻ノ地ナレド、是ニ至テ、却テ、漢代以來、中原土人ノ語

音ノ存スル地トナリテ、北部ノ中原ハ、却テ、北狄ノ語音雜猥混亂ノ地トナリキ。

漢字ノ我カ國ニ入リシ時代、詳ナラズ、天日槍ノ將來カ、神功征韓ノ頃ヨリカ、然レドモ、先ヅハ、應神ノ朝ニ、百濟ノ阿直岐、王仁、ヨリ傳ヘタリトスベキカ、何レニストモ、初ハ、朝鮮傳來ナルベケレバ、字音モ、之ニ伴ヒシコト、知ラル。(應神ノ末ニ、吳人來朝ノ事、史ニ見ユレド、音ヲ傳フルマデニハ、至ラザリシナラム、且、此吳人ノ事モ、史ノ錯簡ニテ、遙ニ後ノ事ナリトノ說モアリ。) 朝野群載、三ニ、對馬貢銀記ヲ引キテ、云、佛法、始渡吾土、此島、有一比丘尼、以吳音傳之、因茲、日域經論、皆用此音、故謂之對馬音。政事要略ニ、大織冠鎌足執政時、百濟禪尼法明、來于對馬島、吳音誦維摩經、因吳音曰對馬讀、乃吳音之源起也。悉曇三密鈔ニ、金禮信、來留對馬島、傳吳音、學國學之、因名曰對馬音、次、表信公、來筑前博多、傳漢音、是曰唐音。朝鮮ハ夙クヨリ、支那ト通ジ、燕人衛滿ノ、朝鮮王ニ封ゼラレ、平壤ニ都セシハ、前漢ノ初ナリトイヘバ、其傳ヘタル所ハ、五胡以前ノ支那原音ナルヲ、論ナシ、(韓ニ入リテ、多少ハ變ジタルベケレド、引ケル所ノ三書ニ、吳音トアルハ、追記ノ語ナルベケレド、亦當時所傳ノ音ハ、後ニイフ吳音(即チ、支那原音)ト甚シキ差ハナカリシヲ知ラル。

我　朝ト支那トノ交通ノ初ハ、東晉以後ナルガ如シ、サレバ、江左、即チ、吳ノ地ノ音、第一ニ我レニ傳ハリス、是レ、吳音ノ名アル所以ナリ。隋ノ支那ヲ一統スルニ及ビテ、北部ノ長安ニ都シ、此ノ時、皇朝、始メテ公ニ交通セラレ、唐ニ及ビテ、亦、長安ニ都シ、爾來、遣唐使、留學生、皆、長安ニ赴ク、是ニ於テ、支那北部(長安)ノ音、第二ニ我ニ傳リス、(推古帝ヨリ、宇多帝ニ至ル、凡ソ三百年間)コレヲ漢音トス。抑モ、漢トイフハ、川ノ名ナルニ、其流域地方ノ泛稱トナリ、隆盛ナル漢代ノ國號モ、此ニ起リ、隨テ、中原ヲ漢土ト稱スルニ至リ、遂ニ、北部ノ音ヲ漢音ト稱スルニ至リシナリ。

サレド、南部ノ吳音ハ、漢代ヨリ傳ヘタル中原土人ノ原音ナレバ、濁、濁、輕、重モ、(漢吳音圖、四聲七音經緯表ナド見レバ)自ラ、規則的ニ具備シテ見ユ、韻會ニ、韻書始于江左、本是吳音ト見エ、韻鏡(唐代ノ作カト云)ノ音韻、吳音ト符合セリ、之ニ反シテ、北部ノ漢音ハ、既ニ、北狄ノ語音、混淆ノ後ナレバニヤ、規則備ハラズ

見ユルナリ。而シテ、通聘留學ノ士ハ、率ネ長安ニテ學ビタレバ、漢音ノ傳來、終ニ勢力ヲ得ルニ至リタレド、求法入唐ノ僧侶ハ、公ノ修交ヲ止メラレシ後マデモ、尙、江左ニ學ビテ、吳音ヲ傳フル者、絕エザリキ。東寺經藏所傳ノ太政官符ニ「應讀佛敎經吳音儒道兩典漢音醫書隨文便二音交雜」日本後記、延曆廿三年正月ノ條ニ「敕云々、雖讀諸論若不讀經者亦不得度其廣涉經論習義殊高者勿限漢音自今以後永爲恒例」大學式ニ「凡試年分度者遣音博士一人就僧綱所試漢音」ナド見ユ、今ニ至ルマデ、佛書醫書ノミニ、多ク吳音ヲ用ヰルハ、コレガタメナリ。

字音ハ、初メ、支那傳習ノモノニハアリシカド、其發音、邦人ノ口頭ニ上セ難キモノ、固ヨリ多ク、サレバトテ、全國ノ人ニ、一々、正則ニ支那發音ヲ習ハシムベクモアラズ、故ニ、傳來ノ初、何人カ、字音ヲ、多少、邦音ニ適スルヤウニ變更シタルナリ、今ノ漢音、吳音、是レナリ。サレバ、今ニ傳フル此二音ハ、共ニ、六朝、隋、唐、時代ノ原音ノマヽニハアラネド、亦、當時、一定ノ則ヲ立テヽ、聊、變更シタルモノニテ、原音ニ逼近シタルモノナルベシ、後代ノ支那音ト大差アルヲ見テ、當時、無下ニ轉訛セシ如ク論ズル者アルハ、アラジ。

支那ハ、年代ヲ歷ル每ニ、其字音ニ變遷ヲ起ス、而シテ、我ハ、當初ノ音ノマヽニテ、今ニ至ルマデ、變遷ナク、コレヲ傳フ、(やう、さやう、てう、けう、)等ノ、轉呼音トナリシハアレド、假名遣ヒハ存セラル、)故ニ、支那トノ交通甚シク衰ヘタル後ニ、稀ニ傳來シタル字音ハ、他ノ二音トハ、甚シク差違セリ、是レヲ唐音トス、唐人(支那人)ノ音トイフマデノ泛稱ナリ、而シテ、其實ハ、歸化宋僧ノ所傳ノモノ、(下火行燈看經胡亂杜撰臘乾普請ノ類多キヤウナレバ、宋音トモイフベキガ多シ。(コレニモ、南北ノ差アルベシ、)爾來、元、明、ヲ歷テ今ノ淸ニ至リ、彼國ハ、更ニ變遷ヲ歷クルコト甚シク、六朝隋唐ヨリ傳ヘシマヽナル我ガ國ノ今ノ漢音吳音ト、今ノ淸國ノ音ト(南方、北方、共ニ、)ハ、非常ナル差違トナリテ、同一脈ヨリ出デタル音トハ、思ハレヌマデニナレリ。

今時、支那ニテ、史上ニ存スル古代ノ地名ナドノ、其所在ノ、分明ナラヌガ多キニ、近來、彼ノ國人、我ガ國ニ來リ、漸ク我ガ漢吳音ヲ學ビ知リテ、(初ハ、輕蔑シテ顧ミザリシカド、)此ノ古音ニ據リテ、古地名ヲ求メテ、求メ得タルモノ、甚タ多

シト聞ク、之ニ因レバ、當初我ガ邦人ノ、字音ヲ變更シタリシモ、甚シキニハアラザリシヲ知ルベシ。

五一節

(本、一〇〇、一〇一)コヽニイヘル「單語」ハ、英語ノWordニ當ル「言」ノ一字ニテ「こと」トノミ訓マバ、正ニ當ラムカ、然レドモ、今ハ、姑ク單語トセリ。

○新古今ノ「見てもまた」ノ歌ハ、「又」トイフ接續詞ヲ、例ニ採ラムガ爲ニ引ケルナリ。「復」ハ「ふたゝび」ノ意ナリ。「見まく」ハ「見む」ノ延ビタルニテ、「見むことの」ト解スベシ。(本書ノ第二五二節ヲ見ヨ。)「欲しかり」ハ「欲しく」ト「あり」トノ約レルナリ。「過ぎや、しぬらむ」ハ「や」ヲ「か」ニ代ヘテ下ニ置キ、「過ぎしぬらむか」ト解スベシ。「過ぎ」ハ、動詞ノ名詞トナレルニテ、「過ぎする」ハ「過ぎヲする」義ナレド、「過ぐる」ノ意トナル。(時雨する、紅葉する)ナドニ同ジク、自動ト見ル。)花ノ盛ナル頃ニ、故郷ノ花ヲ思ヒヤリテ詠メル歌ナリ。

五二節

(本、一〇二)國語ニ就キテ、單語ノ種類ヲ別ナタルハ、富士谷成章氏ノ「あゆひ抄」、かざし抄」ニ始マレリ、其別ハ、名(名詞)挿頭(副詞其他、文句ノ首ニ用ヰル語)、裝(動詞、形容詞)脚結(豆爾乎波、助動詞、感動詞等)ノ四種ナリ。然レドモ此學ヲ傳

五三節

フル者、今ハ絶エタルガ如シ。

後ニ、體ノ詞、用ノ詞、又ハ、體言、用言ノ稱、本居大人、及ビ妙玄寺義門師ニ起リ、後ニ、體言、用言、助辭、ノ三大別ノ稱、成レリ。體言トハ、語尾ノ活用セヌ語ノ意ニテ、名詞之ニ屬シ、用言トハ、語尾ノ活用スル語ノ意ニテ、動詞之ニ屬シ、形狀言(形容詞)モ、之ニ入ル、助辭トハ體言、用言、ノ外ナル一切ノ單語ヲ、雜揉包括シタルモノニテ、即チ、副詞、接續詞、豆爾乎波、感動詞、ノ如キ活用ナキ語モ、助動詞ノ如キ活用アル語モ、コレニ屬ス。扱、體トイヒ、用トイフハ、元來、支那ニテ、事物ノ「性、理、靜、動、」等ニイフ名目ナルヲ、姑ク、名詞、動詞、(形容詞)ノ、活用有無ノ類別ニ假用セルナリ。(支那ニテハ、實字、虛字、ナドイフ。)然ルニ、世ノ文典中ニ「副詞、接續詞、感動詞、」ノ如キヲモ、其語尾、活用セネバトテ、妄ニ、體言ノ中ニ加ヘテ、體辭ナド名ヅクルアルハ、體用ノ字義ヲモ解セズ、當初、命名シタル人ノ趣意ヲモ誤解セルワザナラム、是等ノ語ヲバ支那ニテハ、助辭、助字、ナドトコソイヘ、實字ト同一ニ見ルベクモアラズ。

五四節

衆語ヲ、先ヅ、體言、用言、助辭、ト大別スルコト、惡シトニハアラネド、此ノ概別ニ

テ、能事了ルベキニアラズ、必ズ復タ其ノ下ニ、小別(八品詞)ヲ立テヽ、更ニ詳說セズハアルベカラズ。然ルトキハ、先ヅ、體、用、助、ニ大別シテ說クコト、何等ノ必要モナキヤウニテ、徒ニ、一ノ煩ヲ設クルニ過ギザルベク、初ヨリ、直ニ、八品詞ヲ、各獨立ニ說クコト、却テ、甚ダ簡明ナルヲ覺ユ。此ノ故ニ、此ノ篇ハ、體、用、助辭、ノ舊別ニ據ラズ、初ヨリ、八品詞ニ部門ヲ立テヽ說ケリ。

五五節　○單語ニ、名詞、動詞、八品詞ナド、詞ノ字ヲ當ツルハ妥當ナラズ、體言、用言、ナドイフ言ノ字、正當ナルガ如シ、然レドモ、今ハ、姑ク、改メズ。

五六節　(本、一〇三)世ノ文典ニハ、洋語ニ倣ヒテ、父、母、弟、妹、夫、妻、牡牛、牝牛、雄鷄、雌鷄、等ヲ以テ、男性語、女性語、ト立テタルモノアリ、妄、極レリト云フ可シ。是等ハ、各々、男女ノ異義ヲ生得シタル語ニテ、(辭書ニ據リテ、其意義ヲ解シテ足ル)斯ル異義ニ、類別ヲ立テバ、千萬ノ語ニ、各千萬ノ異義アルヲ何トカスル。洋語ニテハ、名詞モ、代名詞モ、冠詞モ、其他モ、性ヲ具シテ、男性ノ名詞ニ伴フニハ、其代名詞モ、冠詞モ、其他モ、男性ナルヲ用キテ、相照應スルヲ期スルガ故ニ、(我ニモ、女ニ限ル代名詞ノ妾ナドアレド、他語ニ關係ヲ及ボサズ、)文法上ニ、必用トシテ講ズルナリ、我ニ於テ、何カアラム。

五七節　(本、一〇四)名詞ノ定義ヲ、單ニ、[語尾ノ變化セヌ語]トノミ說ケルアルハ、物足ラズ、變化セザル語ハ、他ニモアリ、又、[無形ノ事ノ名稱]ト言フトキハ、[見ル、聞ク、]痛シ、[厚シ、]モ、無形ノ事ト認ルヲ得ベシ、因テ名詞ニ接スベキ豆爾乎波ヲ擧ゲテ、定義ヲ確ニセリ。

五八節　○體言トイフハ、名詞ノミニアラズ、ナドイフ說モアレド、妄ナリ、(前ノ第五三節ニ論ジタルヲ見ヨ、)連體言、假體言、ナドモイヒテ、名詞ノ專稱ナリ、故ニ、今、名詞、一名、體言トシタリ。(名言ナド命ズル人モアレド、金言ナドノ意ト紛ラハシ、)

五九節　○有形名詞、無形名詞、又ハ、實體言、假體言、(虛體言)ナド、語性ニ就キテ、特ニ、名目ヲ立テヽ、論ズベキモノヽ如クニモ思ヘド、文法上ニ、此ノ類別ノ必用ハナキヤウナリ、單語ノ解剖(Parsing)ナドニ至リテモ、解說スルヲ要セズ。

六〇節　(本、一〇七)馬名、池月ハ、實ハ、生唼(イケヅキ)(人ヲ嚙ム意)ニテ、假名遣ヒモ違ヘド、今ハ、姑ク、俗ニ從フ。玄上、敕馬(ゲンジヤウ、ヰクバ)ハ、古ヘノ名器ノ琵琶ノ名ニテ、髭切、膝丸ハ、源家重代ノ名劍ノ名ナリ。

六一節

（本、一〇八）名詞ノ中ニハ、他語ト熟語トナルトキ、語尾ヲ變ズルモノ、稀ニアリ。（下ノ語ヲ形容スル意トナル。）

酒サカ　ササカズル　ササカクサシ　竹タカ　タカムラ　タカバウキ　菅スガ　スガハラ　スガノ子
風カゼ　カザガミ　カザダツ　早稲ワセ　ワサダ　稻イナ　イナボラ
胸ムネ　ムナサキ　ムナクルシ　棟ムネ　ムナギ　ムナブダ　金カネ　カナモノ　カナトコ
舟フネ　フナコ　フナノ舳　フナバタ　米ヨネ　ヨナムシ　種タネ　タナ井　タナツモノ
茜アカネ　アカナベ（茜氏）　上ウハベ　ウハノソラ　ウハギ　苗ナハ　ナハシロ
爪ツメ　ツマサキ　ツマクル　雨アメ　アマガサ　アマヨ　天アメ　アマモ　アマノガハ　アマクダル　アマツカゼ
枯カレ　カラヤマ　稀マレ　マラビト　聲コエ　コヱ子　コヱダカニ
黄キ　コガ子　木キ　コノハ　コカゲ　火ホ　ホカゲ　ホノホ
目メ　マブタ　マノアタリ　手テ　タマクラ　タナスエ　タクル　白シロ　シラガ　シラグル

右ノ外、尙アリ、然レドモ、「酒、竹、菅、棟」ノ如キ、「さかだる」（酒樽）たかむら（竹叢）すがはら（菅原）むなぎ（棟木）トハナレド、「さかのみ」（酒呑）たかうま（竹馬）すががさ（菅笠）むなあげ（棟上）トハナラズ、「茸」モ「このこ」トハナラズ、又、池、苦等ハ、酒、竹ト同ジク、「け」

六二節

ノ音ニ終レド、池、苦ノ「ち」か「こか」トナルコトナシ。サレバ、固ヨリ、アラユル名詞、皆、此ノ法則ニ變ズルニハアラズ、スベテ、慣用ノ法ニ局シテ、一般ニ律スルコト能ハザレバ、此ノ變化ヲ、文法科ニ於テ、學ブ者ニ記臆セシメタリトテ、何ノ效モナカルベシ、故ニ、別ニ說カズ。是等ハ、皆、一熟語ト成リテ、別ニ辭書ニ入ルベキモノナレバ、一々、辭書ニ就キテ知ルベキモノナリ。

○世ノ文典ニ、熟語ノ名詞ヲ特ニ揭ゲタルアリ、熟語ハ、名詞ニノミ限ラズ、動詞ニモ、形容詞ニモ、副詞ニモ、其他ニモアリ、本書ノ第四三七節、以下ニ、熟語トシテ集メテ擧ゲタルヲ見ヨ。又、西洋ノ文典ニハ「軍隊、森、組合」ナドイフ語ニ、集合名詞ナドイフ名目ヲ立ツ、コレハ、多數ノモノナレド、複數トハ見ズ、合シテ單數ト見テ、之ニ應ズル冠詞、動詞、ナドモ、單數ノモノヲ用ヰル規則アレバ、イフナリ、我ガ文典ニモ、彼ニ倣ヒテ、此名目ヲ立ツルアルハ、徒爲ナリ。

又、前ニモ言ヘル如ク、日本ノ名詞ニハ、男、女、中、ノ性ナク、單、複、ノ數ヲ表ハスニモ、一定ノ則ナク、格ハ、別ニ豆爾乎波アレバ、是等ノ事、スベテ、名詞ノ條ニテハ說カズ。

六三節　（本、一一〇）萬葉、十五ノ「白妙の」（枕詞）ノ歌ノ「下衣」ハ、襲衣（シタギ）ナリ。（夫婦ノ間ノ歌ト見ルベシ。）同、「我宿の」ノ歌ノ「まつ」ハ「松」ニ「待」ヲカケタリ、下ノ句ハ、「はや歸りませ、戀ひ死なぬ刀（ト）に。」「刀」ハ「時」ニテ、「間」ノ意。）古今、三ノ歌ハ、「時鳥、なが鳴く里の、あまたあれど、なほ疎（ウト）まれぬ、思ふものから。」ナリ、「時鳥ヨ、ソチノ鳴ク里ハ、諸方ニアマタアルニ因テ、賞翫ニハ思ヒナガラ、（オモフモノカラ）ヤハリ、疎々（ウトウト）シク思ハレル、」ノ意ナリ。同、十七ノ歌ノ「千早振」ハ、宇治ノ枕詞ナリ、「宇治橋ノ橋守ヨ、我ハ、ソチヲ殊ニ愍然ニ思フ、我ト同シク、年歴タル老人ナリ、ト思ヘバナリ、」ノ意ナリ。對稱ノ「なむぢ」ノ「むち」ハ、「睦」ノ意ニテ、元ハ親ミテイヒシ語ナレド、後ニハ、其意ナクナレリ。古事記ノ歌ハ、婚ヲ約シテ、遂ゲズシテ老イタル女ヲ憐ミタル歌ニテ、「神ノ宮人ガ、神社（ミムロ）ニ土垣（カキ）ヲ築キテ餘シタル土ノ如ク、無用ニナリテ、寄ルベナシ。」ノ意ナリ。「をち」ハ、「あち」ニ同シ、常ニ、「遠近（ヲチコチ）」ナド記セド、遠ノ字ニ拘ハルベカラズ。

六四節　（本、一一二）「これ」、「それ」、等ノ語ヲ代名詞トシ、事物、地位、方向、等ニ別チ、又、近、中、遠、不定、等ノ稱ヲ付シ、スベテ、斯ノ類別次第シタルハ、此書ノ創意ナリ、當レリヤ。

六五節　（本、一一三）萬葉集ノ歌ハ、山上憶良（ヤマノヘノオクラ）ガ宴ヨリ退出スル時ノ歌ナリ。佛足石ノ歌ハ、涅槃（ネハン）經ニ、「是身無常、如電光」、又、正法念經ニ、「死王呑衆生（シユシヤウ）」ナドアルニ因ル、死王ハ、死ヲイフナリ。佛足石ハ、大和ノ藥師寺ニアリ。

六六節　○西洋ノ代名詞ハ、前ニモイヘルガ如ク、男女中性、單複數、格、等ヲ區別サムガ爲ニ、其語形ヲ變ジ、隨テ、之ニ應ズル動詞等モ、共ニ、同一ニ變ズルヿモアルガ故ニ、獨立ニ說ケドモ、我ガ代名詞ニハ、夫等ノ事絕エテ無ク、且、「が」、「の」、「に」、「を」、等ヲ屢ム用法等モ、全ク常ノ名詞ト異ナラズ、サレバ、唯、名詞中ニテ、一種、名詞ノ代理トナル語ト見テ可ナリ。

六七節　○我ガ指示代名詞ハ、洋語ニテハ、中性ノ代名詞、又ハ、副詞トナル、其中ノ「こ」、「そ」、「あ」、「か」、等ヲ、「この」、「その」、「あの」、「かの」、ナドト組立テ、一語ト見ルキハ、彼ノ Demonstrative adjective（指示形容詞）トナル。或ル文典ニ、此ノ組立テタルモノヲ、直ニ指示代名詞トシタルハ妄ナリ、「の」ト組立テタルキハ、下ニ更ニ、「が」、「の」、「に」、「を」、等ヲ屢ム用ヰ能ハザレバ、名詞ニハアラズ。

六八節　○不定稱ノ代名詞ヲ、疑問代名詞ト立ツルモノモアレド、非ナリ、是等ノ語、疑

ヒ問フ時ニノミ用キルモノナラズ、「誰も思はず、」「何れも同じ、」ナドハ、「衆人、思はず、」「皆、同じ、」ナリ、疑問ニアラズ。又、或ル文典ニハ、疑フ意アル副詞ナドヲ、疑問代名詞ニ加ヘタルアリ、妄甚シトイフベシ。

六九節

○西洋ニテイフ關係代名詞トイフモノ、我ニハナシ。

（本、一一四）「ひとつ、」「ふたつ、」等ノ「つ、」ハ、「箇」ノ意ニテ、「はたち」ノ「ち」モ、同語ノ轉ナラム。「とを」（十）ノミ「つ」モ「ち」モ履マズシテ「を」トイフモ異ナリ。又、「とを」（十）ヲ「ひとそ」（一十）トモ「ひとそぢ」（一十箇）トモ言ハズ、「はたち」（二十）ヲ、「ふたそ」（二十）トモ「ふたそぢ」（二十箇）トモ言ハヌモ、異ナリ。

七〇節

○「ひと、」「ふた、」ナドヲ、「ひ、」「ふ、」「み、」「よ、」「い、」「む、」「な、」「や、」「こ、」「と、」ナドモイフ。又「みつぐみ」（三組）いつゝを」（五緒）ナドト、熟語ニスルコトモアリ。

○「五」ヲモ「い」トイヒ、「五十」ヲモ「い」トイフハ、紛ラハシ。（五十鈴川ハ、伊勢ニアリ、「いかもか」ハ、小兒生レテ、五十日、百日、ノ祝ヒニイフ語ナリ、苗氏ニ、五十嵐、五十川、五十君、ナド、アルハ五十日嵐、五十日川、五十日君、ノ略ナラム。）「十」ヲ「そ」トイフハ、如何ナル義ニカ。（苗氏ニ十河）「つゞや、はたち」トイフハ、「十や二十」ノコト云フ、「十箇」ノ轉カ、或ハ、「十九」ノコトナリトモ云（地名ニ十九浦アリ）「百」ヲ「ほ」トイフハ、「もも」ノ音ノ轉ナリト云。「千」ト「箇」ト、紛ラハシ、「よろづ」（萬）ノ「づ」モ、「箇」ノ意カ。「ちゞに物こそ悲しけれ、」ナドハ、「千箇」ナラムカ。其他、八百萬、八十神、五百代小田、五百萬、八百重、千五百秋、ナドモ用キル。

七一節

○數詞ハ、固ヨリ數ヲイフ語ニテ、名詞トハ、語性、意義、異ナレド、其用法、位置、文中ニアリテ、正ニ名詞ニ同ジゲレバ、名詞ノ中ニ加ヘタリ。又思フニ、數詞ノ原形ハ、「ひと、」「ふた、」「み、」「よ、」ナドニテ、接頭語ノ如キモノナルベク、之ニ「つ、」（箇）或ハ「ち」（箇）トイフ接尾語ノ添ヒテ、名詞ノ如クナリタルナラム、然レトモ、其原形ハ、一般ニ用キガタキコトモアリ、因テ、姑ク、本文ノ如ク說ケリ、他ノ「もも、」（百）「ち」（千）等モ然リ。

七二節

○西洋ニテハ、數詞ヲ獨立ニ立ツル國モアリ、英文典ノ如キハ、形容詞ノ中ニ入ル。而シテ、彼ニハ、順序數詞トイフモノアリテ、其語形ヲ變ジナドシテ、「第一ノ、」「二番ノ、」「三號ノ、」「四ツ目ノ、」ナドノ意ヲ成ス。或ル國語文典ニハ、彼ニ模倣シテ、順序數詞ヲ立テタルモアレド、順序ノ意ハ、添ヘタル「第、」「番、」「號、」「目、」等ニ

アリテ、數詞ニハ與カラズ。

七三節　(本、一一五)動詞ノ動ノ字ヲ、或ハ、人偏ヲ添ヘテ、働ト記スモノモアレド、俗字ナルノミナラズ、動作ノ動ノ字ヲ用キテ、事足レバ人偏ハ不用ナリ。

七四節　○「あり、無し、似る、齊し、異なり、同じ、富む、貧し、老ゆ、若し、痛む、痛し」ノ如キ、事物ノ現象形狀等ヲイフ意ニ至リテハ、各、同類ノ語ナルガ如クナレド、然ラズ、單語ノ類別ハ意ニノミ據ラズ、形ニモ據ルヿ、是類別ノ標準ナリ。「あり、似る、富む、老ゆ」ノ如キハ、其語尾ノ活用、他ノ動詞ト同ジキノミナラズ、助動詞ヲ受ケテ、能相、所相、使役相、過去、未來、等ヲ形作ルヿ、他ノ動詞ト異ナラザルニ、形容詞ハ然ルヿ能ハザレバ、同一ノモノトハシガタキナリ。

七五節　(本、一一八、一一九)自動トハ、自ラ動作スル意ナレド、他動トハ、動作ノ他ヲ處分スルナレバ、動他トイフベキモノヽ如シ、然レドモ、今ハ、慣用ノ稱ニ據ル。

七六節　○標準トイヒ、目的トイフ、同ジヤウニテ、又、有對トイヒ、單對、複對、トイヘバ、標準、目的、同ジ事トナリテ、不都合ナレド、好字面ニモ思ヒ當テネバ、此ノ如シ。

英文法ノ Object ヲ、Direct トイフモノ、目的(を)ニテ、Indirect トイフモノ、標準(に)ナリ、I teach him grammar. ナド是レナリ。

自動、他動ニ、有對、無對、單對、複對、ヲ類別シタルハ、此書ノ創見ナリト思フ、前人、説アリヤ。

七七節　(本、一二〇)「わびぬれば、身をうき草の、根を絶えて」(古今、十八)由良の門を、わたる舟人、櫂を絶え」(新古今、十二)ナドモ、自動ヲ他ニ用キタルモノカ、或ハ「を」ハ感動詞ナルカ。(或ハ「かぢを」ハ、櫂緒ナルベキカ、)

○世ノ文典ニハ、「見ゆ、見る、乾る、乾す、落つ、落す、殘る、殘す、立つ、立つる、當る、當つ、」ナド對ヒ合ハセテ、自他ヲ排列シテ、其活用ノ異同ナド教フルモノアリ、是等、遇ニ對語アルモノヲ擧ゲテ示シタリトテ、文法ノ記臆上ニ、益、少シ、何トナレバ、自動ノミニテ、他動ノ對語ナキモノ、他動ノミニテ、自動ノ對語ナキモノ、其他ニ極メテ多カレバナリ。「咲く、歩む、泣く、等ニ、他動ノ對語ナシ、「飲む、食ふ、」書く、記す、等ニ、自動ノ對語ナシ、許多ノ動詞ノ、自他ノ意ハ、對語、又ハ、活用ノ差ナドニテ、一律ニ覺ユベキニアラズ、辭書ニ據リテ、自他モ、活用モ、其語毎ニ知ラムヨリ外ニ、法ナキナリ。

七八節　○英語ニテ、自動詞トイフハ、本文ニ言ヘル「無對自動」ノミニテ、其他ノ「を、に、」と、「等」ノ目的標準ヲ要スルモノハ、皆他動ナルガ如シ、「より」まで」等ハ、前置詞」羅甸語ナドハ、之ト異ナリ、尙、後ノ第二五二節ヲ見ヨ。

七九節　(本、一二一)洋字ニテ記セバ、う(u)‖え(e)ハ、全體ノ變化ナレド、く(ku)‖こ(ko)‖き(ki)‖す(su)‖せ(se)‖し(si)等ハ、發聲ヲ語根トシ、母韻ヲ語尾トスベシ。然レドモ、假名ハ、發聲、母韻ヲ合シテ、一字形ヲナセバ、其全體ノ變化ナリ。

八〇節　(本一二三)動詞ノ活用ハ、天然ニ、其動詞ニ具スルモノニテ、活用ノ狀コソ、互ニ異ナレ、各自ニ、正シク法ヲ具シテ、用ヲ缺クヿナケレバ、同趣ニ活用スル語少シトテ、之ヲ變格ト名ヅクベキ理ナケレドモ、俗諺ニ、所謂、多勢ニ無勢ニテ、變ト見ラレ、畸形ト見ラルヽモ、セムカタナキカ、然レドモ、正ノ反ハ、不正トナリテ、穩當ナラズ、常格、變格、ナドイフベキガ如シ、然レドモ、今ハ、姑ク慣用ノ稱ニ從フ。英文法ニ、規則動詞、不規則動詞、トイフモノモ、正ニ、我ガ正格、變格、ニ當リ、其不規則ノ稱アルモ、亦、少數ニシテ、且、活用區々ナルニ因ル。

八一節　(本、一二五)活用中ノ「る、れ、よ、」ヲ除キテ云々、ト說ケルハ、上二段トイフ命名ノ趣意ヲ釋カムガ爲ナリ、下、之ニ倣フ。然レドモ、此「る、れ、よ、」其實ハ、活用中ノモノナリ、其論ハ、後ノ第一一二節ニ說クベシ。

八二節　○古事記、上ニ、「根許士爾許士而」、「書紀ニ、「掘、景行天皇卷ニ、「扱、」万葉集、八ニ、「去年春、伊許自而植之、」ナドアル許士ヲ、契冲師ノ歌ニハ、「うれしくぞ、かねても梅を、うゑれきし、なきに根こざゝ、今年見ましや。」ト詠ミテ、四段活用トシ、「詞八衢」ニハ、中二段活用ト思ハルレド、「こずる、こずれ、」ノ例ナケレバトテ、除ケリ、或ハ、根起ノ約ナリトイフ說モアリ、疑問ノ活用ナレバ加ヘズ。(俗ニ「こじる」トイフ動詞ハ、良行四段活用ナリ。)

八三節　(本、一二七)上一段活用ハ、唯、一音ナルヲ、活用トイハムハ、理ニ合ハヌヤウナレド、各段ノ活用、形同ジキモノトイヘドモ、用法ニ因リテ、意義、各異ナレバ、尙、活用トイフベシ、(同形異義ノモノ、他ノ活用ニモアリ)下一段ナルモ、同ジ。

八四節　○上一段ニ活用スル語ハ、「射る、鑄る、沃る、着る、似る、煮る、乾る、曦る、」「放る、」見る、「試る、試みる、顧みる、鑑みる、惟みる、後見る、」以る、「用ゐる、率ゐる、居る、」(毀る)等、僅ニ十數語アルノミ。但シ「試みる、後見る」ハ「こゝろむ、うしろむ」ト、上

二段ニ活用セシメタル例モアリ。

八五節　○「射る」「鑄る」「沃る」ノ「ら」ハ、阿行ノ音ナルカ、也行ナルカ、知ルベカラズ、(種々ノ説アレド、イヅレモ、イカヾ、)今、姑ク、阿行ノ順ニ入ル。

八六節　○古事記ノ「泣きらさちる」(後ノ第八九節ヲ見ヨ)宇治拾遺、十四ノ「唐綾一ツをゞ、唐には、美濃五匹がはゞにぞ用ひるなる」ナドヲ、上一段ナラム、ナドイフ説モアレド、一段活用ノ語ハ、一音ニ限リ、二三音ナルハ、皆、熟語ナル例ナレバ、取ラズ。

八七節　(本、一二九)「蹴る」トイフ動詞ノ活用ヲ言ハム。神代紀ニ「蹴散」ヲ「倶穢簸邏々箇須」ト註シ、古事記、上ニ「蹶散」又ハ「蹶離」トアリ、垂仁紀ニ「當麻蹶速」モアレバ、「くう」「くうる」「くうれ」ナドノ用例ハ見當ラネド、和行、下二段活用ト見ルベシ。又、皇極紀ニ「打毬之侶」トアリ、「蹴鞠」ナリ、「打毬」ニアラズ、「くゆる」ハ「くうる」ノ誤カ)又、新撰字鏡ニ「蹣、万利古由」トアリ、同書ニ、又「跓蹰、行貌、用力也、古江奈良不」トアリ、和名抄ニ「蹴鞠、世間云、末利古由」トアリ、同書ニ、又「距、鷄雉脛、有岐也、阿古江」トアリ、字鏡ニモ「距足角也、阿古江」トアリ、(足蹴ノ義)「こゆ」ト「こゑ」トモアレバ、是等ハ、也行下二段活用ナリ。サレバ、此ノ動詞ハ、和行下二段、也行下二段、兩様ノ活用アリト定ムベシ。然シテ、「うゑる」(饑)「きゆる」(消)ナドヲ、「うゑる」「きゑる」ト訛ル例ニテ、(後ノ第八九節ニイフ「伊佐知流」「太々禮留」ノ如ク)「くうる」「こゆる」ヲ「くゑる」ト、モ「こゑる」ト、モシテ、更ニ約メテ「ける」トシタルニテ、終ニ、別ニ、下一段ノ活用ヲ成セルナリ、推古紀ニ「伊比爾慧而許夜勢屡」(飯ニ饑テ臥セル)ナリ)トアリテ、「うゑて」(饑而)ヲ「ゑて」ト約メテイフモ、後世「しづる」(出)ヲ「しでる」ト訛リ、又「でる」「でて」ト約メテイフモ、共ニ「くゑ」「こゑ」ヲ「け」ト約メテイフト同シ趣ナリ。(「きえぬが上に」(不消上)ヲ「けぬが上に」ト、シ「ゆきぎえ」(雪消)ヲ「ゆきげ」トスルナドモ、)

扨、「ける」ト約マリテ一語ト成シルモ、古キヿニテ、落久保物語ノ二ニ、「只今の太政大臣の尻はけるとも、此の殿の牛飼に、手な觸れてむや、」同書、四ニ「かの典藥の助は、蹴られたりし病にて死にけり」などて、あまり蹴させけむ」榮華物語、根合ニ「人々まゐりて、鞠けなど遊ばせ給ひし所なり」宇治拾遺物語、二(業村、强力の學士に逢ふ事の條)ニ「必ず、けたまへ、云々、れのれが蹴てむには、云々、此の尻

八八節

けよ云々、尻蹴むとする相撲云々、走りかゝりてけたふさひ云々、蹴はづして云々、尻けつる相撲云々、古今著聞集十七ニ「大納言成通卿の鞠は云々、大雨の時には、太極殿にゆきてこれをける、千日のはてゝの日云々、鞠をけひと思ふ心つきて、すなはち、西より東へ蹴てわたり、」梶原景季ノ歌ニ「鞠子川蹴れなゞ波は、わがりける、」ナド見エテ、下一段活用ノ用例ヲ全備シタリ、斯ク、古クヨリ用キ來テ、其慣用ノ久シキコト、終ニ、耳ニ口語ノ調トモ聞エヌマデニナリタレバ、文章語トシ、一ノ活用ト立テヽ、可ナラム。或ハ、良行四段活用トシテ用キルベシ、トノ説モアレド、「けらむ、けり、」ナドノ出典アリヤ。

○或ル文典ニ「ける」(蹴)絲ヲ「へる」(綜)麹ノ「ねる」(殖)ヲ殊ニ取リ出デヽ、下一段活用ハ、此ノ三語ニ限ルトシタルアリ、「へる、ねる、」ヲ加ヘタルハ、文章語ニ、口語ヲ混シタルヤウナリ、若シ、口語ヲ擧ゲバ、此ノ二語ニハ限ラジ。又、コレヲ文章語ナリト言ハムカ、ソハ肯ハレズ、古今集十ニ「白露を、玉に貫くとや、蜘蛛の、花にも葉にも、絲をみな綜し。」拾遺集八ニ「君がくる、宿にたゑせぬ、瀧の絲は、へて(久シク居テ)見まほしき、ものにぞありける。」夫木集十ニ「我が祈る、願の絲の、年を

八九節

へて、逢はでしもやは、秋のたなゝた。」同書、廿六ニ「昔より、名に流れたる、岩瀧の、水の白絲、幾代へぬらむ。」金葉集、八ニ「近江にか、ありといふなる、かれいひ山、君は越ねけり、人とぬぐさし。」是等ノ歌ヲ引キテ、下一段活用ナリトイヘド、拾遺集、夫木集、ナルハ、三首、蹉歴ト「綜」トヲ言掛ケ、金葉集ナルハ「寐」ト「殖」トヲ掛ケタレバ、却テ、下二段活用ナル確證トスベシ、(歴、寐、共ニ、下二段ナリ、「殖る」ハ、麹ノ黴ブルヲイヒテ、餉ノ黴ブルヲ「寐る」ニ掛ケテイヘルナリト云、)殊ニ「綜る」ノ方ハ、活語雜話、初篇ニ、元眞集ノ一本ヲ引キテ「青柳の、絲によりてぞ年をふる、うき世そむける、跡もたちける。」ノ「ふる」ハ「年を歴る」ト「絲を綜る」トヲ掛ケテ詠メル由イヘレバ、論ナシ。殖ノ方ニ「ぬる」ト用キタル例、見當ラネド、(ねる)ト用キタル例ハ、尚更ナシ、)引歌中ノ用法ヲ推シテ、下二段トシテ、更ニ妨ゲズ、「あたふ」(能)トイフ動詞ハ、「あたはず」ト用キタル外ニ、例ナケレド、用法ニ因テ、四段活用ト定ムベキガ如シ。

(本、一三〇)上二段活用ノ「しくる、」「れつる、」ナドヲ「しきる、」「れちる、」ナド訛リ、下二段活用ノ「うくる、」「まかする、」ナドヲ「うける、」「まかせる、」ナド訛ルヿ、上世ニモアリ

九〇節

シヤウナリ、仁德紀ニ「泣悲」(イサトカナシミ)、古事記ニ「啼伊佐知伎」(ナキイサチキ)ナドアルニ、古事記ノ他處ニ「哭伊佐知流」(ナキイサチル)トモアルハ、上二段活用ノ訛ナリ、(阿良毘流(アラヒル)モアリ)又、新撰字鏡ニ「蹤、太々禮留」(タダレル)トアルモ、下二段活用ノ訛ナリ。

(本、一三二)案ズルニ「れはす」ハ、古言ニ「大坐坐」(オホマシマス)トイヒシ語ヲ、後ニ省キテ「れまし ます」トイヒ、又、ソレヲ省キテ「れます」トイヒシヨリ「れはす」ト轉ジタルナリ、(サレバ「おはす」トイフ語、古クハ無シ)サテ、其語原ナル「ます」ハ、四段活用ナレバ「れはす」モ、元來、四段活用ナルベク、其用例モ、往々アリ。(次ニ擧グベシ)サルニ、又、下二段活用ナルガ如キ用例ハ、枚擧スルニ暇アラズ、語原ナル「ます」ノ、下二段ニ活用シタル明證ハ無ケレド、後世、打消ニ「ませぬ」ト用キ、未來ニ「ませう」(ませむ)ノ音便)ト用キ「む」ニ接シテ「ますれむ」ナド用ヰルモ、何カ由アリゲナリ、扨、ソレヨリシテ別ニ、更ニ、下二段活用ニテ「れはす」トイフ動詞ヲモ生ジタルナルベシ。(或人ハ「れはさ、する」ノ約マリテ、下二段活用トナレルナラム、トモイヘド、使役スル意ナク、「れはせ給ふ」ト敬語ニモ用キラレネバ、イカヾ)サレバ、此語ハ、元來、四段活用ト下二段活用ト、二樣ノ語アリテ、意ハ、同ジキモノナリシナルベシ、「もる、もるゝ」(洩)わかる、わかるゝ」(分)うづもる、うづもるゝ」(埋)ひらく、ひらくる」(開)しく、しくる」(生)ナド、各、二樣ノ活用アリテ、自動、他動、ノ差モナク、同意義ナルガ如キト、同ジ趣ナルカ。扨、其二樣ノ活用、混淆シテ、遂ニ佐行變格ノ活用ト見做セルナラム。而シテ、若シ、鄙見當レリトセバ、佐行變格ニ活用スル語モ、「す」(爲)ノ一語ニ限ルトセムカ。

「れはす」ノ四段活用ナルベキ例ハ、山口祭、上ニ、諸書ヲ引ケルヲ擧ゲム。大和物語ニ、「下野の國、云々、れはさず」、宇津保物語、藏開ニ、「彈正宮も、云々、これも、れはせ、とのみあめれど」、落久保物語ニ、「又、れはせ、と引きせむれど」、蜻蛉日記ニ、「小一條の大將、云々、れはせとて」、枕草子ニ、「又、屋かたといふものにぞれはす」、大鏡ノ序ニ、「そこにれはせるは、云々」、命令法ナルハ、下二段、又ハ、佐變ニ「よ」ヲ添ヘヌ古格ナリトモ、イハルベケレド、他ニ爭ハレヌモアリ、)

右ノ如クナレバ、源氏物語ノ少女ノ、湖月抄本ニ「大宮の御世の、殘少なげなるを、れはさずなりなむ後も、云々」トアルヲ、誤ナリトモ斷定シガタシ。其他ニ枕草子ニ「家に入りたらむ人をぞ、去らでもおはせかし。」宇津保、祭の使ニ「さ

むらひにれはす中將の君」源平盛衰記、南都異本、頼朝重衡對面ノ條ニ「私の敵にてもれはさむこそ、南都の衆徒、申請の旨もあり、私に討つべきにあらず。」ナドモアリ。以上ノ例、皆、誤寫ナリトモ抹殺スベカラザルガ如シ。又、大鏡ノ序ニ「いざたまへ、昔の物語して、このれはさう人々に、さらぬ、古への世は、かくこそはありけれと、聞かせ奉らむ」ナドモ、「れはさむ人々」ノ音便ニテ、「う」ハ「む」ノ發聲ヲ默セルナリ。)四段活用ナラム、現在ヲ未來ニイフハ、「我が身、斯くて候はむ程は」ナド常ニイフ筆法ナリ。源氏、槇柱ニ「打ちひそみて、泣きれはさうず」同、宿木ニ「清げにれはさうずる御子どもの」ナドモ、「れはさむず」ノ音便約ニテ、是レナラム、(謠曲ニ「御宿まゐらせうずるにて候ふ」ナドイフモ、「せむずる」ナリ。)

然レドモ「れはす」トイフ動詞ノ活用ハ、佐行ノ變格ナリトイフ、國語家ノ間ノ一定ノ論ニテモアリ、前ニ述ベタル考證モ、更ニ、一層、推究スベキ所モアレバ今ハ、姑々、世論ニ從ヘルヿ、本文ノ如シ。

九一節　(本、一三三)「なみす」ノ「なみ」ハ「無し」ノ語根ニ「み」ノ添ヒテ、名詞トナレルナリ。

「れもんず」ハ「れもみす」ノ音便ナリ。「ほつす」ハ、良行四段活用ノ「欲る」ノ名詞法ノ「ほり」ヲ「す」ニ連ネテ、促聲ニイフナリ。「こうす」ノ「こう」ハ「困」ノ音便ナリ。「けみす」ノ「けみ」ハ「撿」ノ音轉ナリ。「ごらう」モ、御覽ノ音便ナリ。又「あまんず」(甘)「かろんず」(輕)ナドモアリ「あまみす」「かろみす」ノ音便ナリ。

九二節　(本、一三五)國語ニテ「死」トイフ一音ニ、死ヌル意アリ「殺す」トイフ下二段活用ノ動詞モアリ、(漢字音ノ「死」ト、暗合ナリ、)「死ぬ」ハ「死往ぬ」ノ約マレル語ナリト云、然ルトキハ、此ノ變格ノ活用モ、「往ぬ」ノ一語アルノミ。

九三節　(本、一三六)「をり」ハ「ゐ」(居)ト「あり」トノ約「はべり」(侍)ハ「はひ」(這)ト「あり」トノ約「しまます」(往)ト「あり」トノ約ナリ、トイフ說アリ、然ルトキハ、此ノ活用モ、「あり」ノ一語ナリ。

九四節　(本、一三八)動詞ハ、他ノ語ト熟語トナレバ、活用ヲ變ズルヿアリ。「あり」(有)ハ、良行變格ナレド「ござ」(御坐)ト熟語トナルトキハ、「ござる」トナリテ、四段活用ニ變ズ。「をり」(居)モ、良行變格ナレド「か」(香)ト熟語トナレバ「かをる」(薫)トナリテ、四段活用トナル。又「れる」(降)ハ、上二段活用ナレド「あま」(天)ト熟語トナリテ約

マレバ「あもる」(天降)トナリテ、四段活用トナル。「す」(爲)ハ、佐行變格ナレド、「なく」(無)ト熟語トナレバ「なくす」(失)トナリテ、四段活用トナル。所相ノ「たすけ、らる」ハ、下二段ナレド、「たすかる」ト約マレバ、四段トナル。「く」(來)ハ、加行變格ナレド、「で」(出)ト熟スレバ「でく」(出來)トナリテ、上二段活用トナル。助動詞ノ「たり」ハ、良行變格ナレド「さ」(來)ト熟スレバ「きたる」(來)トナリテ、四段活用トナル「日のもとの、やまとの國は言靈の、さきはふ國とぞ古言に、ながしきたれる神言に傳へきたれる。」(續後紀)守の館より、呼びに、文もてきたれり。」(土佐日記)六波羅の別當、長慶、云々、時元、とぶらひに來りたりけるに、」(著聞集、廿三)ナドノ如シ。(但シ、万葉集ノ「春過ぎて、夏來たるらし、白妙の、衣乾したり、天の香山。」ナドハ、「來」ト「たる」ト、別ナリ、下ニ「乾したり」アレバナリ。)

九五節　(本、一四一)將然、連體截斷、連用、己然、希求ハ、義門師ノ創稱ナリ、終止ハ、黑川眞頼大人ノ改稱ナリ、未然、續詞、斷止、續言、己然ハ、堀秀成大人ノ命名ナリ。直說法、命令法ハ、洋文典ノ譯語ニ出ヅ。不定法、中止法、名詞法ハ、此篇ノ新設目ナリ。(不定法ハ、洋文典ノ譯語ニイフモノト異ナリ。)

九六節　○從來、終止言、連體言ナド、言ノ字ヲ當テタルハ、妥當ナラズ、今、洋文典ニ慣用スル譯語ニ據リテ、法トシタリ。サレド、動詞ノ法トイフモノハ、語氣ノ態度ナレバ、法ト稱セムヨリハ、終止態、命令態、ナド、セバ、可ナラムカ、然レモ、今ハ、姑ク改メズ。(或ハ式トモ名ヅケムカ、又、或ハ格ト名ヅケタルモアレド、洋語ノ名詞ニイフ格ト紛ヒ易シ。)又、此ニイフ法ノ事ニツキテハ、我ガ動詞ト、西洋ノ動詞トノ間ニ、甚ダ其趣ヲ異ニスルコアリ、彼ヲ以テ我ヲ律シテ、怪ムヿ勿レ、委シクハ、後ノ第一一一節ニ辨ズベシ。

九七節　(本、一四二)動詞ノ本體ヲ、活用トハ言ハルマジキカ、然レモ、他ノ活用ヨリ見レバ、亦、活用中ノ一トモ見做サルベシ。

九八節　(本、一四五)我ガ讀む書、ノ如キハ、英語ニテハ、關係代名詞ヲ用ヰル場合ナルベシ。「讀む書、ノ如キハ、現在分詞ナリ。

九九節　(本、一四七)將然、已然ハ、未定、既定、或ハ、未來、過去、ノ意ヲイフ稱ナレド、ソレモ「む」「む、」「ども、」「ども、」等ヲ添ヘテノ上ノ事ナリ、「讀まし む、」「勤めず、」「見らる、」ナドニ、將然ノ意モ已然ノ意モナシ、サレバ、此ノ法ニ、將然、已然等ノ名ヲ付セズ、將然、已然、

ノ意ハ、スベテ、相接スル「む」「ぬ」「ぬる」等ノ方ニ、讓リテ、說ケリ。

一〇〇節　○洋文典ノ譯語ニテ、不定法(Infinitive.)トイフモノ、此ニイク不定法トハ、異ナリ、混シ思フベカラズ。

一〇一節　(本、一四八)此ニ、中止法トイフモノ、從來、(連用言ト稱シテ、)次ナル連用法ト別タズ、サレド、連用法ニテ、「讀み果つ、」「落ち入る」ナド用ヰル「讀み」、又ハ、「落ち」トハ、其用法、甚ダ異ナリ、甲ハ、二語相合シテ一熟語ヲ成セド、乙ハ、各自ニ個々ノ動作ヲ表ハス、「落ち啼く」トシテハ、義ヲ成サズ、因テ、別ニ一法ニ立テタリ、是レ、此ノ書ノ創意ナリ。

一〇二節　(本、一五〇)後撰ノ歌ハ、障ハルナアリテ、正月ノ子ノ日セザリシニ因リテ、花ヲダニ見ム、早ク咲ケカシ、ノ意ノ歌ナリ。蜻蛉日記ノ歌ハ、「尋常ナラバ、憂キヲモ知リ、身ヲモ捨テタル人コソ、山路ニ深ク思ヒ入ラメ、今ハ、然モアラヌニ山路ニ深ク入ルコトヨ、」ト旅ノ物淋シク心細キ情ヲイヘルナリ。西行法師、路スガラ、尼ノ屋ヲ訪クヲ見テ、「賤ガ板屋を、ふきぞわづらふ、」ト口ズサミタレバ、尼、「月はもれ、雨はとまれと、思ふにぞ、」トツケタリト云フ。

一〇三節　○漢籍讀ノ訓點、近古マデ、正シカリシニ、四書ノ道春點ナド見テ、略、知ラル、近世、佐藤氏ノ一齋點出デヽヨリ、亂暴ニ古點ノ法ヲ破レリ、文法ノ賊トイフベシ、本文ニイヘル「不飲茶飲酒」モ「飲茶不飲酒」モ、差別ナク讀マルヽヤウニナレルモ、是レナリ、スベテ、今ノ漢籍讀ミ下シノ文ノ、破格ノミ多キハ、皆、一齋點ヲ學ベル書生ヨリ起レルナリ、世ヲ毒スル甚シトイフベシ、是等ノ駁擊ハ、日尾荊山ノ訓點復古トイフ書(板本、二冊)ニ委シ、就キテ見ルベシ。

一〇四節　○論語、雍也篇ニ「不有祝鮀之佞而有宋朝之美」トアル「不」ノ字ヲ、有佞ノミヲ打消ストシ、有美ノミヲ打消ストシ、二ツナガラ打消ストシテ、學者ノ間ニ、各、見解ヲ異ニスルモ、參考ニ資スベシ。

○或ル雜誌ニ「政府ノ命令ニ從ヒ、其墳墓ヲ他ニ移スヿナクシテ、」トイフ文アリキ、此ノ文ニテハ、命令ハ「差シ置ケ」トアリシニヤ、「移セ」トアリシニヤ、解スベカラズ、「移セ」トアリシナラバ、「命令ニ從ハズ」トカ、「命令ニ背キ」トカスベク、「差シ置ケ」トアリシナラバ、頓倒シテ、「其墳墓ヲ他ニ移スヿ勿レ、」トノ命令ニ從ハズシテ、」ナドスベキカ。國文ニハ、斯ル文脈、屢、出デ來テ、常ニ困却スルヿ、獨リ

中止法ノミナラズ、約定書ナドニハ、痛心ニ堪ヘヌナリ、是レ畢竟ズルニ、文法ノ學未ダ幼稚ナルナリ、世ノ文法家、潛心ニ推敲考究スベキナリ。

○古今、二ノ歌ハ、「春氣ハ、一面ナルモノナレバ、至レル里、至ラヌ里ハ、アルマシキニ、ドウシテ、花ノ咲ケル所、咲カヌ所ノ、アルヿヤラ」ノ意ナリ。新古今、一ノ歌ハ、「散リテモ、散ラデモ、誰レ訪ヒ尋ヌル人モナキ古里ノ、閑寂ノ涙モ露ケキ花ニ、タマ〳〵訪フモノハ、憂キ春風ゾ」トナリ。

○萬葉、七ノ歌ハ、「雨ハ降ル、借庵ハ作ル、實ニ忙ハシ、何ノ暇ニ、吾兒ノ海ノ潮干ニ、アハビ玉ヲ拾ヒテ、面白ク樂ムベキゾ」トナリ。土佐日記ノ歌ハ、「風起テハ、波モ起ツ、風鎮マレバ、波モ鎮マル、風ト波トハ、相思フ中ナラムカ」トナリ。

一〇五節　(本、一五一)動詞ト助動詞ト連續スルニモ、「讀まゑむ」、「讀みたり」、「讀むべし」ナド、皆、一定ノ則アリ、是等モ、畢竟ズレバ連用法ナリ。然レドモ、是等ヲ、一々、法ト立テバ、頗ニ堪ヘザラム、因テ、動詞ト助動詞トノ連續ノ則ハ、別物トシテ、助動詞ノ條ニ、別表ニ作リテ讓レリ。

一〇六節　(本、一五三)稀ニハ、第一活用ノ、名詞トナルヿアリ、「蟾蜍(タニグク)、(谷蟆)樽(タル)、(垂)螢(ホタル)、(火垂)陽炎(カゲロフ)、」閨(ウルフミス)、御統(マルシヅク)、筆(シヅク)、山田ノそほづ(ソホヅ)、(濡)角力(スマフ)、(俗ニ、出立(シユツタツ)、井サフラフ)、食客、」人名ニ、「順(シタガフ)、」融(トホル)、」蹟(キソフワタル)、」渡ナド皆、然リ。

一〇七節　○此ノ法ニ、從來、假體言、虛體言、等ノ稱アレド、實體モアリ、「氷(コホリ)、」鋏(ハサミ)、」扇(アフギツ)、」包(ミタラヒワタリ)、」盥、渡等、是レナリ。

一〇八節　○名詞法ハ、羅甸ニイフ Gerund. ナリ、英語ニテハ、不定法、現在分詞、共ニ名詞トナル。

一〇九節　(本、一五四)命令法ノ一欄ハ、從來ノ活用圖ニハ、設ケラレズ、サレド、奈行變格ノ如キ、紛レ易キモノモアリ、必ズ、掲ゲズハアルベカラズ。

○上二段、下二段、上一段、加變、佐變、等ノ命令法ニ添フ「よ」モ、元ハ感動詞ノ「よ」ナラムカ、然レトモ「よ」無ケレバ、命令ノ意ヲ成サヌモアレバ、尙、活用中ノモノト見ルベキナリ。又、古クハ、一切「よ」ヲ添ヘザリキトイフニハアラズ、同時ニ「よ」ヲ添ヘシ用例モ、固ヨリ多ク見ユルナリ。

○上二段活用ノ命令ニ「よ」ヲ添ヘヌハ、建暦御記、下、交易御馬御覽條ニ、「上卿(シヤウケイ)曰、乘禮、騎二三廻、後、上卿曰、下(ヤ)利、次引立南殿」ナドナリ、但シ、極メテ稀ナルヤウナ

り。上一段活用ナルニモ、稀ニアリ、萬葉集、一ニ「よき人の、よしとよく見て、よしといひし、芳野よく見よ、よき人四來三」ハ、玉小琴ニ「或人の「よくみ」をよめるを用ふべし、見とのみいひても、「見よ」といふ意になる、古言の例なり。」トアリ、「よくみつ」トヨメルモワロク、活語指南ニ「み」トノミイヒテ、截斷言ナリ、ドイヘルモ、イカヾ。

儀式、春日祭ニ「次、奚笛工名、二人、共稱唯、副命、琴笛相和」註ニ「詞云、美許止爾、布江安波世」トアルモ「あはせよ」ナリ。風俗ニ「與世波與勢」トアルモ「寄せよ」ナリ。續紀、二十ニ「此事伊佐世、止伊射奈布」トアルモ「いざせよと誘ふに」ナリ。又、催馬樂ニ「看求めに、こよろぎの磯」ナドモアレバ、古ク、加變ノ命令ニ、よヲ添フルコモアリシカ。

一一〇節　(本、一五五)世ノ文典中ニ、正格、變格ノ諸活用ニ、各自所屬スル動詞ヲ、數十百語、アルカギリ列擧シタルモノアリ、慾クベシ。(形狀言ナドモ然リ)是等ノ事ハ、「詞八衢」ヨリ因襲シタルニモアルベキカ、サレド、同書ハ、動詞ノ活用ヲ分類甄別セムガ爲ニ、諸書ノ用例ニ據リテ考證シタルモノニテ、即チ、活用ノ類別ヲ、

一一一節　專門ニ說ケル書ニテ、寧、動詞ノ辭書トモイフベキナリ、サルヲ、文典中ニ襲蹈シテ、文典ト辭書トノ區域ヲモ辨ゼズハ、ソモ何ノ心ゾヤ。

○洋語ノ動詞ニ、Mood.(姑ク、英語ニテ記ス、下、同ジ)トイフモノ、即チ、此篇ニイフ動詞ノ法ナリ。然レドモ、彼我ノ語性ニツキテ、頗ル、其趣ヲ異ニスルアリ。又、洋語ノ動詞ニハ、Vois.(口氣ト譯ス)Tense.(時ト譯ス)トイフモノアリ、サレド、我ガ動詞ニテハ、是等ノ意義ハ、他ノ助動詞ト連續關係シテ始メテ起ル、故ニ、今ハ、助動詞ノ條ニテ說クコトセリ。左ニ、其異同ヲ辨ゼム。

Mood.トイフ語ヲ、辭書ニ據リテ、其意義ヲ求ムルニ、「動詞ノ語尾變化ニヨリテ生ズル語氣ノ態度ナリ」トアリテ、一動詞ノ、其語體ヲ變化シテ生ズルモノナリ。

羅甸ノ動詞ニハ、直說法、可成法、(Potential.)接續法、命令法、不定法、名詞法、分詞法、等アリテ、其法ハ、スベテ、一動詞ノ語體ニ具備スルモノニテ、其語體ヲ變ジナドシテ、能ク衆法ヲ表ハシ、他ノ助動詞ナド添ヘテ成ルニハアラズ。而シテ、右ノ諸法ノ中ニテ、直說法、(終止法ナリ)命令法、名詞法、分詞法、(連體法ナリ)等

ハ、我ガ動詞ニイフト、粗同ジク、共ニ、語體ヲ變ジテ成ル。然ルニ、其不定法トイフモノハ、動詞ノ單行スル時ノ法ナレドモ、我ガ動詞ニハ無シ。(此ノ篇ニイフ不定法トハ、異ナリ。) 又、可成法、接續法、トイフモノモ、我ガ動詞ニハ無シ、但シ、助動詞ノ「る、らる」(讀まる、勤めらる、)ノ如シ)ヲ添フレバ、可成法ノ意ニ當ツルヲ得ベク、亘爾波第三類ノ「む」(讀めむ、勤むれども、)ノ如シ)ヲ添フレバ、接續法ノ意ニ當ツルヲ得ベシ。

西洋諸國ノ文法ハ、率ネ、羅甸ノ文法ニ倣ヒテ作リシモノナリト云フ。英國ノ動詞ニモ、羅甸ノ如ク、直說法、可成法、接續法、命令法、不定法、及ビ、分詞法、名詞法、(此ノ二法ハ、法トハセデ、單ニ、分詞ト立テタルモアリ、)等ヲ立ツ。然ルニ、其可成法ハ、動詞ノ體ノ變化ニハアラデ、動詞ノ前ニ、別ニ助動詞ヲ加ヘ、又、接續法モ、多クハ、動詞ノ前ニ、別ニ接續詞ヲ加ヘテ、其意義ヲ成サシメ、(動詞ヲ、主格名詞ノ前ニ置キテ形作ルモアレド)其可成、接續、ノ意義ハ、動詞ノ語體ニハ存セズシテ、添ヘタル助動詞、接續詞、ノ方ニ存スルモノヽ如シ。サレバ、英ノ動詞ニイフ可成法、接續法ハ、其語體ニハ具ヘヌヲ、他語ヲ加ヘテ、羅甸ノ法ニ擬シテ作爲セルモノナリ、是等ハ、英ノ語學者ガ無用ノ模擬トイフベク、既ニ、其國ノ學者中ニモ、コレヲ法ナラズト論ズルアリ。然ルニ、今日、洋文法ヲ以テ、國文法ヲ論ズルモノ、例ヘバ、「讀まる、勤めらる、」ナドヲ可成法ニ立テ、「讀めむ、勤むれども、」ナドヲ接續法ニ立ツルアルハ、其ノ謬見ヲ遺傳セルモノトイフベシ。或云、英ノ助動詞ハ、動詞ト密着スルモノニテ、其前ニ居ルト後ニ居ルトヲ問ハズ、合シテ一語ト見ルベキナリト。今、姑ク、英ノ動詞ハ、或ハ然ラムトストモ、我ガ助動詞ハ、大ニコレト異ナリテ、語尾ニ、變化アリ、法アルヿ、粗、動詞ニ同ジク、例ヘバ、「勤めらる」ハ「らる、」「らるれ、」「られ、」ト變化シテ、更ニ、種々ノ法ヲ成ス、是等ヲバ、如何ニカセム、法ニ法アリトイフヿヤアルベキ。扨又、我ガ動詞ニハ、連用法、不定法、(此篇ニイフモノ)ナドイフモノアルニ、彼ニハ絶エテ無キガ如シ。凡ソ、是等ノ事ハ、東西ノ語法ニ、自ラ天然ノ差異アリテ存スルモノナリ。

Voix. ハ、口氣ト譯スベクシテ、辭書ニ據レバ「動詞ノ一種ノ變體ニシテ、文主(Subject.)ト、動詞ノ動作ト、ノ關係ヲ指別セシムル別體ナリ、」トアリ。此ノ口氣ニ、

能相(Active.)ト所相(Passive.)トノ二樣アリテ、羅甸語ニテハ、一動詞ノ語體ニ、此ノ二樣ノ變化ヲ具セリ。然ルニ、我ガ動詞ニテハ、例ヘバ「打つ、傳ふ」ノ能相タルハ、論ナケレド、其所相ヲ形作ラムトスレバ別ニ、助動詞ノ「る、らる」ヲ添ヘテ「打たる、傳へらる」(亦、變化アリ、法アリ、)ナド、スルナリ。而シテ、其能相ノ意義ハ、所相ニ對シテ始メテ生ズルモノナレバ、能所ノ事ハ、助動詞ノ「る、らる」ノ條ニテ說クコトセリ。(英ノ動詞ニモ、所相ハ、前ニ助動詞ヲ添ヘテ言フガ多シ。Tense.ハ、時ト譯シテ、亦、動詞ノ動作ノ現在ナルト、過去ナルト、未來ナルトヲ示スニ就キテ起ル一種ノ轉化ニテ、是モ、羅甸ノ動詞ニテハ、其語體ニ、此ノ轉化ヲ具セリ。我ガ動詞ニテモ「打つ、傳ふ」ノ現在ナルハ、論ヲ待タザレド、過去ヲ寫シ出サムトズレバ、助動詞ヲ加ヘテ「打ちき、傳へき」ナドトシ、未來モ、助動詞ヲ加ヘテ「打たむ、傳へむ」ナドトスルナリ、(此ノ「き」「む」等、亦、皆、變化アリ、法アリ、)因テ、是、亦、助動詞ノ條ニテ說クコトセリ。(英語ノ如キハ、過去ノ轉化ヲ、動詞ノ體ニ具スルアリ、或ハ、前ニ助動詞ヲ添ヘテ示スモアリ、而シテ、未來ハ、率ネ、前ニ助動詞ヲ加フルガ如シ、)

一一二節

畢竟ズルニ、單ニ「打つ、傳ふ」トイフ語ヲ指セバ、一ノ動詞ト呼ブベキノミ。扨單ニ「打つ、傳ふ」トイフ語ナレド、所相ノ「打たる、傳へらる」ニ對スレバ、能相ノ名目ヲ生シ、過去未來ノ「打ちき、傳へむ」等ニ對スレバ、現在ノ名目ヲ生ズルナリ、サレバ、是等ノ事ハ、スベテ、助動詞ノ方ニ讓リテ、說クベキナリ。

○曩キニ、余ガ言海ヲ印行スルニ當リテ、此ノ文典中ヨリ、辭書ニ用アル所ノミ摘錄シテ、語法指南ト題シテ附錄トシタリシニ、多ク、世ノ文法家ノ容ルル所トナレリ。然ルニ、其書中ニ、動詞ノ四段活用、中二段活用、下二段活用、等ノ舊稱ヲ、第一類、第二類、等ト改稱シ、終止言、連體言、連用言等ヲモ、各、改稱セシ所アルヲ、諸方ヨリ來リ訴ヘテ云フ、理論、或ハ然ラム、然レドモ、舊稱、已ニ久シク慣用セラレタリ、唯、名稱トノミ見バ善ケム、枉ゲテ舊稱ニ依リテ改刊セヨト云フ、因テ、此ノ篇ハ、舊稱ニ改メタル所多シ、然レドモ、余ガ前說モ、何レノ日ニカ、遍ク世ニ用サラルヽコトモアラム、ナドモ思ヘバ、左ノ舊論文、强チニ捨テ難シ、因テ、此ニ、鷄肋トシテ附ス。

從來、作用言ノ活用ニ、四段、一段、中二段、下二段、等ノ名稱アリ。其四段活用ト

イフハ、例ヘバ「ゆく」(行)トイフ作用言ノ如キ、其語尾「か、き、く、け」ト活用シテ、五十音圖ニ照セバ、其圖ノ、上ヨリ四段ノ諸音ニ當ルガ故ニ、命名セルニテ、是レハ、其理アリトセム。然ルニ「き」(若)ノ「きる、きれ」ト活用スルヲ、一段活用ト名ヅケ「しく」(生)ノ語尾ノ「き、くる、くれ」ト活用スルヲ、中二段ト名ヅケ「うく」(受)ノ語尾ノ「くる、くれ、け」ト活用スルヲ、下二段ト名ヅクルナドハ、妥當ナラザルガ如シ。ソハ「き」又ハ「く」又ハ「く、け」ノ音コソ、五十音圖ノ一段、又ハ、中ノ二段、又ハ、下ノ二段ナレ、其他ニ「きる、きれ」「くる、くれ」ナドヽアル「る」「れ」ヲバ、唯、活用ヲ助クルモノトシテ、如何ニゾ、措キテ言ハザル。ソモ、此ノ「る」「れ」ハ、附屬物ノ如ク、等閑ニ視ルベキモノナラザルベシ、凡ソ、作用言ノ正格、變格、諸活用ノ中ニテ、此「る」「れ」ノ活用ナキモノハ、僅ニ、四段ト良變トノ二類アルノミ、(良變ニモ、「る」「れ」アレバ「る」「れ」ナキハ、四段ノミナリ、四段、却テ、變格ノ思ヒアリ)其他ハ、皆、此ノ「る」「れ」ヲ以テ、要用ナル連體、已然等ノ活用ヲ現ハスニアラズヤ、(ぞ、る、ころ、れ)ナドト、概略ニ「掛リ、結び」ヲ呼ブモ、作用言ニ、此ノ音ノ活用多キヲ思フベシ、) 若シ、此ノ「る」「れ」ヲ補助ノ活用ト言ハヾ、四段活用ノ連體言、已然言ノ語尾ヲモ、補助ナリト言ハズバアルベカラズ、何ニ因リテカ、同一ノ意義ヲ成スモノヲ、一ヲ本分ノモノ、一ヲ補助ノモノトハ定ムル、殊ニ、一段活用ノ如キニ至リテハ、此ノ「る」「れ」無キトキハ、第一ニ、作用言ノ本體タル終止言ヲ形作ルヿヲ得ズ。(「る」ハ「う」ノ韻ニ終ハル、作用言ノ終止言ハ、スベテ「う」ノ韻ナルベキ通則ヲモ思フベシ、) 又、希求言ヲモ、活用ト見ルトキハ、「よ」ノ音ヲモ、活用中ニ加ヘズハアルベカラズ、「よ」無ケレバ、希求言ヲ成サヌモノモ少カラザレバナリ。此ノ如ク論シテ、扱、從來命名ノ趣意ヲ奉シテ、正シク稱呼セムトセバ、加行一段活用ノ「き、きる、きれ、きよ」ヲバ「加行一段、良行下二段、也行一段、活用」ナドト呼ビ、良行下二段活用ノ「れ、る、るる、るれ、れよ」ヲバ「良行下二段、重複、顚倒、及ビ、也行一段活用」ナドヽ呼バズバ、他ノ四段活用等ニ對シテ、其命名ノ釣合ヲ失ハム、サレバトテ、斯ル冗長ナル名稱ハ、採ルベクモアラズ。此ノ故ニ、今ハ、四段、一段、ナドイフ意味アル命名ニハ從ハズシテ、單ニ、第一類、第二類、第三類、第四類、等ト號數ノ名ヲ命ゼリ。又、其順序モ、舊圖ニテハ、四段活用、最モ、五十音圖ノ順ニ當ルガ如ク、且、其所屬ノ作用言モ、數多ケレバ、之ヲ第一トシタルナルベク、而

シテ、次下ハ、五十音順ニ據リテ、次第セルナルベシ、然レドモ、今ハ、四段、一段等ノ名稱ヲ用ヰズ、ヨリテニモアレバ、其活用ニ所屬スル作用言ノ多少ヲ以テ、順序ヲ改メ、四段活用ヲ第一類トシ、下二段活用ヲ第二類トシ、中二段活用ヲ第三類トシ、一段活用ヲ第四類トセリ。又、既ニ、正格活用ノ名稱ヲ改メシ上ハ、變格活用モ、舊稱ヲ存シ難ケレバ、亦、第一、二、三、四類トセリ、但シ、其順序ハ、舊キニ從ヘリ。

一一三節

○從來ノ作用言活用五段圖ハ、五十音圖ノ段ヲ標準トシ、先ヅ、四段活用、一段活用、等ノ名ヲ定メ、扱、其活用ノ最モ博キ四段活用ノ音順(か、さ、く、け、等)ヲ基本ト立テヽ、他ノ活用ハ、或ハ、五十音ノ音順ヲ顚倒セシメ、(うけ、うく、こ、さ、く、せ、し、す、)ノ如ク)スベテ、四段活用ノ音順ニ從ヘテ製セシモノナルベシ。サレバ、[ゆか](行)ヲ基トシテ、他ノ[いき](生)うけ](受)等ノ、將然言トイフモノ、第一段ニ居ル。然レドモ、凡ソ、作用言ノ本體トイフモノハ、[ゆく](行)いく](生)うく](受)等ニテ、即チ、終止言トイフモノナレバ、先ヅ、某ノ作用言トテ、取出シテ記サムニハ、終止言ヲ、第一ニ置クベキ理ナラム、然ルニ、舊圖ニテハ、其本體タルベキモノ、第三段ニ居ルヿトナリテ、體裁宜シカラズ、是等モ畢竟ズルニ、五十音圖ヲ基トシ、四段活用等ノ名目アルガ故ニ、之ニ從ハザルヲ得ザルニ起レルナリ、然レドモ、縱ヒ、四段活用ノミ、[か、き、く、け、]ノ五十音順ヲ遵奉シタリトテ、他ノ[うけ、うく、こ、さ、く、せ、し、す、]等ニ至リテハ、到底、顚倒ノ人爲ヲ加ヘザルヲ得ズシテ、遂ニ五十音順ヲ守ルヲ得ズ、苟モ人爲ヲ加フトナラバ、獨リ四段活用ニノミ憚ルベキニアラズ。サレバ、本書ニハ、(已ニ、四段活用等ノ舊稱ニハ復シタレド、五十音順ニハ據ラズトシテ、)其順序ヲ改メテ、終止言ヲ第一ニ置キ、而シテ、後ノ形狀言、助動詞、等ノ圖ヲモ、皆、之ニ倣ハシメタリ。且、又、三樣ノ[掛リ、結び]ヲ說カムニモ、其活用ノ、第三、第四、第五段ニアラムヨリハ、第一、第二、第三段ニアラム方、太ダ體裁好キヤウナレバ、今ハ、連體言、已然言トイフモノヲ、第二段、第三段ニ上ゲテ、終止言ニ次ガシメ、而シテ、第一段、第二段ニアリシ將然言、連用言トイフモノヲ、ソノマヽ、下ニ下ゲタリ。又、希求言ハ、活用ノ體ノ異ナルモノモアルガ上ニ、奈行變格(死ね)ノ如キ、甚ダ迷ヒ易キモノモアレバ、今ハ、下ニ、一段ヲ加ヘテ載セタリ。而シテ、第四、五、六段ノ順序ニハ、理由ナシ、唯、上ヨリ、其

語尾ヲ讀下諳誦セムニ、口調語路ノ好カラムニ從ヘリ。

一一四節

○又、從來、五段ノ名稱ヲ、直ニ、將然言、連用言、終止言、連體言、已然言、ト呼ベリ。是等ノ事、惡シトニハアラネド、尙、論ズベキヿアリ、先ヅ、其本語ニ、用言トイフ名ヲ付シテ、其活用ニ、又、將然言、連用言、ナド、言ノ字ヲ付スルハ、言中ニ言アルヿトナリテ、甚ダ初學ノ迷ヒヲ惹キ易シ、本書ニ用ヰタル法ノ字トテモ、適當ナリトハ言ヒ難ケレド、(態ノ字、當ラムトイフヿハ、前ノ第九六節ニ云ヘリ、)尙、迷ヒヲ避クルニ足ラム。又、文ノ「掛り、結び」ノ如キモ、常ニ「ぞ、の、や、」ノ「掛り」ハ、連體言ニテ結ビ、「こそ」ノ「掛り」ハ、已然言ニテ結ブ、ナドイフモ、不都合ナリ、既ニ「連體」トハ、他ノ體言ニ連ル語ナリト釋キテ、又「ぞ、の、や、」ノ「掛り」ヲ結ブ(終止ス)トイヒ、「已然」ハ、過キ了レル意ヲイフト釋キテ、又「こそ」ノ「掛り」ヲハ、現在ノ意ニテ結ブヿトモナリテ、齟齬ス。又、第二段ハ、連用言トモナリ、假體言トモナルニ、連用言トノミ定稱スルトキハ、差支ヘアルベシ。又、舊圖ニハ、各段ノ欄內ニ、助動詞、且爾乎波等ヲ、一一、挿入シタレド、用言ノ活用ノミ說カム場合ニハ、甚ダ錯雜ヲ起スヲ覺ユ、サルハ、將然言ノ下ニ「ゆかず」ナドアリテハ、唯「ゆく」トイフヲ現在ニ打消ス意ノモノナレバ、將然トイフ命名ニ違ヒ、終止言ノ下ニ「ゆく、べし」ナドアリテハ、助動詞ニモ連ル所アリテ、「終止ス」トイフ意ニ合ハズ、連體言ハ、體言ニ連ルトイヒテ、又「ゆく、なり」ナドアリテハ、助動詞ニモ連ル意トナリテ、初學ヲシテ甚ダ惑ハシム。

右ノ如クナレバ、本書ノ動詞表ノ各段ニハ、一切、意義アル名稱ヲ付セズ、段ノ名稱トシテハ、單ニ、第一活用、第二、三、四、五、六活用ト稱呼セシムルヿトセリ。而メ、「ぞ、なむ、や、か」ノ「掛り」ハ、第二活用ニテ結ビ、「こそ」ノ「掛り」ハ、第三活用ニテ結ブトヤウニ稱ヘシメムトス。又、各活用ト助動詞等トノ連續ノ則ニ至リテハ、後ニ、別表ニ揭ゲテ、唯、某(ソレ)ノ助動詞ハ、動詞ノ第幾活用ニ連續ス、トノミ說キテ此ノ場合ニハ、絕エテ動詞ノ活用ノ意義ヲ言ハズ。而シテ、終止法、連體法、ノ如キ意義アル稱呼ハ、段ノ稱呼ノ外(欄外)ニ立テヽ、其段ヲ、直チニ何何法ナリトハ言ハズシテ、終止法ニハ、第一活用ヲ用ヰ、或ハ、中止法ニハ、第五活用ヲ用ヰ、連用法ニモ、第五活用ヲ用ヰル、ナド稱ヘシメムトス。

一一五節

(本、一五六)從來ノ形狀言活用圖ニハ「善く」ト「惡しく」トヲ、各、二段ニ重出セシメ

テ、將然言ト、連用言ト、ヲ別テリ、然レモ「善けれども、善けれど、」「善くあれども、善くあれど、」モ「善くとも、善くありとも、」善くあらむ、」ノ略ナルベシ、サラバ、將然、連用、一ツニ落チム、故ニ、此ニハ、一段ニ併セタリ。

○國語ノ形容詞ハ、洋文法ノ譯語ニイフ形容詞ト、意義ハ相似タレド、語體、用法、甚ダ異ナリ、尙、後ノ第一三二節、以下、三節ニ委シクイフベシ。

一一六節　○形容詞ニハ、自動、他動、ノ性、固ヨリナシ。又、過去、未來、ノ時ヲモ形作ラズ、「善かりき、」「善くありき、」「惡しからむ、」「惡しくあらむ、」ナドニ就キテ、時ヲ說ク者モアレド、ソハ、「あり、」トイフ動詞ニ就キテノ過去、未來、ニテ、形容詞ニハ關セズ。

一一七節　(本、一六〇)俊基集ニ「家苞に、さのみな折りそ、櫻花、山の思はむ事もやさしゝ。」永長二年、東塔、東谷歌合ニ「秋深み、夜風烈しゝ、宜しころ、四方の里人、衣打つなれ。」源平盛衰記(祇王祇女佛)ニ「祇王にも劣らず、歌の音のよさよ、いしゝ〜(美)と嘆られたり。」同、南都合戰ニ「折節風は烈しゝ、炎本は、一つなりけれども、吹迷ふ風に、多くの伽藍に吹きかけたり。」同、逆櫓ニ「友あらがひ其詮なし、平家の漏聞かむもをこがましゝ。」同、(長門本)三位入道入寺ニ「競は、渡邊黨の其一、王城第一の美男なり、右大將(宗盛)の裏築地の中より、朝夕出入する、はしゝ〜と思はれける間、(中略)大將、よき和殿をはしと思ひ、命と共に、と聞きし南鐐丸(馬名)をも和殿に取らせたり。」末ナルハ「はし」トノミアリ)ナドハ、假名遣ヒノ、既ニ亂レタル頃ノ歌文ノ瑕瑾ナレハ、採ルベキニアラズ。謠曲、唐船、「それも、戀しく、又、これも、いとはしゝ。」ナド、固ヨリ論ズルニ足ラズ。羽衣ニ「一樓の明月に、雨、始めて晴れり、」ナドアル程ナレバ)此ノ「しゝ」ヲ妨ゲナシナドイフ論者ニテモ、「れどろれどろしゝ、」同ジゝ、「甚ジゝ、」トハ言ハルマジ。

然レモ、元來「志志幾活用」ノ語根ハ「惡し、怪し、」ニテ、更ニ之ニ「し、き、けれ、く、」ノ語尾アルヿ、志幾活用ト同ジカリケムカトモ思ハルゝハ、「勞々、骨々、美々、爵陶、」ヲ語根トシテ、「らら〜し、こちこち〜し、びびし、うつたうし、」ナド用ヰテ、志々幾活用トシ、口語ニ「うれしい、」かなしい、」ナド、終止法ニ用ヰル「い」モ、(韻ヲ引キタルモノカ、トモ思ハルレド、)「しゝ」ノ音便ナルカトモ疑ハル。扨「しゝ」ト言ハムハ、語路惡シケレバ「し」トノミ略シ馴レタルモノカ。然レモ、動詞ニ「申しゝ、」

押しゝ」ナド常ニ用ヰテ、語路惡シキニモアラズ。サレバ、理論ハ、トモカクモアレ、正シキ古書ニ、用例更ニ無キ上ハ、「しゝ」ハ、法トスベキニアラズ。

一一八節（本、一六一）「すこし」（少）トイフ語、副詞ニ用ヰラルヽハ、論ナケレド、形容詞ニモアルガ如シ、新撰字鏡ニ「個、小貌、須古志」、支奈留」トアリ、榮華物語ノ　村上帝ノ沓冠ノ御詠「あふさかも、はてはゆきゝの、せきもねず、たづねてとひこ、きなむかへさに」ノ毎句ノ上下ニ「あはせたきもの、すこし」（合薫物少）トセサセ給ヒシ「すこし」モ、「すこし、れこせよ」ナドノ御心ニテ、副詞ト見マヰラセムハ、論ナケレド、或ハ、「すくなし」、「ぞばし」（乏）ナドノ御心ニテ、終止法ニ用ヰ給ヒシナラムカ、盛衰記、重衡關東下向ノ條ニ「春も、既に晩れなむとす、遠山の花の色、殘の雪かと疑はれ、越路に歸る雁金、雲居になのる音すこし、さらぬだに、ならふに霞む春の空、落る涙にかきくれて、行くさきも見ゑざりけり。」又、風雅集、雜中、前大納言爲兼、題知らず「大井川、はるかに見ゆる、橋の上に、行く人すこし、雨の夕暮。」ナドアルハ、終止法ニ用ヰタリト思ハル。（すごし（凄）ニハアラザルベシ）又、「すこしく」ノ活用ハ、古クハ、用例ヲ見ザレド、近世ノ文ニハ、普通ナリ、サレド、「すこしけれ」トハ、用ヰルベクモアラズ。

一一九節　○副詞ノ「けだし」（蓋）ヲ、萬葉集、十八ニ「琴取れむ、歎きさきだつ、葢毛、琴の下樋に、妻やこもれる。」ナド用ヰ、常ニ「もし」（若）ヲ「もしくは」ナド用ヰルハ、「やうやう」（漸）ヲ「夜やうやく明けゆくに」（土佐日記）ナド用ヰル類ニテ、共ニ、副詞ナルカ、又、近頃ノ漢籍讀ノ訓點ニ「玄か」（然）ヲ「君子哉若人」（論語、公冶長）ナド用ヰタルニ至リテハ、論ズルニ足ラズ。

一二〇節（本、一六三）第一活用ノ、名詞トナルヿモアリ、「母なしに汝生りけめや」（推古紀）「來る人なしの、宿の庭」（新古今、十六）御身も、いたくのかひなしにては無けれど、さはどの大事にあふべき器にはならず。」（著聞集、十五）よし、あしを定む、「骨なし」、「鮓」（酸）「芥」（辛）「賴母子」ナドナリ。人名ニハ、殊ニ多シ。「齊正」ノ類、

一二一節（本、一六五）此ノ連體法トイフモノ、正ニ洋文典ノ譯語ノ形容詞トイフモノニ當ル、其原語ナルAdjectiveハ「添フルモノ」（名詞ニ）ノ義ナレバ、連體ノ命名ト、正ニ相合ヘリ、形容詞ト譯スルハ、義譯ナリ、（Attributiveヲ譯シタルニハアラジ）古キ譯語ニ「依賴名字」、又ハ「附屬名言」ナドヽシタルアルハ、直譯ナリ。

又、副詞トイフモノヽ洋語 Adverb ハ「動詞ニ添フルモノ」ノ義ナレバ、直譯、副動詞ノ略ナリ。(古譯語ニハ「添字」ナドヽアリ) サレバ Adjective ハ、副名詞ト譯スベク、此ニイフ連體法モ、副名法トセバ可ナラムカ、然レドモ、今ハ舊稱ニ從フ、名詞、一名、體言ナレバ、其意ハ同ジ。(或人ハ「連名」ト名ヅケタレド、連署ノ如ク思ハレテ、妙ナラズ)

動詞ノ連體法モ、名詞ニ連ル法ナレバ、此ニイフ連體法ニ同ジ「現在分詞」ニテ、即チ、動詞ノ Adjective トナルモノナリ。

一二二節　(本、一六七)從來、此ノ中止法ヲ、次ノ副詞法ト共ニ、連用言ト稱シテ、相別タズ、然レドモ、次ナル副詞法ハ、全ク副詞ニ變ジテ、他ノ動詞、形容詞、副詞、等ニ副フ語トナレドモ、此ノ中止法ハ、獨立ニ意義ヲ言ヒテ、文ノ末ヲ結バヌマデノモノナリ、混ズベキニアラズ。

一二三節　(本、一六九)此ノ副詞法ハ、從來、連用言ト稱シテ、動詞ノ連用法(連用言)ト、一樣ノモノトセリ。然レドモ、此ノ法ナルハ、「善く、百般の事情に通ず。」全く、積年の弊習を改む。」ナド、其意、他語ヲ隔テヽモ、「通ず」「改む」ニ連リテ、動詞ノ「讀み果つ」「落ち入る」ノ如ク、密着シテ熟語トナルト異ナリ、サレバ、今ハ、副詞法ト改稱セリ、全ク變ジテ副詞トナレバナリ。

一二四節　(本、一七〇)「善かり」「惡しかり」ノ用法ヲ、形容詞中ノ一種ノ活用ノモノトシテ說キタル文典多シ、其說ケル所「あり」ノ活用ヲ複說スルニ過ギズ、贅ナリトイフベシ、「あり」ハ、動詞ナレバ、命令法、過去、未來、等ヲ形作ル、形容詞ニハアラザルナリ。

一二五節　(本、一七一)古今、十四ノ歌ハ、「梓弓、(枕・ひき野の葛、(ノ如ク)末終に、我が思ふ人に、言の繁けむ。」ニテ「思フ人ニ名ガ立ツテ、人ノ噂ガ繁クナルデアラウ」ナリ。萬葉、十一ノ歌ノ「ひさしけまく」ノ「けまく」ハ「けむ」ノ延ビタルナリ。同、十九ノ歌ハ、命婦ガ、天皇ニ奉レル歌ニテ「天雲を、はろにふみあたし、鳴神も、今日爾益而、可之古家米也母。」トアリ、大御前ニ侍ル時、雷鳴アリシヲ詠メルモノカ、「はろにふみあたし」ハ「散々ニ踏ミトヾロカシ」ノ意トイフ「迅雷、固ヨリ恐シケレド、今日、殊ニ大御前ニ召サレタル恐サニマサリテ、恐シカラムヤハ、恐シカラズ、」ノ意ナリ。右二首ハ「けむ」ノ「けまく」トモ「けめ」トモナル例ニ引ケルナリ。「春

の日の、心愛(ココロカナ)しきに、れくれ居て、君に戀ひつゝ、顯(ウツ)しけめやも。」(萬葉、十五)ナドモアリ。

一二六節　(本、一七二)萬葉、十四ノ歌ハ、「氣(キ)ガネヲスルナ、眼前ダケ善クアラバ」ナリ。雄略紀ノ歌ハ、木工猪名部(ヰナベノマヒト)眞根ガ刑セラレムトスルキ、同伴ノ詠メル歌ナリ、「可惜(アタラ)しき、猪名部のたくみ、かけし墨繩、玄ガ無けむ、誰かかけむよ、可惜墨繩。」トアリ、「玄」ハ「そ」ニテ眞根ヲサス、墨ヲ打ッヲ「かく」トイフ。

一二七節　(本、一七四)從來ノ語學書ニハ、形狀言ノ「深み、茂み、」惡(ニク)げ、」嬉しげ、」善さ、」惡しさ、」(體言トナルモノ)ナドノ「み」「げ」「さ」ヲ、活用トシテ說ケルガ多シ、サレド、是等ハ、一種ノ接尾語ヲ、語根ニ添ヘテ、體言トスルモノニテ、活用ニハアラズ。殊ニ、「げ」「さ」ノ如キハ、形狀言ニハ限ラズ、他ノ種々ノ語ニモ、「人げ」外(ヨソ)げ」あはれげ」事ありげ」物思はずげ」逢ふさ、離(キ)るさ」行くさ、來(ク)さ」ナド添フコトモアルナリ、是等ヲモ活用ナリトハ言ハルマシ。尙「み」「げ」「さ」ノ事、本書ノ第四六二節、以下四節、及ビ、第四八〇、第五二七節ニ論ズベシ。

一二八節　○又、「月、清み、」山、高み、」苦をあらみ、」瀨をはやみ、」ナドイフ「み」モアリ、又、「泣きみ、笑ひみ、」見(ミ)ゐみ、見(ミ)ずみ、」ナドノ「み」モアリ、共ニ本書ノ第四八〇、第四八一節ニ說クヲ見ヨ。

一二九節　(本、一七五)拾遺、十三ノ歌ノ「ひとりかもねむ」ハ、「獨リ寐ムカ、マア、寐ラレズ、」ノ意ナリ。古今、十九ノ歌ハ、「富士の嶺(ネ)の、ならぬれもひ(火)に、燃(モ)ゐ心燃ゐ、(ヨ)神だに、けたぬ、むなし烟を。」ニテ、「成ラヌ苦慮ニ、胸ガ燃エルガ、モエルナラバモエヨ、富士ノ嶺ノ神デサヘ、其山ノ煙ヲ消サナイデ、常ニ燃エテ井ルモノヲ、マシテ人間ハセウコトガナイ。」ノ意ナリ。

一三〇節　○本書ニ說ケル外ニ、格外ナルモノアリ、「無し、」嚴重(イカ)し、」ハ、「志幾活用」ナルニ、「神無月(カミナヅキ)」正(マサ)無事」モアリ、「友無し千鳥」根無し事」モアリ、皇極紀、「重日、此云伊柯之比(イカシヒ)」又、「嚴(イカ)し鋒、」嚴物造(イカモノヅクリ)」ナドモアリ、又、「空(ムナ)し、」可惜(アタラ)し、」ハ、「志々幾活用」ナルニ、「空手(ムナデ)、空車(ムナグルマ)、」あたら事、」モアリ、「空(ムナ)し車、空し舟、」空し烟、」モアリ。(俗ニ、「涼し」ヲ、「涼風(スヾカゼ)」ト用井ル、)前ノ第七八節ニモ言ヘル如ク、志々幾活用ノ「空し、」可惜し、」ナドノ末ノ「し」マデ加ヘテ、語根トスルヿニテ、論アルヿニテ、前項ノ「空車、空し車、可惜事、」ナド、即チ、其論ノ起ル所ナリ、然レドモ、概シテ云ヘバ、「し」ヲモ加ヘテ語根ト見ル方、先ヅハ理解

ニ早キナリ。

一三一節　(本、一七六、一七七)源順集ノ「いとひを」ハ、絲氷魚ナルベキカ。千載集ノ歌ハ、返事セヌ人ニ送リタルナリ、「うるま」ハ、蠻國ノ名ナリ、詳ナラズ。「鼻高」ハ、屐ノ名ナリ、「苛高(イラダカ)」ハ數珠ノ玉ノ扁ク稜(カド)アルモノナリ、「髮長」ハ、神宮ノ、忌詞(イミコトバ)ニテ、僧ヲイフ。

一三二節　○英語ノAdjectiveハ、大抵、名詞ニ冠ラセテ、其形狀性質等ヲイフ。我ガ形容詞モ、名詞ノ形狀性質等ヲイフハ、相同ジケレドモ、語ノ成立ニ至リテハ、甚ダ相異ナリテ、語尾ニ、變化アリ、法アルヿ、動詞ノ如クニシテ、且、名詞ノ後ニ居テ、文ノ末ヲモ結ベリ。(羅甸、佛、獨、等ノ形容詞ニハ、變化アリ、且、或ハ、名詞ノ後ニ用ヰルモアリ、然レドモ、共ニ、文ノ末ヲ結ブコトハ、無キガ如シ。)サレバ、我ガ形容詞ハ、Attributive verbトイフベク、直ニ「形容動詞」ト命名セバ、Adjectiveノ譯語ノ形容詞ト混ゼズシテ可ナラム、トモ考フルナリ。

我ガ形容詞ノ特性ハ、右ノ如シ、然ルニ、世ノ洋文法ヲ以テ、我ガ文法ヲ論ズルモノ、彼ノ語法ノ先入シテ主トナレルガ故ニ、之ヲ肯ハズシテ、徒ニ「高き、深き」ハ、Adjectiveナリ、「高く、深く」ハ副詞ナリ、「高し、深し」ノ「し」ハ、一箇ノ助動詞ノ如キモノナリ、ナドイヒテ、各自、別語ナリト誤認シ、一語ノ語尾ノ變化ナルヿヲ曉ラザルモノ多シ。サレド「高き、深き」ヲ獨立ニ用ヰ、名詞ニ冠シテ、「高き山、深き海」ナドイフ時ニコソ、Adjectiveトモ言ハルレ、「山ぞ高き、海ぞ深き」或ハ、「山こそ高けれ、海こそ深けれ」ナド、文ヲ結ブヲバ如何ニカスル。又、「高く、深く」ヲ獨立ニ用ヰテ、「高く昇る、深く思ふ」ナドイフ時ニコソ、副詞トモイハルレ、若シ、「山高く、(中止法)海、深し」ト言フヰハ、何トカスベキ、「高く」トイフ副詞ニテ、「深し」ノ意ヲ修飾(ヲサメカザリ)ス、トイフベキカ、「高く深し」トイヒテ、何ノ意ヲカ成スベキ。凡ソ、我ガ形容詞ニハ、斯ル一種ノ特性アルモノナレバ、別ニ、本文ノ如キ規定アルナリ、尙、本文ニ說ケル所ヲ玩味スベシ。

一三三節　○國語ニテ、生得ノAdjectiveヲ求メバ、「新(ニヒ)」、「初(ウブ)」、「眞(マ)」、「御(ミ)」ナドイフ一類ノ語ナラム。サレド、是等ノ語ハ、何レノ名詞ニモ冠セシムベキニアラズ、其慣用ニ局レル所アリ、且、獨立ニハ用ヰズ、必ズ、熟語トナリテ文中ニ出ヅ、故ニ、今ハ、コレヲ接頭語トシタリ。

一三四節　○又洋語ノ Adjective ニイフ階級(Degree)ハ、其語體ヲ變シテ成ルモノナレド、我ガ形容詞ニハ、此ノ事無シ、コレヲ譯セムニハ、「是より善し」、「最も善し」ナドヽモスベケレド、ソノ「より」「最も」ハ、別語ヲ用ヰルナレバ、形容詞中ノ一則トシテ說クベキモノナラズ。

一三五節　(本、一七八)「なり」、「たり」、「せり」、「ごとし」ナドハ、一個ノ動詞ノ如キ意義アレド、獨立シテ、一文ノ冒頭ヨリ用ヰラレズ、常ニ、必ズ、他語ノ下ニノミ付キテ、文中ニ出ヅレバ、尙、助動詞ナリ。

一三六節　○助動詞ハ、大抵、事物ノ狀態ヲイフ語ナレバ、自動、他動、ノ性ナキガ多シ。但シ、「行かす」、「受けさす」、「立たむ」ナドハ、他ヲ役スル動作ノ性アリ、「行かる」(得行)、「受けらる」(得受之)ナドハ、自ラ爲シ得ル動作ノ性アリ。又、「殿造せり」、「衣笠にせり」ナドハ、全ク、他動ニテ、「時雨せり」、「紅葉せり」ナドハ、自動ノ意トモナル。

一三七節　○國語ニハ、開口ニ、濁音、良行ノ音、ナキヲ則トスルニ、助動詞ニハ、「す」、「べし」、「ごとし」、「らる」、「らし」ナドアリ、是レ、他語ノ下ニ付クベキモノナル證ナリ。

一三八節　○「行き交ふ」、「爲難ぬ」、「言ひ過す」、「讀み止す」、「馴れ初む」ナドノ「交ふ」、「難ぬ」、「過す」、「止す」、「初む」ナドハ、獨立ニ用ヰタルヲ見ザレバ、助動詞ノ如クニモ思ハルレド、其意義、全キ動作ヲ言ヘバ、動詞ナルベシ。

一三九節　(本、一八一)所相ノ標準ヲ定メタルハ、新案ナリ、當レリヤ、此ノ所相ノ標準ハ、尋常、動詞ニ要スル標準トハ、異ナリ、「賊に、家に入らる」ノ如シ、上ナルハ、所相ノ標準ナリ、下ナルハ尋常ノモノナリ、漢文ニ「爲人所殺」ナドアル「爲人」、是レナリ、「爲」ノ字此ノ如ク用ヰラルヽトキハ、去聲(于僞切)ニテ、此ノ場合ノ意義ハ、增韻ニ、「所以也、緣也、被也」ナドアル、當レリ、即チ、「爲人所殺」ト讀ムベキナリ。因ニ云、コレヲ、常ニ、「爲人所殺」ト讀メド、コレハ、韻會ニ、「助也」增韻ニ、「護也、與也」ナドアル方ノ意義ニテ、「爲君致忠」ナドイフ場合ニ讀ムヿ多キニ連レテ讀ムニテ、非ナリ、「殺さるゝ」ニ、助也、護也、ノ意ヲ用ヰテ、「爲人所殺」トイヒテハ、「他人ヲ助ケムガ爲ニ、己ガ命ヲ捨テヽ殺サルヽ」ヿトナル、サレバ、之ヲ避ケムトシテ、「爲人所殺」トモ讀メド、漢文ニテ、「爲」ノ字ノ、「成す、成る」ノ意義ナルトキハ、平聲(于嬌切)トナレバ、法ニ合ハヌハ論ナシ。(國語ノ上ニ付キテモ、此ノ旁訓、義ヲ成サズ、)

一四〇節　又、漢文ニ「所殺者白帝子所殺者赤帝子」ナドアル「所殺」ハ、所相(殺さる)ニモ、能相(殺すところ)ニモ讀マレ、又、子ヨリ繼母ニ對シテ「恩如所生」ナドイフトキハ「生ミツケラレタル」ノ意ニテ、所相ナレドモ、繼母ヨリ子ニ對シテ「愛之如所生」ナドイフトキハ「生メル所」ノ意ニテ、能相ナリ、甚ダ紛ハシ、注意スベキナリ。

一四一節　○國語ニテハ、他動詞ハ、論ズルニ及ハズ、自動詞モ、所相ヲ成ス。例ヘバ「眠ラザラシメムト他ヲ制シテ、遂ニ他ニ眠ラレ」「小兒ヲ泣カシメジトシテ、遂ニ泣カル」ナド、是レナリ。「夫ニ行カレ」「子ニ死ナレ」「敵ニ逃ゲラル」ナド、皆、然リ。是等ハ、其動作ヲ直接ニ受クルニハアラデ、間接ニ影響セラルヽナレド、尙、所相ナリ。洋語ノ自動詞ニハ、斯ル所相ナキガ如シ、(I am separated by him. I am departed by him. ナド言フベシ、ナドイフ人アレド、無理ナリ。)

一四二節　(本、一八二)「忘る」ヲ、四段ニ活用シタルモノ、日本紀、萬葉集等ニ見ユ、四段活用ナラバ「わすら、る」ニテ善ケレド、今ハ、專ラ、下二段活用トナリタレバ、本文ノ如クイヘルナリ。「五月やみ、こゝゐの森の郭公、人ゑれずのみ、鳴きゐたるかな。」(後拾遺、雜、三)我ゑかり、物はなげかじ、愛き人に、わすらるゝ身も、わすれましかゑ。」(新千載、戀五)さりともと、思ふ心に、ひかされて、今まで世にも、ふる吾が身哉。」(後拾遺、戀一)

一四三節　(本、一八七)古今集、雜、下ニ「ゑかりとて、そむかれ(勢相)なくに、事しあれば、まづなげかれ(勢相)一轉ノモノ)ぬ、あなう世の中。」那珂通世氏云「昔懷ゑる」「然思はる」ノ類ハ、可成ノ意、稍、輕クシテ、唯、其ノ動作ノ、自ラ起リテ、過ムベカラザルガ如キ意味ナリ。」那珂氏ハ、勢相ノ字ヲ「Voices,」ノ總名トシタリ、此書ニテハ、「Potential voice.」ニ當テタリ。

一四四節　(本、一八八)萬葉、十五ノ「寢」ハ「寐ル」ナリ、「寐ルヿノ寐ラレヌ」ナリ。同、七ノ歌ノ「土針」ハ、草ノ名ナリ、和名抄ニ「王孫、一名、黃孫、都知波利」トアリ、汁ヲ染料トシテ、衣ニ摺ルモノカ「ゆ」ハ「より」ニ同ジ「我ガ所有ナレバ、心カラ思ハヌ他人ノ衣ニ、色ヲ移サルナ」ナリ。「ゑ」ハ「泣クヿ」ナリ、「泣ノミシ泣カル」ナリ。「れもはゆる」ハ「思ハル、」ナリ。

○所相ヲ、古クハ「ゑ、ゆ」ト、ノミ用ヰタリトイフニハアラズ、萬葉集ニ「れ、る」ノ用例モ、往々見ユレバ、二樣アリシナリ。

一四五節（本、一九一、一九二）使役ヲ形作レバ、自動モ、他動ノ如ク變シ、他動ハ、別ニ、使役ノ標準ヲ要ス、ト制定シタルハ、此書ノ新案ナリ、尙、前ノ第一三九節ノ第一項ヲ參見スベシ。

一四六節（本、一九三）萬葉、五ノ歌ハ、二首聯作ノ反歌ニテ、幼兒ノ死ヲ悼ミテ詠メル歌ナリ、初ナルハ、「幼少ナレバ、道ヲ行クコヲ知ルマシ、冥官（シタベ）ノ使ヨ、贈遣（ヤヒナビ）ハスベケレバ、脊ニ負ヒテ、道ヲ通ラセヨ、」ナリ。（此ノ「とはらせ」或ハ、佐行四段ノ敬語ノ命令法カ、）次ナルハ、「佛ヨ、布施ヲ呈シテ、我ハ乞ヒ願フ（のむ）ナリ、佛ノ敎ノ如ク、相違ナク、我兒ヲ、直チニ率ヰユキテ、佛ノ天上界（テンジヤウカイ）ヲ知ラシメヨ、」ナリ。（此ノ「しめ」モ、敬語ノ命令カ、）

一四七節（本、一九六）上一段活用ノ動詞モ、スベテ、其第四活用ヨリ、使役ノ「さす」ニ連ルコト、例ノ如シ。扨、其活用中ノ「着る、似る、見る」ニハ、相對シテ「着す、似す、見す」アリ、此三語、下二段活用ナル生得（シヤウトク）ノ他動詞ナルガ如ク、固ヨリ「着、似、見」ヨリ、直ニ、使役ノ「す」ニ接シタルニハアラズ、「煎す、居（ヰ）す、」ナド無キニテ知ルベシ。活語雜話（初篇）ノ說、從フベキガ如シ。サルニ、或人ハ、此ノ三語ニ限リテ「着さす、似さす、見さす」（但シ、此ノ用法、多クハ、敬語ニ用ヰル、使役トシタルハ、稀ナリ。）ノ約マリテ成レルモノニテ、生得ノ他動詞ナラズト云。サレド、榮華物語ノ御裳着（ギ）ニ、「あやしき女ども、黑かいねり着せて、白粉（ハフニ）といふもの、塗りつけて、かつらせさせて傘、ささせて、足駄、はかせたり、」トアル文中ノ「着せて」ハ、他ノ使役ノ語ト幷列シタレバ、誠ニ「着させて」ノ約トモ見ルベシ。然レドモ、同書、鳥邊野ニ、「殿、今は、醫（クスシ）に見せさせ給ふべきなり、いとれそろしき事なりと、たび〳〵聞こえさせ給へど、醫（クスシ）に見すゞかりにては、生きてかひあるべきにあらずと、心強く宣はせて、見せさせ給はず。」源氏物語、若紫ニ、「物ども、取りにつかはして、見せ奉り、」ナドハ、「見させ」ニハアラデ、「示す」トイフ程ノ意ナラム、（同書、東屋ニハ、「たゞ、眞心に、ねばしかへりみさせ給はゞ、同、浮舟ニ、「かの人の御けはひに似せてなむ、もてまぎらしける、まづあけよと宣ふ聲、いとようまねび似せ給ひて、」若紫ニハ、「人に似させ給はぬを、」ナド、スベテ、生得ノ他動詞ト見ルベキガ如シ。元來、「歌よませさせ給ひ、琴（キン）彈かせさせ給ひ、」ナド、使役ヲ重用スルハ、（下ナルハ、敬語ニテ、）四段活用ニ限ルガ如シ。下二段活用等ニテハ、「失せさせ給ひ、」御几帳（ミキチヤウ）、

引寄せさせ給ひ、心に之任せさせ給ふまじく、ナド單用スルノミニテ、失せさせ、任せさせ、ナド重用セヌガ如シ。サレバ「着せ、させ、見せ、させ、」等ノ「着せ見せ」モ、「着させ見させ」ノ約ニハアラザルベシ、然ラザレバ「着させ見させ」ト重ナルコトナル。又「乘る、乘す、寄る、寄す、」ナドモ、「似る似す、」見る、見す、」ト同趣ナリト思ハル「乘す、寄す、」ヲ生得ノ下二段他動詞ト見レバ、「似す、見す、」モ同ジト見ルベキナリ、サラバ「見せ玄む」ナド用キルモ、甲ヲシテ、乙ヲ使役セシムル意ナラバ、妨ゲナシトイフベキガ如シ。

一四八節　(本、一九七)使役相ト、所相ト、互ニ上下ニ相疊用セラルヽヿ、本書ノ如ク說キテ足レリ、世ノ文典ニ、殊更ニ、表ナドニ作リテ示スモノアレド、煩ハシ。

○勢相ノ「る、らる、」ハ從來ノ語學書ニ、解說シタルモノ、絶エテナシ、今、別ニ、コレヲ取立テタルハ、此書ノ新案ナリ。近版ノ文典、漸クコレヲ說クヤウナリタレモ、尙、所相ノ附屬物ノヤウニ思ヘリ。然レモ、本文ニモ言ヘルガ如ク、所相ニハ、一種特別ナル標準ノ語ヲ要スルニ、勢相ハ、然ラズ、意義モ、用法モ、全ク別ナルモノナリ。

○使役相ノ「玄む」モ、從來、一ノ動詞ノ如ク見ラレテ「す、さす、」ノ列ニハ見忘レラレタリ、コレヲ助動詞ト定メテ加ヘタルモ、新案ナリ。

一四九節　○凡ソ、此ニ說ケル所相、勢相、使役相ハ、從來ノ語學書ニハ、動詞ノ語尾ノ活用ノ如ク見ラレテ、且、「然(シカ)る詞、然する詞、然せらるヽ詞、然せさする詞、然せさせらるヽ詞」ナド「自、他、能、所、」「本、支、」「主、從、」ヲ、平等ニ比肩セシメテ、類別、紛々糾々タリ。(自動詞ニモ、他動詞ニモ、各自ニ、能相、所相、使役相ヲ具シテ、類別、判然タルヲ、自動ノ能相ニ、他動ノ所相ヲ對セシムルナド、ワイダメナシ)今、コレヲ、動詞ヨリ切リ放シ、別ニ助動詞ト立テヽ、第七表ノ如ク、分屬次序シタルモ、新案ナリ、斯ク切リ放シテ、別ニ說ク方、動詞自己ノ語尾活用ト混亂セズシテ、文法授受ノ間ニ、甚ダ簡明ナルヲ覺ユ、世ノ語學家、如何トナス。(動詞、助動詞、各、活用アリテ、法ヲ成シ、時ヲ成ス、之ヲ混淆スルノ不條理ナルヿ、後ノ第一八九節以下ニ辨ズベシ。)

一五〇節　○世ノ文典ニ、所相ノ「らる、」使役相ノ「さす、」ノ列ニ「せ、らる」せ、さす」ヲ擧ゲタルアリ、此ノ「せ」ハ、佐行變格ノ「す」(爲)トイフ獨立動詞ノ第四活用ナリ、コレヲシモ擧

グベクハ「得らる」「歴らる」「得さす」「歴さす」ヲモ擧ゲズハアルベカラジ、要ラヌナリ。

一五一節　(本、一九九)「喜ぶる」考へらる」ナドノ方ハ、所相ニテ、貴人ハ、何事ニモ、自ラ手ヲ下サズ、侍者ニセラルヽヨリ起レリトイフ説モアリ、己レモ、初ハ、其説ニ從ヒシカド、非ナリキ、勢相ノ方ナリ。(所相ニ要スベキ「何に」ノ標準語ヲ要セザル場合モアレバ、)

一五二節　(本、二〇〇)佐行四段ニ活用シテ、天然ニ敬意アル語ヲ、特ニ取リ出デヽ、事々シク、文典ニ説クモノアルハ、何ノ心ナルニカ、敬意アル動詞ナリトテ、特ニ甄別セムニハ、敬意アル名詞ヲモ、甄別セズハアルベカラジ、毎語ノ天然ノ意義ハ、辭書ニ據リテ、個々ニ知ルベキノミ、文法ハ其勞ヲ取リガタシ。「さかす」「たゝす」ナドハ、敬語トナリテモ、「聞く」「立つ」ノ意義コレニ伴フ「られ」「させ」「ぬ」ナドハ、敬語ニ變ズレバ、勢相、使役相、ノ意義ヲ失フ、同一ニ見ルベキニアラズ。

一五三節　(本、二〇二)「なり」ハ、獨立ノ動詞ノ力ヲ成セドモ、文ノ冒頭ヨリ用ヰラレネバ、尚、助動詞タルベキヿハ、前ニモ論ジ置ケリ。

一五四節　○又、「靜なり」「明なり」「詳なり」ナドイフ「なり」アリ、コレモ「靜に」「明に」「詳に」ナドイフ副詞ノ末ナル「に」ニ、動詞ノ「あり」ノ約マリテ「なり」トナレルモノナレド。(本書、第二六九節、參見)此ノ條ノ「なり」ト、少シ異ナリ、副詞ノ方ナルハ、尋常ノ「あり」ト同ジク「靜なら玄む」ナド、使役ノ助動詞ニモ連ヌベク、又「いつよりも、今宵の月は、さやかなれ、秋の夕も、たぞるゑかりに。」(仲文集)ナド、命令法ニモ用ヰラルヽニ、指定ノ「なり」ハ、然ルヿ能ハズ。因ニ云、比況ノ助動詞ノ「ごとし」ニモ、「ごとくなり」ト連ネテ用ヰルヿアリ、是レモ「ごとくにあり」ノ約ナリ。

一五五節　(本、二〇八、二〇九)萬葉、二十ノ歌ハ、他鄕ニアリテ、故鄕ノ筑波山ヲ思ヒテ詠メルナリ、末句ハ、「戀ひざらむかは」トイフニ同ジク「戀ひ思ひてあり」トイフ反語ナリ。

○「今宵の花に、なは不如家里。」(萬葉、八)知らでぞ人は、待てど不來家留。」(同、四)夢に見ゑつゝ、寐不所宿家禮。」(同、四)求め安波受家牟。」(同、十七)「す」ヲ「ぞり」トシテ解スベシ、)ナドアレド、奇僻ナレバ、表ニ擧ゲズ。

○伊勢物語ノ歌ハ、「いへゑゑに、いはねゑ胸に、さわがれて、心ひとつに、なげく

頃かな。」ニテ、思ヒヲ、言ヒモ得ラレズシテ、言ハデアレバ、胸ニ堪ヘガタク、タヾ心ノ中ニノミ歎キ居ル時ナルカナ、」ノ意ナリ。萬葉、一「ますらをと、思へる我も、草枕、旅にしあれど、思ひやる、便を知らに、網の浦の、あまをとめらが、焼く鹽の、思ひぞ焼くる、吾が下心」同、十七「うなひ川、清き瀬ごとに、鵜川たち、かゆきかくゆき、見つれども、そこも飽かにと、ふせの海に、舟浮けすゑて、沖へこぎ」ナド、「知らずに」飽かずに」ノ意ナリ。

一五六節　(本、二一〇)此ノ「ぎり」ノ、第一終止法ノ用例、希ナリ、活語雜話、三ニ、榮華物語、月宴ノ「朱雀院は、御子達(タチ)れはしまさぎり、たゞ、王女御(ワウニヨウゴ)と聞ゑける御はらに、云々」ヲ引キタレド、まさぎりけり」トシタル本モアリ。

一五七節　(本、二一二)又「今宵のみ、あひ見て後は、逢はじものかも」(萬葉、十)みだりに人を、寄せじものをや」(後撰、十五)南都本、源平盛衰記ノ文覺發心ノ條ニ「されど、一心に、菩提の道に入り、出離得脱を願はむにはしかじものをと、思切て、やがて、髻切り」、太平記ニ「人に見知られじがために、還俗して」ナドモアリ。

○此ノ「じ」ハ、從來「ず、ぬ、ね」ノ附屬トシテ説カレタリ、然レドモ、本文ノ如ク活用アレバ、別ニ、獨立セシメタリ。

一五八節　(本、二二〇、以下)古今集遠鏡ノ序ニ「んは、俗言には、すべて、皆、ゥといふ、來ん、ゆかん、をコウ、イカウ、といふ類なり、けん、なん、などのんも、同じ、「花やちりけんは、花ガチツタデアラウカ」「花やちりなんは、花ガチルデアラウカ」と譯す、さて、此チツタデといふと、ナルデといふとのかはりをもて、けんとなんと、のけぢめをさとるべし」云々トアリ。

「押さむ」(押サウ)押してむ」押しなむ」押したらむ(押シタラウ、)押しけむ」(押シタデアラウ)押してけむ」押しにけむ」押したりけむ」(押シテシマツタデアラウ、)此ノ俚解、當ルベクヤ。

一五九節　(本、二二五)本書ノ外ニ、古文ニハ「年月、歴たりぬれど、あかざりし夕顔を、つゆ忘れ給はず。」(玉葛)上(ハヘ)に引きたりつる墨さへ、消ゑたる。」(枕草紙、二ノ一、寶の子に、とも)したりつる火は、早う消ゑにけり。」(蜻蛉、下ノ中)宮より、あす、俄に御迎へにと、宣はせたりつれど、」(若紫)花薄、穂に出すべきことにもあらず、なりにたり。」(古今、序)額突ノ前ニ火ヲコシタリス、火白クカキタテタリ。」(長門本盛衰記、八牧夜討)内府ガ許ヘ、

マシマシタリツルカ、サニ候、參テ候。」(同、內大臣召兵)なか〳〵に、人とあらずを、酒壺になりにてしがも、酒に染みなむ。」(萬葉、三)去年の春、あへりし君に、戀ひにてし、櫻の花は、迎へ來らしも。」(同、八)常人の、戀ふといふよりは、餘りにて我は死ぬべくなりにたらずや。」(同、十八)庭草、むしりにて候ふと申す。」(平家、勘文)穩(オダ)しう思ひなりにて侍り。」その名は、忘れにて、言ふ人もなくなりにたり。」ナドモアルナリ。サレド斯ル用例ハ、今ノ普通文ニハ奇僻ナルベクヤ。

一六〇節　○本書ノ例ニテ見レバ「つ」ト「たり」トハ、現在ニテ止ル「ぬ」ハ、現在ヨリ未來ヘ往シ、「けり」ハ、過去ヨリ現在ヘ來ル、ナド區別スル說モイカヾ。

一六一節　○本書ニイヘル現在、過去、(三樣)未來、(四樣)ノ分類ハ、全ク、此ノ書ノ新案ニ係ル。現在ト未來トハ、固ヨリ論無カルベク、過去ノ「き」ト、大過去ノ「てき」「にき」「たりき」モ、論ナカルベシ。其他ハ、或ハ、難ズル人モアラム。「暮るゝか(現在)と、見れど明けぬる、」(半過去)生きたるか、(半過去)死ぬるか(現在)いかに、れもはへず、」田舍人の歌にては、あまれりや、(半過去)足らずや、」(現在)我が宿の、草もなびけり、(半過去)露も落ちけり。」(過去)ナド、差別ナキガ如ク見ユレド、歌ハ、五七ノ字數ニ局セラレテ、格外ナル用法モアラムカ、「日頃、思ひわび侍りつる心はげふなむ落ち居ぬる、と宣ひて、京にて生れたりし女子、こゝにして、失せにしかな、」夜、やうやく、明けゆくに、かぢ取等、黑き雲、俄に出できぬ、風、吹きぬべし、御舟(フネ)かへしてむ、といひて歸る、このあひだに、雨降りぬ、いとわびし。」植ゑし時、花見むとしも、思はぬに、咲き散る見れば、よはひ老いにけり。」古里を、出でにし後は、月影を、昔も見きと、思ひやらるゝ。」ナド、イカヾ思ハルヽモ、ナキニシモアラズ、數十百ノ用例ヲ集メテ、推考スベキナリ。然リト雖モ、文法上、動詞ノ時限トイフモノハ、緊要ナルモノニテ、古代ハ、トモアレ、科學進步ノ今日トナリテハ、精密ナル用法、規定、無クハアルベカラズ、今ノ佛蘭西、和蘭、魯西亞、ノ文法ノ如キモ、皆、學者ノ作爲制定シタルモノナリト聞ケレバ、(此ノ別記ノ序論ニ說ケリ、)文法モ、人爲ノ力ヲ借ルベキモノナラム、因テ、今、愚ヲ顧ミズ、私淑シテ、制定セシ所、本文ノ如シ、尙、世ノ學者ノ評定ヲ待ツ。

一六二節　(本、二三三、二三四)古今、二ノ歌ハ「ドレヤ、櫻ヨ、我モ汝ト同ジヤウニ、散リ失セテ(死)シマハウ、人モ、一盛リアッテ後ニ衰ヘタナラバ、世ノ人ニ、老耄ノ狀(サマ)ヲ嫌テ

見ラレル(見エ)デアラウカラ、」ナリ、同八ノ歌ハ、來客ノ夕暮ニ歸ラムトスルヲ引留メムトノ心ヲ詠メルナリ、「夕方ノ此ノ庭ノ垣根ハ、山ト見エテ欲シイ、夜ハ越エラレマイト思テ、歸ル人モ、今夜ハ、此ニ宿ヲ取ルヤウニ、」ナリ。

一六三節　○又、「道知らで、やみやは爲(シ)なぬ、逢坂の、關のあなたは、うみ(海、憂ミ)といふなり。」(後撰、十二)初二句ハ、「何トテ、道ヲ知ラズシテ、止ミテハシマハヌヅ、シマヘカシ、」トイフ反語ナリ、此ノ「な」モ、半過去ノ「ぬ」ノ第四活用ニテ、「打消」ノ「ぬ」ノ「や」ノかゝりニテ添ヒタルナリ、然レモ、奇僻ナレバ、圖ニハ省キツ。又、本書ノ此ノ前條ノ「つ」ヲ、「かくながら、散らで世をやは、つくしてぬ、花のときはも、ありと見るべく。」(後撰、三)ナド用ヰタルモ、コレト同ジ趣ナリ。

○「つ」ト「ぬ」トノ、自他所屬ノ別ニツキテ考フルニ、元來、「つ」ノ音ハ鋭ニシテ、「ぬ」ノ音ハ軟ナレバ、必シモ自他ニハ關セズシテ、唯、語意ノ、其場合ニ因リテ、緩緊アルニ從フモノカ、サレド、自動ハ自ラ緩ニシテ、他動ハ自ラ緊ナレバ、自ニ「ぬ」、他ニ「つ」、相伴フ場合、自然ニ多キナルベシ。又「たり」ハ、「つ」ノ活用ノ「て」ト、「あり」ト約マレルモノナレド、自ニモ他ニモ連ルナリ。

一六四節　(本、二三六)「せり」ハ、元來、佐行變格ノ「爲(ス)」ヨリ、良行變格ノ活用ニ轉ジタルモノニテ、次項ノ「行けり、」「押せり、」ニ同ジキモノナレバ、獨立動詞ナルガ如キモ、理ナリ、然レモ、文中ニアリテハ、他語ノ下ニ附屬シテ出デ、一文ノ冒頭ヨリ用キラルルコトナク、且、半過去ノ意ヲ成ス語ナレバ、獨立スベキ性ノモノナラズ、因テ、助動詞ニ入レタリ。

又次條ノ「行けり、」「押せり、」ノ如キ語尾活用ヲ形作ルハ、四段活用ノ動詞ニ限ル、ト規定セラレテアリ、此ノ條ノ「せり」モ、趣ハ同ジケレド、佐變活用ノモノナレバ、同一ノモノト說キ難シ、サルヲ、或ル文典ニ「爲(セ)リ」「座(オハ)セリ」「論セリ」等ヲ一樣ニ列ネテ說ケルアルハイカゞ。(オハセリ「トイフ活用アリヤ」)

一六五節　(本、二三七)此ノ用法ハ、「行きてあり、」「押してあり、」ノ約マリテ成レルモノニテ、其中間ノ「て」ハ、即チ、半過去ノ「つ」ノ活用ナレバ、半過去ノ意ヲ成スナリ。

一六六節　○言海ノ附錄、語法指南ニ、此活用ノ語尾ヲ切リ放シテ、動詞ノ活用表中ニテ、四段活用ノ第三活用ニ付シタルヲ、批難スル人アリ、己レ、固ヨリ、此活用ノ、「行きてあり」ノ約ナル程ノ事、心得ザリシニアラズ、四段ノ第三活用ヨリ活用ス

ト認メタルニモアラズ、然レドモ、斯クシタラムガ、學ブ者ノ合點ノ速カラムカ、ト思ヒテシタルナリ、(語原ハ、トモアレ、)且、四段活用ニ、此ノ旁生ノ一活用アルヿヲ、動詞ノ活用表中ニ加ヘテ置カムトスルニ、他ニ、方法モナカリシガ故ナリ。然レドモ、今ハ、批評ヲ容レテ、表ニハ削レリ。サレバ、此ノ活用ノ表ハ、同ジ四段活用ノ旁生ノ一活用、及ビ、其半過去ニテアリナガラ、別ニ、此ニ孤立シテアレバ、學ブ者、四段活用、及ビ、其半過去ヲ考究スルニ當リテ、見忘レザラムヤウニ、注意スベキナリ。

一六七節　○此ノ語ハ、二個ノ動詞ニテ成レルモノナレバ、助動詞ノ條ニテ說クベキモノナラネド、助動詞ノ「て」ヲ、中ニ含ミテ、且、半過去ノ意ヲ成スモノナレバ、類ヲ以テ、此ニ說ケルナリ。(動詞ノ四段活用ノ條下ニテ說カムコモ、叶ハズ、半過去ノ意アレバナリ、)

一六八節　○此ノ「行けり」「押せり」ナドヲ、獨立ノ一活用トシテ、他ノ動詞ノ諸活用ト、幷立セシメテ說クモノアルハ、イカヾナリ「行けり」ハ「行く」(トあり)ヨリ旁生シタル半過去ナリ、コレヲ「行く」ノ活用ト比肩セシムルハ、平宣長ト本居春庵トヲ、列傳ニ幷べ立ツルガ如シト思ハル。

一六九節　○土佐日記ノ「何とも思へらず」ノ句ハ、夜航ノ船中ノ婦女ノ、心細ク思フニ對シテ、イヘルナリ。「鳥の跡」ハ、文字ナリ「とゞまれらむ」ハ「トヾマッテアッタナラバ」ナリ。滄浪ハ、支那ノ川ノ名ナリ。續紀ノ「面幣利」ハ「思ヘリ」ナリ、他モ然リ。壬生二品集、下ニ「いたづらに朽ちやはてなむ、戀衣、たてれをれとも、いふ人もなし。」ナドモ、同ジキカ。萬葉、十五ノ歌ハ、第六三節ニ說ケリ。

一七〇節　(本、二四〇)「けり」ハ、萬葉集ニ「來有」ノ用字モアレバ「來てあり」ノ約マレルナリトモイフ。或ハ「來歷てあり」ノ約ナリトモイフ、古事記ノ中ニ「あらたまの、年が岐布禮ば、あらたまの、月は岐閉行く。」萬葉、五ニ「萬世に、年は岐布とも、梅の花、たゆることなく、咲きわたるべし。」ナドアルハ「來、歷」ナレバ、左モアルベキカ。

一七一節　○「梅の花、咲きたる園の、青柳は、かつらにすべく、なりにゝ家良受夜。」(萬葉、五)斯ノ「けら」トモ活用シタルアレド、僻典トスベシ。

一七二節　(本、二四一)詞玉緒、六ニ「泉式部物語に、「なりけりき」とゝいへる詞あり、けりき、例なきことなり、いかゞ、」トアリ、コレモ「けり」ハ、說明スルノミ、過去ノ意ハ「き」ニアル

ナルベシ。

一七三節　(本、二四三、二四八)古今、ノ歌ハ、「京人、我ヲ、古物ト見捨ツルヲ厭ヒテ、奈良ヘ來テ見タレド、此モ古都トモ云テ、ヤハリ、古物ト思ハル、憂キ名ギヤワイ、」ノ意ナリ。伊勢物語ノ歌ノ振分髪ハ、古ヘノ童男女ノ髪風ナリ、左右ニ分チテ垂レ、肩ニ至ル、歌ノ意ハ、「諸共ニ、幼少ヨリノ馴染ナルニ、今ハ、互ニ成長シタリ。」トナリ。古今集ナル「れいらくのこむと知りせむ」ヲ、遠鏡ニ「來ウトイフ」ヲ、トウカラ知タナラ、」ト譯セリ。「知りせむ」ハ、「知りしかむ」ノ未定ナルヲ知ルベシ。

一七四節　(本、二五一)万葉集ニ「今、金」ノ音ヲ「將來」ニ用ヰ、「念」ヲ「將寐」ニ用ヰ、或ハ、「歎敢、知三」ナドヲ「將歎、將冷、知」ノ意ニ用ヰタリ、「今、金、念、敢」三ノ字音ハ、皆、唇内音ニテ、韻ハ「む」ナリ、(ん)ナラバ、舌内音ノ字ヲ用ヰルベキナリ、)又、奈何責、可佐寒、歸來六、」ナドモアリ、愈、證スベシ。(是等ヲ「ん」トハ言ハルマジ、) 又、「見む」ノ「みまく」トナルハ、「見る」ノ「みらく」トナリ、「いふ」ノ「いはく」トナルト、同シコトナルベシ。

一七五節　(本、二五三)「けむ」ハ、「けり」ノ活用ノ「けら」ト、未來ヲイフ「む」ト、約マリテ成レルモノガ。「たらちめは、かゝれとゝしも、ぬばたまの、我が黑髪を、撫でずやありけむ。」(後撰、十七)(後ノ第三〇九節ヲ見ヨ)

一七六節　(本、二五五)「憶良等者、今者將罷、子將哭、其彼母毛、吾乎將待曾。」(萬葉、三)トアル「將罷」ハ、自己ノ動作ノ未來ニテ「將哭、將待」ハ、家ニアル妻孥ノ動作ノ推量ナリ。共ニ「將」ノ字ヲ用ヰテアレド、推量モ、固ヨリ、未來ノ事ニ屬スレバ、然ルナリ。

一七七節　(本、二五六)古今、十ノ歌ハ、「浪ノ、風ニ立ツヲ、花ト見做シ、散ルト見做シタルナリ。伊勢物語ノ歌ハ、「雨ニ濡レテ歸ル人ニ詠メル歌ナリ、催馬樂ニ「青柳を、片絲によりて、鶯の、縫ふといふ笠は、梅の花笠。」トアリ。

一七八節　(本、二五七)「まし」ノ「ま」ハ、未來ノ「む」ヨリ轉シタルモノカ。或ハ、「む」ト「かし」(感動詞)トノ約マレルモノトモイヘド、「まし」ニハ、「ましか」ノ活用アルニ、「かし」ニハ、「かしか」ノ活用ナケレバ、イカヾ。

一七九節　(本、二六〇)「ませむ」トイフ語ニツキテハ、詞玉緒ニハ、「まくせむ」ノ約ナリトイハレ、義門師ハ、「行かまほし」ナドノ「ま」ニ、佐變ノ「せ」ノ添ヘルモノトイハレ、ソノ「ま」ハ「まく」ノ略ニテ、「まし」ハ「まし、ましか」ノ連用言ナリトイハレタリ。サレ

225447

ド、コノ[セ]ニ[爲ル]トイフ力アリトモ思ハレズ、又[ゆかまする]、[ゆかますれど]トモ、活用ハセヌナリ。前ニ[無かりしかど]ト[無かりせど]トノ既定、未定、ヲ言ヘルガ如ク、コヽナルモ、[聞かましかど]ト[聞かませど]トヲ、既定、未定、ト定ムベキガ如シ。

一八〇節　(本、二六一)古今、十七ノ歌ハ、布引ノ瀧ヲ詠メルナリ、瀧ノ水ノ飛散スルヲ、玉ニ譬ヘテイヘリ、初二句ハ、[キット、別ニ人ガアッテ、緒ニ貫キタル玉ヲ拔キ亂ル、(亂ス)ノデアラウ]ナリ下二句ハ、[袖ニ包ミキレヌ程ニ、繁ク散ル哉]ノ意ナリ。

一八一節　○[宜しかも、蘇我の子等を、大君の、仕はす羅志枳。(推古紀)空蟬も妻を、爭ふ良思吉](万葉、一)此ノ如キ活用モ、古クハ、アリシナリ。

一八二節　(本、二六三)土佐日記ノ歌ハ、土佐ノ國司、前任ノ人、後任ノ人ニ、海路ノ難ノ同情ヲイヘルナリ、[誰ならなくに]ハ、[誰ナラズ、君ナリ]ト、後任ノ人ヲ指セルナリ。万葉、三ノ歌ノ眞野榛原ハ、攝津ノ八田部郡ノ地名ニテ、景色アル處ト聞ユ、[白菅ノ生フル眞野ノ榛原ヲ、往ク方ニ來方ニ]、(本書ノ第四六四節、及ビ、此ノ別記ノ第二七九節、參見)ノ意ニテ、[此ノ榛原ヲ、君コソハ、旅ノ往來ノ度々ニ見給フラメ]トナリ。同、五ノ歌ノ、松浦モ玉島モ、肥前ノ地名ナリ、[若鮎ヲ釣ル女子等ヲ見ルラム人ガ、羨シサヨ。]トナリ、[ともし]ハ、[うらやまし]ノ古言ナリ。同、三ニ、[あらたへの、藤江の浦に、すゞき釣る、海人とか見らむ、旅ゆく我を。]

一八三節　○[らし、べし、らむ]ハ、他ノ動詞ニテハ、ソノ第一活用ニ接スベキモノナルニ、上一段活用ニ限リテ、[る]無クシテ接スルコト、一ノ古格ナリ、[ども]トイフ豆爾乎波モ、第一活用ニ接スベキ通例ナルニ、[去ども〳〵見ども飽かぬ君かも、立つともも居ども、君がまに〳〵](本書ノ第三七七節ヲ見ヨ)ナドノ用例アルモ同ジ趣ナリ。大和物語ニ、[見も見ずも、誰と知りてか、戀ひらるる]ナドアルモ、[見るも見ずも]ナルベキカ。(見、見ず、共ニ名詞ナルカ)

或ル人ハ、コノ[見べき、似らむ]等ヲ、連用言ニ接スルモノナリト說ケリ、サレド、將然モ、連用モ、同ジク[見、似]ナレバ、何レトモ定メガタキノミナラズ、他ノ活用ノ將然、連用ニ、[行カベキ、行キラム、受ケベキ、受ケラム]ナドスベクモアラネバ、此ノ場合ノ[見、似]ヲ連用言ト認メガタシ。[らし、べし、らむ]ハ、元來、終止言ニ接スベキモノナレバ、終止言ニ、語尾ノ[る]無クシテ接ス、ト定ムル方、理アリケ

ナラズヤ。

又、良變ニテハ、其第二活用ニ接スベキ語ヲ「る」ヲ省キテ接スルヿ、常ナリ「わ(ル)べきかぎり」「さ(ル)べき僧ども」「人もわ(ル)なり」「心地すべか(ル)めれど」「其他「わ(ル)らし」「た(ル)らし」「な(ル)らし」「け(ル)らし」ノ如シ。又「歸り來までに、しはひて待たね」(萬葉、三)「あはび白玉取りて來までに」(同)又ハ、前ニ擧ゲタル「往くさ來さ」ナドモ「來るまで」「往くさ來るさ」ナルベク思ハルヽニ「る」無クシテ接スルヿ、皆、異例ナリ。

一八四節　(本、二六四)萬葉、九ノ歌ノ「くひ山」ハ、山名ナリト云、ソレニ「春草を馬食ふ」ト言ヒカケタルナリ「雁の使」トハ、漢ノ蘇武ガ故事ニ因テ、言ヘルナリ「くひ山ヨリ越エ來ル雁ヲ、故郷ヨリノ使カト見タルニ、宿リモセズ、行キ過ギタリ」ノ意ナルベシ。古今、十六ノ歌ハ、此ノ別記ノ第三〇三節ニ說ケリ。

一八五節　(本、二六五)古今、十九ノ歌ハ「凡ソ、老朽ノ譬ヘニイハルヽ難波ノ長柄ノ橋モ、今度、新築スルワイ、今ハ、カヤウニ老朽シタル我身ヲ、何ニ譬ヘヤウカ、譬ヘルモノガナシナツタ。」ノ意ナリ。

一八六節　(本、二六六)「何のごとし」「何がごとく」ナドノ用例ニ據レバ、獨立ノ形容詞ナルガ如シ、然レドモ、一文ノ冒頭ニ用ヰラレザレバ、(語首ノ音モ、濁音ナリ)、尙、助動詞ナルベシ。萬葉、三ノ歌ハ、僧ノ歌ニテ、世ノ無常ハ、譬フベキモノナシ、朝ニ、船發シテ漕ギ行キシ、其跡方モ無キガ如シ、トノ意ナリ。

一八七節　○凡ソ、此ノ篇ニ助動詞トシタルモノ、從來ノ語學書中ニハ、スベテ、豆爾乎波ノ中ニ混シテ說ケリ。然レドモ、是等ノ語、皆、語尾活用ヲ具シ、法ヲ具シテ、能ク文章ノ末ヲ結ベバ、豆爾乎波ニ混ズベキニアラズ。サレド、是等ノ語、獨立ニテハ用ヰラレズ、他語ノ意ヲ補助スル用ノモノナレバ、固ヨリ、動詞ニハアラズ、因テ、今ハ、助動詞トシテ、一門ニ立テタリ。

一八八節　○又云、助動詞ハ、洋文典ニテハ、多クハ、動詞ニ附說セリ、然レドモ、國語ノ助動詞ハ、活用ト法トヲ具シテ、其數モ多ク、其ノ規定モ繁雜ナルモノナレバ、一門ニ立ツベキ價値アリ、且、別門ニ立テヽ說ク方、學ブモノニモ便ナリ、因テ、今ハ、此ノ如シ。

一八九節　○前ノ動詞ノ條末ニ於テモ、國語ト洋語トノ間ニ、動詞ニ、天性ノ異同アルヿ

ヲ論シタリ。サルニ、世ノ洋文法ニ據リテ、國文法ヲ作ルモノ、此ニ、助動詞トシテ説クル「打たる」「遂げらる」「打ちつ」「教へさ」「打たむ」「遂げむ」等ノ「る」「らる」「つ」「さ」「む」ナドヲ、動詞ノ語尾變化トシ、Voices, Moods, Tenses. 等トシテ、動詞ニ就キテ説ケルモ多ケレバ、今、反覆シテ、其説ノ理ナキヲ辨ゼム。

右ノ助動詞ドモヲ、動詞ノ語尾變化ト見ルキハ、第一ニ、其變化ノ稱呼ニ就キテ、辨別ニ苦ムコトアリ。ソハ、先ヅ「打つ」トイフ動詞ノ變化ハ「つ、て、た、ち」ナリトシテ、更ニ、又、其ノ Passive voice. 「打たる」ニ「る、るる、られ、れ」ノ變化ヲ起シ、又、其ノ Potential mood. ノ「打たる」ニモ「る、るる、られ、れ」ノ變化ヲ起シ、又、其ノ Past tense. ノ「打ちさ」ニモ「さ、し、しか」ノ變化ヲ起シ、又、其ノ Future tense. ノ「打たむ」ニモ「む、め」ノ變化ヲ起スナド、其他、尙、幾多ナルヿ、擧グルニ堪ヘズ。是等ヲ、スベテ、一動詞ノ語尾ノ變化ナリトスルキハ、一動詞ニ數十百樣ノ變化ヲ起スニ至ル。而シテ、右ノ諸變化ハ、皆、各自ニ、直説法、分詞法、命令法、等ノ諸法ヲ成スガ故ニ、「打たれよ」トイヘバ、Passive voice. ニ Imperative mood. ヲ起シ、「打ちし人」トイヘバ、Past tense. ニ Participial mood. ヲ起シ、「打ちてよ」トイヘバ、Past tense. ニ Imperative mood. ヲ起ス等、其餘、皆、然リ。然ノミナラズ、各助動詞ハ、又、各自ノ變化ヲ以テ、他ノ助動詞ニモ、互ニ重疊連續スルガ故ニ、其連續スルモノヲモ連ネテ、一動詞ノ變化ト見ザルヲ得ズ、(一連續ハ、語尾ナリ、二連續以上ハ、語尾ナラズト區別スルハ、難カラム、)サレバ「打たれさめよ」「打たさめられたりしかた」ナド、屢々、重用スルモノニ至リテハ、如何ニカ、コレニ命名スベキ。

右ノ如クナレバ、Mood ニ Voice ヲ生ジ、Voice ニ Mood ヲ起シ、Tense ニ Mood アリ、Mood ニ Mood ヲ重ヌル至ル、豈ニ解スベカラザル極ナラズヤ。既ニ、動詞ノ條末ニモ論ジタルガ如ク、英文法ノ如キハ、羅甸文法ノ模擬ニ出デタルモアレバ、重複變化ノ不都合モアレド、羅甸文法ノ如キハ、一動詞ノ變化ニ、法モ、口氣モ、時モ、具備スルモノナレバ、然ル紊亂ノ不條理無シ、又、初ヨリ、其國語ノ天性ニ隨ヒテ立テタル文法ナルベケレバ、然ル不條理ノ起ル謂ハレモ、無カルベキナリ。畢竟ズルニ、國語ノ特性ヲ、善クモ推究セズシテ、唯、徒ニ、此ヲ彼ニ合ハセムトスレバコソ、サル牽强説モ起ルナレ、況ムヤ、其説ノ如クストモ、Mood, Voice, Tense. トイフ語原ノ意義ニ於テ、既ニ其大本ヲ失ヘバ、强ヒテコレヲ立ツト

モ、洋文法ノ忠臣トモ爲リ難カラムヲヤ。

此ノ故ニ、國語ニハ、國語特性ノ制ヲ立テ、動詞ト助動詞トヲ甄別シ、扨、國語ノ助動詞ハ、變化ト法トヲ具シ、且、助動詞ト助動詞ト、相重用スル定則モアリ、而シテ、受身トイヒ、打消トイヒ、過去トイヒ、未來トイフガ如キ意義ハ、助動詞ノ其語體ニ生得ス、ト說キ去ラバ、何ゾ、然ル紛絲ノ紊レヲ起サム、各國天然ノ言語ニ、差違アルベキハ、理ノ然ルベキ所ニシテ、其間ニ、惑ヒヲ入ルベキニアラズ、唯、其國語ノ天性ニ隨ヒテ、語法ヲ制定スベキナリ、彼ニアレバトテ、我ニ模擬揑造シ、彼ニ無ケレバトテ、我ニ制定セザルハ、其見、亦、陋ナラズヤ。

一九〇節　(本、二六八、二六九)副詞ノ名稱ノ說ハ、前ノ第一二一節ニアリ。「修飾ス」トイフハ、英語ニ、To modify. トイフ「更ニ、別樣ノ意味ヲ附加スル」義ナリ。

○本書第二六九節ノ事ニ就キテハ、此ノ別記ノ第一五四節ヲ見ヨ。

一九一節　(本、二七二、二七三)「行くな」な行きそ」ナド禁止スル「な」、「なそ」ハ、副詞ト見ルベシ、「行く」ノ動作ヲ修飾スル語ナレバナリ。

古今、八ノ歌ハ、送別ノ歌ニテ「遠國ニ離レテ居テモ、思ヒテ居ル友人ニ、隔心アルナ」ノ意ナリ。同、十三ノ歌ハ、「內心ニ思ヒテ居ルヿヲ、紫根ノ摺衣ノ色ノヤウニ、顏色ニ出スナ、キット、」ノ意ナリ。宇治拾遺「吾嬬人、生贄を止むる事」ノ條ニ「いかにも〳〵人な寄せ給ひそ、又、これにみづから侍りと、な人にゆめ〳〵知らせ給ひそ、といふ。」

一九二節　(本、二七五)萬葉三ノ歌ノ比良ハ、近江ノ地名ナリ。「さかる」ハ、「離ル、」意ナリ。万葉、十七ノ歌ハ、「我、去レリトテ、詐ブヿ勿レ、吾ガ兄子ヨ、」ノ意ナリ。

一九三節　(本、二七六)世ノ文典ニ、副詞ヲ、地位、時刻、順序、分量、決定、ナド、數種ニ分類シテ說ケルガアリ、若シ、語義ノ分類ヲ、文典上ニ說カバ、アラユル名詞、動詞、形容詞、ノ意義分類モ、皆、說カザルヲ得ザラム、何ノ究極スル所ゾ。

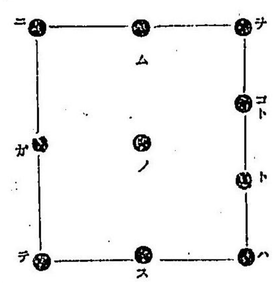
一九四節　○此ノ章ニ、副詞トイフモノ、從來、國學諸哲ノ論及セシモノ、ヲサヲサ見エズ、サレバ、此ノ一類ノ語ニハ、某言ト、名稱ヲモ付セズシテアリキ、唯、富士谷成章氏ノ「かざし抄」ニ「かざし」ト名ヅケタル一類ノ語中ニ、此ノ副詞ヲ入レタレド、他ノ種々ノ語ト混淆セリ)サレバ、此ノ條ハ、先哲ノ說ノ據ルベキナクシテ、創定ノ說ニ係レル多シ。

一九五節　(本、二七七)「武田と上杉と戰ふ」「織田も豐臣も滅びたり」ナド用ヰル「と」「も」ナドモ、接續詞ノ意ヲ成セドモ、文ノ解剖ニ當リテ、上ノ語句ニ付着シテ離レザルカ如キ狀アルヿ、眞ノ接續詞ト異ナル所アリ、是レ、豆爾波ノ豆爾波タル所以ナラムカ、尙、本書、ノ第四九九節ヲ見ヨ。

一九六節　○此ニ、接續詞トイフモノ、從來、豆爾乎波ノ中ニ入レリ、然レドモ、接續詞ハ、唯、上下ヲ接續スルノミ、豆爾乎波ハ、上ヲ承ケ下ニ接シテ、其意義ヲ增減左右ス、サレバ、相混ジ難シ、因テ、今ハ、別門ニ立テタリ。

○或人ノ曰ク、日本語中ニハ、接續詞トシテ取立テ、イフベキモノ無シ、コレヲ別ナテイフハ、洋語ニ倣ヒテ模造スルナリ、トイヘリ、然レドモ、コレ未ダ深ク究メズシテイフ論ナリ、本書ノ第四九九節、第五七七節ニ、接續詞ニ就キテイフヿアリ、往キテ見ルベシ。

一九七節　(本、二七九)古クハ、漢文ヲ譯讀スルニ、後世ノ如ク「助ケ假名」「送リ假名」ナド付クルヿハ無クテ、文字ノ四方、四隅、中央、ナドニ、點ヲ付シテ、一定ノ規則ヲ設ケテ、譯讀セシナリ。下ニ出セル圖ハ、其一例ニテ、方形ハ、字ニ象リ、點ニ旁記セル假名ハ、其訓語ナリ。例ヘバ、「人」ノ字ノ左肩ニ點ヲ付シタルハ、「人ニ」ト讀ミ、右肩ニ付シタルハ、「人ヲ」ト讀ムナリ。其右肩ノ二點ノ訓語ヲ採リテ、之ヲ「ヲコト點」ト概稱シタリ。今モ、「返リ點」「訓點」「道春點」ナド「點」トイフヿアルハ、其遺稱ナリ。(書籍モ、古クハ、卷物ナリシカバ、「卷」ト數ヘシヲ、後ニ、綴本トナリテモ、尙「卷」トイフニ同ジ)又、或ハ、其四隅ノ訓語ヲ、左脚ヨリ左肩ヘ、右肩ヨリ右脚ヘ、循リテ讀メバ、「テニヲハ」トナルヲ採リテ、其訓語ノ概稱トモセリ、是レ、豆爾乎波トイフ語ノ起因ナリ。



一九八節　○「君が代は、」ノ歌ハ、古今集、七賀、ノ歌ナリ、但シ、「我が君は、千代に八千代に、」トアリ、「細カイ石ガ、大キナ岩トナリテ、苔ノ生エルマデ、千年モ萬年モ、御繁昌デオイデナサレ、」ノ意ナリ。「見渡せゞ、」ノ歌モ、同書ノ一、春、ノ歌ナリ。

(本、二八〇)豆爾乎波ノ用法意義ハ、紛絲ノ如シ、學ブ者、其緒ヲ索ムルニ苦シム、今、此ニ、用法ニ因リテ、三類ニ大別セシハ、此書ノ新案ナリ。而シテ、更ニ、意義ノ方ニ就キテ、概略ニ類別スレバ、左ノ如クナラムカ。

第一類。

スル主ノモノ、指示ス「が」「の」ノ二名詞ヲ繋ゞモノ、「が」「の」ス事物ヲ處分スルモノ、「を」「に」モ向事物ノ、示ス方「より」「へ」

第二類。

ルモノ、「は」指定スルモノ、「ぞ」「なも」「こそ」引證スルモノ、「すら」「だに」「へ」限ルモノ、「のみ」「かも」疑フモノ、「か」「や」

第三類。

ルモノ、「ぞ」翻抑ス〜ルモノ、「ぞ」「ぞも」「ぞも」、意ノ裏返ルモノ、「を」「に」「が」終リテ移ルモノ、「で」「て」「つゝ」

然レ共、場合ニ因リテ、各語ニ種々ノ異義ヲ生ゼレバ、コレヲ以テ、定義トハシガタシ。

一九九節　本二八二萬葉十二ニ「たらちねの、母我養ふ蠶のまよごもり」トアリ、同十三ニ「たらちねの、母之養ふ蠶のまよごもり」トアリ「が」モ「の」モ、意ハ同ジ。

○此ニイフ「が」「の」ヲ羅甸ニ所謂Nominative case.(主格)ナリト確言スルハ、恰當ナラズ。若シ、彼ノ主格ニ相當スベキモノヲ求メバ、「鳥鳴く。」「花落つ。」ナド、豆爾波ナシテ用ヰル「鳥」「花」ノ位置、是レナラム。コレニ「が」又ハ「の」ヲ加ヘテ、「鳥が鳴く」「花の落つ。」トイヘバ、「が」「の」ヲ加ヘタル程ノ意味ハ、隨テ、別ニ起ルナリ、即チ、本書ニ說ケルガ如シ。

二〇〇節　本二八四、二八五此ニイフ「の」「が」ハ、英又ハ、羅甸ノPossesive.又ハ、Genitive.(持格)ニ當ルガ如シナレド、次下ナルハ、又、種々異樣ノ意義ヲナセバ、コレヲ概シテ、持格ナリトハ、言ヒ難シ。

二〇一節　本二九三洋文法ニテ言ヘバ、前條ナル「が」「の」ハ、略名詞ノ主格ニ似タルモノニテ、此ノ條ナル「が」「の」ハ、略持格ニ似タルモノト、先ヅハ、概別シテアルベシ。

二〇二節　○土佐日記ノ「今日なれぞ」ノ歌ハ、正月ノ子ノ日ニハ、若菜ヲ摘ムベキ日ナルニ、折節、船中ニアレバトテ、詠メルナリ、奈良ノ春日野ハ、若菜摘ミノ名所ナリ。

古今、二十、ノ歌ノ「小黒崎、みつの小島」ハ、奥州ニアリ、美景ノ地ナレバ、(非情ノモノヲ、有情ノモノト見テ)京都ヘ伴ヒテ歸ラムト欲スノ意ナリ。

二〇三節　○又「蘆原の、清見が崎の、見穂の浦の寛見乍、物思ひもなし。」(萬葉、三)斯ク讀メバ、前條ノ「の」ナレド、「寛見乍」ト讀メバ、此條ノ「の」トナル、意義ノ變化スルヲ思フベシ。

二〇四節　(本、二九六)此ニイフ「に」ハ、羅甸ノ Dative case. (與格)ニ當ルガ如シ、然レドモ、次ナルハ、又、種々ナリ。

二〇五節　(本、三〇五)コレハ、羅甸、又ハ、英ノ Accusative, Objective. (賓格)ニ當ルガ如シ。

二〇六節　(本、三一七)古今、六ノ歌ハ、「山里は、冬ぞさびしさ、まさりける、人目も草も、かれぬと思へば。」ナリ、人ノ來ヌヨリヲ、人目離ル、トイフヲ、草ノ枯ルニカケタリ。古今、十七ノ「思ひせく」ノ歌ハ、瀑布ノ繪ニ詠メルナリ、繪ニハ聲ナシ、心ニ思ヒ塞ク苦慮ヲ、瀧ノ水ニ譬ヘテ、人ニ言ヒ出ダサレヌヨリ、聲ナキニカケタリ。

二〇七節　○本書、第三一二節ニモ擧ゲタル「暮ると明くと、目離れぬものを、起くとは歎き、寐とは云のべむ、又「行くと來と、見れども、わかぬ、秋の野は、行きもやられず、とまるともなし。」(伊勢集)ナドハ、「とて」ノ意ナレド、尙、終止法ヲ受ク、「女、打泣きて、寐とて、」(伊勢物語)東の方に行きて住む處求むとて、(同)いつ見きとてか、戀しからむ。」(新古今、十一)ナド、皆、然リ。

二〇八節　(本、三一八)古今、一、ノ歌ハ、「春やとき、花やおそきと、聞きわかむ、鶯だにも、鳴かずもあるかな。」ニテ、春初ノ詠ナリ、「聞キワクベキ鶯ダニモ鳴カズ、」トイフナリ、「わかむ」ハ、連體法ニテ、「鶯」ニ連ルナリ。

二〇九節　(本、三一九)源氏物語ニ、「さま〳〵、ためしなき宿世ころ侍れ、とてよろこぶ。」みすさびごとどもこそ出でくれ、とてはゝえみ給ふ。」心むせの、れいらかに落ちぬたるこそ、いとかしこきわざなりけれ、となむ思ひ。」ナドアルハ、「と」ノ上ニテ、「こそ」ヲ結ビタレバ、論ナシ。然ルニ、「みるめかる、潟ぞあふみに、なしと聞く、玉藻をさへや、あまはかづかぬ。」(後撰、十二)鐘の音に、今や明けぬと、なかむれど、なほ雲深し、峯の白雪。」(續千六百番)打ちつけに、思ひや出づと、古里の、忍草して、摺れるなりけり。」(新千載、七)ナドハ、詞玉緒、五ニ「その結び辭の格をたがへて、「と」と受けたり、此格は、なべての事にはあらず、其歌のさま、詞のしらべにえたがひ

て、よくもあしくも聞ゆべし。」トイハレタリ、後撰ナルハ、「潟ぞ云々と聞く」續千六百番ナルハ、「今や云々とながむれど」ニテ、挿入ノ句法ニモアラムカ、トモ思ヘド、然ルトキハ、語脈更ニ通ゼズ、新千載ナルモ「思ひや云々なりけり」トハ見ルベクモアラズ、或ハ「みるめかる潟ぞあふみになき。あはれなしと聞く」ナドノ意ナリ、ナド辯護スル說モアレド、トニカクニ避クベキ用法ナリ。又、躬恒集ニ「明けぬれど、つれなくなりぬ、女郎花、人知れずこそ折らむと思ふに。」ナドモ同シ。新古今、九ニ「唐土も、天の下にぞ有と聞く、照る日の本を、忘れざらなむ。」ナドアルハ、「有」ノ字ヲ書キテアレバ「あり」カ「ある」カ、計ラレズ。月清集、上ニ「塵をこそ、すゑじとせしか、ひとり寐る、我が常夏は、露も拂はず。」(古今、夏)「塵をだに、すゑじとぞ思ふ、咲きしより、妹と我がぬる、とこなつの花。」トアルハ、確ト「と」ノ下ニテ結ビタリ、是レモ非ナルベシ、或ハ「じ」ハ「こそ」ノ結ビトハナラズ、ナドイフ人モアレド、新續古今、春、下ニ「人はなど、訪はで過ぐらむ、風にこそ、知られじと思ふ、宿の櫻を。」ナド、其他ニモアリ。續拾遺、戀、五ニ「面影を、いかに忘れぬ、心こそ、つらしと思ふ、折もありしか。」ナドハ、詞玉緒ニモ、不調ノ歌トセラレタリ。疑問ノ用法ハ、傚ハヌヲ可ナリトス。

二一〇節　(本、三二五、三二七)新古今、十六ノ歌ハ、菅公ノ筑紫ニテノ詠ニテ、波トイフ題ナリ、「流れ木」ハ、海ニ流ルヽ木ニテ、流人ノ我身ニ譬ヘタリ、「からき」ハ、憂クツラキヲイフ、流木モ波モ鹽モ、皆、海ノモノナリ、「わたつみの底」ハ、海ノ底ニテ、イヅレカ、カラキト、海神ニ問ヒカケテ、我ガ憂キニハ若カジ、トイフナリ。

○又、三二尊は、彌陀と、夾侍の觀音ト勢至トの二菩薩と、の稱なり。」人ト人トの交際とこれにつきて起る務めとを、正しく行ふべきなり。」ナドハ、片假名ノ「ト」ト、平假名ノ「と」ト、各自ニ相對ス。

二一一節　(本、三三一)此ノ條ノ「より」「から」ハ、羅甸ノ Ablative case. (奪格)ニ當ッベシ。

二一二節　(本、三三三)繼體紀ニ「初瀨の川ゆ、流れ來る竹の、萬葉ニ「小筑波の、繁き木の間よ、起つ鳥の」ナド、甚ダ多シ。

本書ノ萬葉、十七、ノ歌ノ「我がせこを吾が」ハ、唯「松」ヲ「待つ」ニカケタル序ナリ。又、萬葉、九ニ「雁がねの、聞ゆる空ゆ、月たちわたる。」ナドノ「ゆ」モ「より」ナレド、ソノ「より」ハ「を」ニ通フ「より」ナルベシ。又、同、三ニ「田子の浦從、打出でヽ見れば、眞白

にぞ、富士の高嶺に、雪は降りける。」トアルヲ、新古今、冬、ニハ、「田子の浦に打出で丶、」ト改メタリ、是等ハ、「に」ニモ通フモノカ。

二一三節　(本、三三五)此ノ條ノ「より」ハ、英語ノ前置詞ノ Than. ノ意ナリ。古今、五ノ、「秋の菊」ノ歌ハ、後ノ第二四七節ニ註セリ。

二一四節　(本、三四一)此ノ「は」ヲ、Nominative case ノ如クノミ思フモノアルハ、非ナリ、ソノ屬ク所、名詞ノミナラズ、本書ノ用例ヲ見テ知ルベシ。

二一五節　(本、三四二)古今、八ノ歌ハ、「花ノ濡ルヽモ惜シケレド、友ノ濡レテ歸ルハ、尙更惜シト思フ、」ノ意ナリ。

二一六節　(本、三四三)古今、一ノ歌ハ、「若シ、今日、花見ニ來ナカツタラバ、明日ハ、キット、花ガ雪ノ如ク落チテシマフデアラウ、縱ヒ、明日、雪トナツテ消エズニアツタトテ、誰ガ花ト見ヤウゾ、」ノ意ナリ。

二一七節　○「夢でしさまし給ふなよ、」(謠曲、紅葉狩)御心にでし違ひて、「母とでし思ふな、」ナドモ、清音ナルヲ、音便ニ濁ルモノカ。(し)ハ、指ス意ノ互爾波ナリ、)

二一八節　(本、三四五)此ノ條ノ「ぞ」ハ、「そ(其)」ト指ス意ノ代名詞ヨリ轉シタルナルベシ、万葉集、十一ニ、「戀其晩師之、雨の降る日を、」ナドアリテ、「其」ノ字ヲ用ヰタリ、其他ニモ、紀、記、萬葉、等ニ、多ク清音ノ「曾」ノ字ヲ當テタリ。「憂き人の、月はなにろの、ゆかりぞと、思ひながらも、打ちながめつゝ。」(新古今、十四)ナドノ「なにそ」ノ「そ」ノ清ムモ、コレナラム、常ニ「誰ぞ、」「な行きそ、」ナド、清音ニイフモ、同ジカルベシ。

二一九節　(本、三四七、三四八)此ニイフ略語ノ「ハ、本書ノ第五六九節ヲ見ルベシ。又、「面影に、ぞしは見ゆる、君なれど、戀しき事ぞ、時どもなき。」(拾遺、七)ナドモ、本書ニ引ケル堀川百首ノ歌ノ趣ナリ。

二二〇節　(本、三四九、三五〇)「なも、」ハ、元來、感動詞ヲ重用シタルニテ、「なむ」ハ、「なも」ノ轉ナラム、其感ノ深キ、終ニ、「ぞ」ノ如ク、指ス意ヲ成セルナルベシ。

二二一節　(本、三五一)「し」ハ、「そ」ト通ジテ、是レモ、ヒトスギニ指ス意アルナリ、古キ代名詞ニ、「汝」ノ意ニ、「ぞ」トイフアリ、「其」ノ意ナリ。(本書ノ第一七二節、及ビ、此ノ別記ノ第一二六節ヲ見ヨ、)

二二二節　○此ノ條ノ「し」ヲ、從來、「やすめことぞ」ト稱シテ、意味ナキモノトスルハ、イカヾ、ヒトスギニ指ス意アリテ、力アルヿ、用例ヲ味ヒテ知ルベシ。和歌ノ五文字

ノ句ニ「身にしあれど」ナド加フルヿ、常ナリ、是レ、不用ノ語ナラバ「字あまり」ニ加フルニ及バジ、必ズ、其意ヲ添ヘデハナラヌ場合ナレバ、加フルナラム。

二二三節　「いつか行かむ」トイヘバ常ノ疑問未來ナレド「いつしか行かむ」トイヘバ、ヒトスヂニ行カムコトヲ願フ意トナル。万葉、五ニ「世の中を空しきものと、知る時し、いよ〳〵ます〳〵、悲しかりけり。」言問はぬ、木にはありとも、うるはしき、君が手馴の、琴にしあるべし。」ナド、イヅレモ十分ナル力アリ。

二二四節　(本、三五二)古今、秋、上「天の川、もみぢを橋に、わたせゞや、たなゞたつめの、秋をしも待つ。」ヲ「遠鏡」ニ「天ノ川ノ橋ニ、紅葉ヲ渡スカシテ、時節モ多イニ、(玄も)ノ解、棚機様ガ、秋ヲ御待ナサル。」ト解シタリ、詞玉緒、五ニ「これらは、同じやすめ辭なるうちにも、いさゝか意ありて、あるが中にて、ゐり出たる事にれけり、時もれはき中に、秋をしも、と秋をゐり出でたり。」

又、詞玉緒、五ニ「時しもあれ、秋しも人の、別るれど、いとゞ袂ぞ、露けかりける。」(拾遺、六)これは、玄も、二つあり、上なるは、こそに通ふ玄も、下なるは、擇り出でたる玄もなり、云々、すべて「をりしもあれ」「時しもあれ」などいふは「をりこそあれ」「時こそあれ」といふに同じ、さる故に、こそ、の格に、れと結べり。」トイハレタリ、サレド「こそ」ノ略ト見ル方、更ニ解シ易シ「逢ひ見ては、なぐさむやとぞ、思ひしに、名殘しもこそ、戀しかりけれ。」(後撰、十一)忘れなむ、今はとはじと、思ひつゝ、寐る夜しもこそ、夢に見ゐけれ。」(拾遺、十三)ナド思フベシ。

二二五節　(本、三五六)「だに」ノ語原ハ「直に」ノ約マレルニモアラムカ。

○古今、一、ノ歌ノ意ハ「山地ニテハ、最モ消エ易キ松ノ枝ノ雪ダニ、未ダ消エヌ寒サナルニ、都ニテハ、若菜、既ニ萌芽シテ、摘ムベキ程ニ、春暖トナリヌ」トナリ、消雪、輕ク、萠芽、重シ。「露にだに」ノ歌ハ、古今集、二十ニ「御侍、御笠とまうせ、(御伴)衆、ソレ、御笠ヲ、ト申シ上ゲナサレ」宮城野の、木の下露は、雨にまされり。」トイフヲ、本歌トシタルニテ、露、輕ク、五月雨、重シ。

二二六節　○「今日のみと、春を思はぬ、時だにも、起つことやすき、花の陰かは。」(古今、二)(マシテ、春盡落花ノ際ニハ、立去リ難ク思フ、トナリ「起つこと易き」ハ、立去ルヲ、平氣ニ思フナリ、春盡ノ歌ナリ、春盡ヲ重シトシ、春盡ト思ハヌ時ヲ輕シトス。)「女御とだにいはせずなりぬるが、あかず口惜しうればさるれど、今ひときざみの

位をだにとて、贈らせ給ふなりけり。」(桐壺)(女御トダニイハセズ、マシテ、中宮ヲヤ、ノ意、御息所、卒後ノ贈位ノコトナリ。)「母御息所は、影だにねばゐ給はぬを、」(同)(マシテ、顔色ヲヤ。)「一文字をだに知らぬ者しが、足は、十文字に蹈みてぞ遊ぶ。」(土佐日記)(賤者ノ酔舞ニ、戯レテイヘルナリ、一ハ輕ク、十ハ重シ。)「霜だにも、置かぬ方ぞと、いふなれど、波の中には、雪ぞ降りける。」(同)(土佐暖海ノ歌ニテ、碎波ヲ雪ト見タルナリ、霜、輕ク、雪重シ。)「花だにも、同じ心に、咲くものを、植ゑけむ人の、心知らなむ。」(貫之集)(花、輕ク、人心、重シ。)

二二七節　(本、三五七)　孟子ナルハ、「聖人ノ位置ニハ、孔子ナラバ、無論ニ居ラルベキニ、ソノ孔子ダニモ、謙遜シテ居ラズ、」ナリ。前項ニ擧ゲタル證歌ノ中ニ、「だに、も」ノ例、三處マデモアリ、コレニテ「だも」ハ、「だに、も」ノ略訛ナルコトヲ知ルベシ。

二二八節　(本、三五八)「すら」ノ語原ハ、「それ」ノ轉ニテモアラムカ。

二二九節　○萬葉、六ノ、「言問はぬ、」ノ歌ハ、「物言ハヌ樹スラ、兄妹アリトイフモノヲ、」ノ意ナリ、叢生ノ幹ヲイヘルニカ、「悲獨子」ノ歌ナリ。詩經ナルハ、「我ガ身スラ、容レラレズ、我ガ後ヲ憂フルニ暇アラムヤ。」ト訓ム。

二三〇節　○玉篇ニ、「すらハ、やはり猶、」トいふ意ニちかし、然るに、古今集よりこなたは、すらの意をも、ともに、だにといへり、されど、すらノ意を、だにといふは、こともなし、さへの意を、だにといふは、誤なり。」云々トアリ、本書ニ引ケル萬葉、六、ノ歌、及ビ、同書、三、ニ、「輕の池の、うらわめぐれる、鴨尚爾、玉藻の上に、獨り寐なくに。」(輕池ハ、大和ナリ。)同、十二ニ、「鴨尚毛、己がつまどち、あさりして、」ナドアリテ、「尚」ノ字ヲ當テタル程ナレバ、古クハ、「やはりなほ」ノ意ナリ、サレバ、鎌倉右大臣集ニハ、「物言はぬ、よものけだものだにすらも、あはれなるかな、親の子を思ふ。」ト、「だに」ト、「すら」トヲ重ネテイヘリ、此ノ公ハ、萬葉風ヲ好ミテ詠マレタレバ、意味ヲ用キワケラレタルナラム。「春日すら、我が待つ人のこじとだに、いはずもあすも、なほ賴まましし。」(貫之集)

二三一節　(本、三五九)「さへ」ノ語原ハ、「そへ」(副)ノ轉ナラム、トモイヘド、或ハ、「うのうへ、」(其上)ノ約ナラムカトモ思ハル。

二三二節　○古今、一、ノ歌ノ、「梓弓」ハ、「春」ノ枕詞ナリ、(弓ヲ張ルヲ、春ニ借リテイフ。)「れして」ハ、「れしなべて、一面に、」ノ意ナリ。

二三三節　○[春雨に、匂へる色も、あかなくに、香さへなつかし、山吹の花。](古今、二)[負けてはやまじの御心さへ添ひて、命婦をせめ給ふ。](末摘花)歌さへぞ、ひなびたりける。(伊勢物語)(人物ハ、固ヨリ鄙ビタルニ)ナド、皆、重キヲ添フル意ナリ。土佐日記ニハ、[祈り來る、風間と思ふを、あやなくも、鷗さへだに、波と見ゆらむ。](波風立ツナ、ト念シ思フニ、生憎ニ、鷗ノ白キマデガ、波ト見エテ、心ヲ惱マス)ナド、[さへ]ト[だに]トヲ重用セリ。

二三四節　(本、三六三)伊勢物語ノ歌ハ、武藏ノ隅田川ニテ詠メルナリ、[都トイフ名ヲ負ヒテアラバ、京都ノ人ノ安否ヲ問ハム]ノ意ナリ。古今、五ノ歌ハ、[秋風ノ吹ク吹上ノ濱](紀伊)ニ立テル]ノ意ナリ。

○本書、第三六四節ノ反語ノ事、此ニテハ詳說スルニ及バズ、本書ノ第五四一節以下ノ反語ノ條々ニ讓ル。此ニ引ケル歌ノ解モ、皆、後ノ反語ノ條々ニアリ。

二三五節　(本、三六五、三六六)後拾遺、十ノ歌ハ、人家ノ喪ヲ弔フニ詠メルナリ。新古今、十七ナルハ、[世ニソムキテ住ム所ハ、イヅクニモアルベシ、然ルニ、大原山](山城)ニ住ミシハ、住ミヨカリシニヤ]トイヒテ、大原ハ、炭燒所ナレバ、炭ニカケテイヘルナリ。

○本書、第三六六節ノ神功紀ノ[釀(カ)みハ、[かもし]ナリ、仲哀紀、歌ひつゝ、かみけれかも、舞ひつゝ、かみけれかも、]萬葉、一、長歌ニ、[いかさまに、れもひ鶏目鳴(ケメカモ)、]ナドモアリ。

三、長歌ニ、[いかさまに、れもはし計米可(ケメカ)、]同、萬葉、十五ノ歌ハ、[妹が袖、別れて久に、なりぬれど、一日も妹を、忘れて思へや。]ナリ、[思へ]ニ意ナシ、[忘れむやは]トイフニ同シ、(旅中ニ、妻ヲ思フ歌トスベシ、)

二三六節　(本、三六七)詞玉緒、四ニ、[なぞ、や、]、[なぞ、や、]ノ用例ニ、證歌七首ヲ擧ゲテ、[大かた、何等の下は、みな、か、と受くる例なるに、右のごとく、なぞ、などとなぞとの二つのみ、やと受くる例あり、その中に、なぞは、かと受くるがおほくして、やと受けたるはいとすくなし、なぞハ、やと受くる例のみにて、かと受くることなし。]トイハレタリ、然レドモ、擧ゲラレタル七首ノ中ノ、後撰ナル[大かたは、なぞや我が名の、惜しからむ。]拾遺ナル[琴の音ハ、なぞやかひなき。]詞花ナル[かれにし人の、なぞや戀しき。]ノ[からむ]、[なき]、[しき]ハ[なぞ]ノ[かゝり]ヲ結ビタルナリ、[なぞ]ハ[何(ナニ)ぞ]

ノ約ニテ、ソノ「ぞ」ハ「ぞ、の、や、」ノ「ぞ」ナリ、而シテ、三ツノ「や」ハ、皆、詠歎ノ「や」ナリ、サレバ「や」ヲ除キテモ、意味ニ、大害ナシ、又、續古今ナル「なぞやかく、忍べどくるし」ハ「なぞ、や、」ニテ切レテ、下ヘハ續カズ、トアレバ「なぞ」ハ、詰問ニ言ヒスエテ「や」ハ、全ク詠歎ナリ。六帖ノ「老いぬとて、なぞや我が身をせめぎけむ。」ハ、古今、十七ニ「なぞか」トアルニ從フベシ。千五百番ナル「なぞやかく、さも暮れがたき、大空ぞ。」ノ「や」モ、詠歎ナリ。扨、風雅集ナル「梅が香は、しるべがはなる、春風の、誰がゆくへとも、なぞや吹きこぬ。」ノ一首ノミ、疑問ナリ「こぬ」ト結ビタレバ「や」ハ疑ヒノ「かゝり」ノ如シ、「なぞ」ヲ「かゝり」トスル說ニ從ヘバ「や」ヲ詠歎ナリトモイハルレド、「なぞ」ヲバ「や」ト受ケタルハ、誠ニ少シ、トハコレラヲヤイフベキ、然レドモ、或は誤寫ニモアラムカ。

但シ、和歌ニ、「いかなれや」、「なになれや」ナドイフ一種ノ用法アリ、此ノ用法ナルニハ、詠歎ナルアリ、疑問ナルアリ、本書ノ第四〇七節以下ニ說クベシ。（詞玉緒、四ノ「れや、五くさ、」トアルヲモ見ヨ）

二三七節　（本、三七〇）本書ノ諸例ヲ、口語ニ寫セバ「年歷ると老いる、花見ると移る、清いと棲まない、多いと勝つ、」ノ意トナルト云。「水、至清無魚、人、至察無友。」東方朔ノ語ナリ。

二三八節　（本、三七一）本書ノ諸例ヲ、口語ニ寫セバ「散らうなら、聞かうなら、又ハ、散つたら、聞いたら、」ノ意トナルト云。

二三九節　○「既定」ノ方ニテ「住めど都」トイフ諺ハ、「僻地ニテモ、住ミツキタル上ハ、都ノ心地モスルモノ、」トノ意ナルニ、若シ「未定」ノ方トシテ「住まど都」トスルトキハ、「同ジク住ムトナラバ、僻地ヨリハ、都ニセム、」ノ意トナル「既定」ト「未定」トニテ、意ノ反スルナリ、此ノ如シ。

二四〇節　（本、三七三）万葉、十ノ「もみぢ」ハ、上二段活用ノ第四活用ニテ、打消ノ「ぬ」ニ接セルナリ、古今、十五ノ「いとふべらなり」ハ、「厭フヤウニ思ハル、」ノ意ナリ、貫之集ノ「唐衣」ハ、「裁ッ」ノ枕詞ニテ、年ノ立ッニカケタリ、躬恒集ノ「かれにし」ハ、「ハナレニシ」ナリ。

○詞玉緒、七ニ、「見まつりて、いまだ時だに、變らねど、年月のごと、れもはゆる君。」（萬葉、四）「卯の花も、いまだ咲かねど、郭公、佐保の山邊を、來鳴きとよもす。」（同、八）秋

たちて、△幾日もあらねど、このねぬる、朝けの風は、袂寒しも。」(同、八)此ノ類ノ歌ヲ、十餘首擧ゲテ、「此ねぬは、皆、ぬに、といふ意なり、古今集などにも、まれに此格あり、さて、れはくは、上に「いまだ」といふ言あり、まれに「いまだ」といはぬも、△の云るしを付たる所に、必、うの意をふくめり。」トアリ、然ルニ「言靈の云るべ」中篇(下)ニハ「ねぬ」ハ、ぬにノ意ニアラズ、ねぬノ下ニ「然らぬ理なるを」トイフ心ヲ含メタルナリ、萬葉集、八ニ「霜雪も、いまだ過ぎねど、思はぬに、春日の里に、梅の花見つ。」同、十ニ「まきもくの、檜原もいまだ、雲ゐねど、小松がうれゆ、沫雪流る。」トアル、此ノ二首、心モ調ベモ、大方同ジヤウナルヲ、一首ハ、思はぬにトイフ事ヲ、詞ニアラハシ、一首ハ、心ニ含ミタリ、コレニテサトルベシ。云々、參考ニ資ス。

二四一節　(本、三七五)あらしのみ、吹くめる宿に、花薄、穂に出でたりと、かひやなからむ。」(蜻蛉日記、上)又、萬葉、十一ニ「ひとり寢等、菱朽ちめやも、綾席、緒になるまでに、君を し待たむ。」ナドモアリ、万葉ナルハ、「獨寢シテ居クリトモ、臥床ノ下敷ノ菰ハ、朽ナムヤハ、朽ツマジ、上敷ノ綾織ノ席ノ、切レテ緒バカリニナルマデ、君ヲ待クム。」ニテ、此ノ「等」モ「とも」ナリ。

二四二節　(本、三七六)本書ノ諸例ヲ、口語ニ寫セバ「あつても」過ぎても」難くても」惜しくても」居つても」更けても」折れても」ナドノ意トナル。

○古今、二ノ「よそにみて」ノ歌ハ、暫シ立寄リテ藤ノ花ヲ見テ去レル人ヲ、引留メタキ心ニテ、戲レニ詠ミテ贈レルナリ、同、十七ノ歌ハ、攝州ノ住吉ヘ參詣スル人ニ贈レルナリ、地名ヲ「住ム」ニ好シ」ト言ヒカケテ、「綾草ノ生シテアル所ト聞ケバ、故郷ノ友ヲ忘レテ、長居ヲスルナ勿レ」トナリ。史記ナルハ、項羽、漢高祖ト戰ヒテ、敗走シタルヲ、故郷ナル楊子江東ノ衆ノ、迎ヘムト言ヒシニ、答ヘタル語ナリ。

二四三節　(本、三七七、三七八)萬葉、十八ノ「乎敷」ハ、越中射水郡ノ地名ナリ、「漕ぎたもとほり」ハ、「こぎめぐり」ナリ。同、十ノ「雖立雖座」ヲ「クナテモ、キテモ」或ハ「タテレド、井レド」ナド讀メルハワロシ、上ノ句ハ「たまきはる、吾が山のへに、立つ霞」ナリ。

○本書、第三七八節ナル「いつ解くべし」ハ、心ノ解クベキヲイフ。

二四四節　(本、三七九)本書ノ諸例ヲ、口語ニ寫セバ「立つたけれども」忍んだけれども」問うたけれども」ナドトナル。

○「忍ぶれど、色に出でにけり」ハ、「堪ヘタケレドモ、顔色ニアラハレタ」ナリ。謠曲ノ「猩々」ハ、唐土ノ楊子ノ里ニ、孝子アリ、酒ヲ賣ル、猩々、其孝行ヲ愛デテ來リテ、盡キセヌ酒泉ヲ與ヘテ、秋ノ月夜ニ、醉ヒ舞ヒ戯ルヽ事ヲ作レルナリ、猩々ハ、性、酒ヲ好ムト云、詞ニ「盃の數は重なれども、面色は更に變らず」、又「此壺に泉をたゝへ、唯今、かへし與ふるなり、よもつきじ」ナドヽアリ、猩々、固ヨリ想像ノ動物ナリ。古今、一ノ「百千鳥」ハ、鶯ヲ初トシテ、多クノ鳥ナリ「舊りゆく」ハ、「老イユク」ナリ。大學ノ「心不在焉」ハ、「心ノウハノソラナルトキハ」ナリ。

二四五節（本、三八一）「既定」ノ方ニテ、形容詞ノ「無けれど、戀しけれど」ハ、「無くあれど、戀しけれど」ハ、「無くあれど、戀しくあれども」ノ約マレルニテ、「無けれども、戀しけれども」ハ、「無くあれど、戀しくあれど」モ、「無くあらど、戀しくあらど」ノ約マレルニテ、「無くとも、戀しくとも」ハ、「無くありとも、戀しくありとも」ノ約マレルナラムカ、然ルトキハ、「無く、戀しく」ハ、其ニ、副詞法ナリ。

二四六節　○詞玉緒、三ニ「濁るどに、既に然る事をいふと、未然事をかねていふと、の二つあり、既に然る事をいふは、「花さけど、「花ちれど、「月出れど、「月いれど、などのごとし、未然事をかねていふは、「花さかど、「花ちらど、「月いでど、「月いらど、などの如し、さて、既に然る事をいふハ、どもと相對ひ、未然事をかねていふどハ、上を轉じて、どもと對へり。同書、五ニ「どは下へ、もを添て、どもともいふ、雖の字の意なり、此の雖の字の意の言に、清と濁とのかはりあり、既に然る事をいふには、ど、ども、と濁り、いまだ然らざるを、あらましにいふには、と、とも、と清みていふ、此の清み、濁り、によりて、上の受る言の格も、異なり「花はさくとも」といふと、「花はさけども」といふと、これなり、云々。」

佐藤誠實氏ノ語學指南ニハ、「終止言ヲ承クルトモハ、未定ノ詞、已然言ヲ承クルドモハ、既定ノ詞、云々。」

チャンブレン氏ノ日本小文典ニハ、「關係法ハ、甲ノ事ノ起リハ、乙ノ事ニ因リタルヲイフ、タトヘバ「年は若く、からだも強けれど、用に適す」トイフハ「年の若きこと」ト「からだの強きこと」トニ因リタルヿ、明ラケシ、云々。」那珂通世氏云、どハ、順境ノ接續ニテ、原因ノ、當然ノ結果ヲ成スヲ

イヒ、ともどもハ、逆境ノ接續ニテ、原因ノ、反對ノ結果ヲ成スヲイフ、云々。

二四七節　(本、三八四)古今、十六ノ「つひにゆく」ノ歌ハ、臨終ニ詠メルナリ、歌ノ末ニ、餘情ノ語ヲ略セリ、同、五ナル「秋の菊」ノ歌ハ、「花ヨリ先ニ死ヌトモ知ラレヌ我ガ身ナルモノヲ、」ノ意ナリ、「ひともとゝ、思ひし菊(ナルモノ)を、大澤の、池の底にも、誰れか植ゑけむ。(古今、五)ナドモアリ。

二四八節　(本、三八八)「縣」ハ、國司在任ノ事ナリ、「例ノ事」ハ、交替定例ノ事務ナリ、「解由(ゲユ)」ハ、御用引繼ノ領收證ナリ、「わたる」ハ、「移る」ナリ。

二四九節　(本、三九五)古今、序、ノ歌ノ上ノ句ハ、「咲く花に、れもひつく身の、あぢきなさ、」ナリ、「花ニ見惚レテ居ル者ノ、イラザルコカナ、身ニ、心勞ナルコノ、デキテ來ルモ知ラズシテ、」ノ意ナリ。古今、十六ノ歌ナル「うつせみ」ハ、「世」ノ枕詞ナリ、「世事ハ、醒、睡、共ニ、夢ニ見ルガ如シ、」ノ意、友人ノ死ヲ傷メル歌ナリ。同、十七ノ歌ナル「更科、姥捨、共ニ、信濃ナリ、サレド、唯、山月ノ詠トシ、「月見れば、ちゞに物こそ、悲しけれ、」ナドノ意ト解スベシ。寶永年中ニ、盲人、板鼻檢校トイフ者、顯官ニ從テ、姨捨山ヲ過グル時、顯官、檢校ニ、月ノ景色ヲ問ヘルニ、檢校、乃チ、古今、十七ノ歌ノ末ノ一字ヲ、濁音ニ變ジテ誦シタリト、擁書漫筆ニ見ユ。

二五〇節　(本、三九六)「つゝ」ノ意ハ、萬葉、十一ニ「なかゝに、君に戀ひずて、比良の浦の、あまならましを、玉藻刈管。」ヲ、或本歌曰「なかゝに、君に戀ひずて、留鳥の浦の、あまにあらましを、珠藻刈刈。」トアルニテ、證スベシ。

二五一節　○本文、豆爾波ノ外ニ「ながら、」がてら、」ごとに等、從來、豆爾波中ニアリシモノ、尙、アリ、是等、本條ノ類別ニ從ヘバ、(種々ノ語ニ屬クモノナレバ、)第二類中ニ入ルベキニ似タレド、今ハ、甄別シテ、接尾語中ニ收メタリ。サルハ、第二類ノ豆爾波ハ、其ノ語、全ク、上下ノ語ニ粘合セズシテ、試ミニ、コレヲ文中ヨリ加除セムニ、唯、其語ニ有テル意義ノ加除アルノミニテ、原文、サラニ移動スルコ無ク、上、下、ソノマヽ、連絡シ、依然トシテ文ヲ成スベシ、前ニ掲ゲタル例語、例句中ニ就キテ、加除シテ試ミバ、必ズ其然ルヲ知ラム。然ルニ、「ながら、」がてら、」ノ類ハ、全ク、其上ナル語ニ粘合シテ、語勢ヲ變ゼシメ、(熟語トナリテ、副詞ニ變ゼシム、)之ヲ加除セムトスレバ、原文ニ移動ヲ起サズハアルベカラズ、是レ、其別ナリ、尙、後ノ接尾語ノ條ヲ見ルベシ。

二五二節　○第一類ナル名詞ニ屬ク豆爾波ハ、羅甸名詞ノ「格」トイフモノニ似タリ。今、試ニ、左ニ掲ゲテ、彼我ヲ對照セシメム。

主格。Nominative case. 我ガ「鳥、鳴ク。」「花、落ツ。」ノ如キ、豆爾波ナクテ文ノ主トナル「鳥」又「花」ノ位置、是レナリ、或ハ「鳥ガ鳴ク。」「花ノ落ツル。」ナド用ヰル「ガ」「ノ」モ、コレニ充ツベシ。

生格。或ハ、持格。Genitive.「人ノ物」「吾ガ物」ナドノ「ノ」「ガ」ナドナリ。

役格。或ハ、目的格。Accusative.「書ヲ讀ム」「字ヲ記ス」ノ「ヲ」ナドナリ。

與格。Dative.「人ニ與ヘ」「都マデ送ル」「前ヘ向フ」ノ「ニ」「マデ」「ヘ」等ナリ。

奪格。Ablative.「人ヨリ受ク」「人ト行ク」ノ「ヨリ」「ト」等、其他、多シ。

呼格。Vocative.「月よ」「花よ」ノ「よ」ナドナリ。

右ノ如ク、六樣ニシテ、名詞ノ語尾ニ變化アリテ、此ノ六樣ノ格ヲ形作ル、而シテ、其語尾ノ變化ノ姿ハ、名詞ニ因リテ、一樣ナラズ、猶、我ガ動詞ニ、六樣ノ活用アリテ、又、正格、變格、九類ノ別アルガ如シ。

サレバ、我ガ名詞ニ屬ク豆爾波モ、名詞ノ語尾變化トシテ、「格」ト立テムモ、可ナルベシ。サレド、我ガ豆爾波ニハ、同語ニ、種々ノ異義アルモアリテ、固ヨリ、羅甸ノ格ト合ハヌモ多ク、又、縱シ合ハズトモ、我ハ我ニテ、名詞ノ格ヲ、特ニ數樣ニ創制セムモ、然ルベケレド、扨、其夥多ナル意義ノアル限リ、悉ク、格ト立テムモ、煩ナルヲ覺ユ。抑モ、羅甸ノ格ノ變化ハ、名詞ノ種類ニ因リテ、其態ヲ異ニスルコトモアリテ、固ヨリ離ルベカラザルモノナレバ、名詞ニ就キテ規定ヲ立ツルハ、其理ナリ。

殊ニ、歐州餘國ノ名詞ノ、格ヲ示スニ、(語尾變化ナクテ、)無形ノ地位ニテ、則ヲ示ス國モアリ、)名詞ニ就キテ格ヲ講ズベキ立ツルガ如キハ、(冠詞ニテ、格ヲ示ス國モアリ、)名詞ニ就キテ格ヲ講ズベキ必用アレド、我ニアリテハ、「訪ヘカシ、人の花の盛りを」「我が名は立てじ、萬世までに」「見せむや、人に夜のけしきを」ナド、位置ヲ顚倒セシメタリトテ、豆爾波、コレガ標識トナリテ、嚴トシテ、其意義ヲ示セバ、一個ノ語ト見做スベキ價値アリ。

然レドモ、我ガ豆爾波ニハ、特ニ、一定ノ成形アリテ、且、何レノ名詞ニモ、一樣ニ接スベク、コレヲ、名詞ノ語尾變化ト見テモ、何レノ名詞モ、其變化ハ、「が」「の」「に」「を」

と、へ「より」まで「等ニテ、千篇一律、サラニ、異狀アルヿナシ。サレバ、羅甸ノ格ハ、足ノ如ク、其名詞ニ生得シテ離ルベカラズ、我ガ豆爾波ハ、履ノ如ク、脫シテ衆ニ通用スルヿヲ得ベシ。且、コレヲ別語トスル方、其意義ヲ說クニ、錯雜ヲ避クルヿヲ得テ、敎フルニモ、學ブニモ、共ニ、簡便ナルガ如ク思ハル、因テ、今ハ、本文ノ如シ。

第二類豆爾波ハ、洋語ニテ言ヘバ、副詞ニ似タルモアリ、前置詞、接續詞ノ趣ナルモアリ、或ハ、名狀スベカラザルモアリ。然レドモ、其文中ニ立チテ、上ニ、種々ノ語ヲ承ケ、下ハ、動詞、形容詞等ニ係リテ、其意義ヲ達スルヿハ、何レモ、略、同趣ナルモノニテ、サラニ、相別チ難シ。此ノ一類ノ語、實ニ、國語ノ言類中ニテ、殊樣ノモノナリ。

第三類ノ豆爾波ハ、上、下、皆、動詞、形容詞、助動詞ニ係ルモノニテ、多クハ、其接續法、又、約束法(Subjunctive mood.)ト立テムモ、可ナルモノヽ如シ。然レドモ、尙、分離シテ、何レノ動詞、形容詞、助動詞ニモ、通用連續セシムベキヿハ、第一類ノ如シ。且、コレヲ接續法ト立ツルドキハ、動詞、形容詞、助動詞、等ノ語尾變化ト見做サズハアルベカラズ、然ルドキハ、夥多ノ語尾變化ヲ成シテ、錯雜ノ甚シキヲ覺ユ、因テ、切リ放シテ、別ニ、豆爾波中ニ列シタリ。

二五三節　扨、以上、三類ノ語ハ、皆、固ヨリ、獨立ニハ用ヰラレズ、而シテ、其他語ニ係ル規定ニ差異コソハアレ、其語態ノ成立ヲ概スルニ、三類、共ニ、究竟、同臭味ノモノタリ、因テ、今ハ、類ヲ以テ別チテ、豆爾波ノ一部門ニ總ベタリ。

(本、三九九)宇治拾遺物語ナルハ、門部府生、海賊射カヘす事ノ條ノ文ナリ、平題箭ハ、矢ノ根ノ製ノ名ナリ。賴將ハ紀伊大納言賴宣卿ノ初名ナリ、元和元年、大坂ノ夏陣ノ時、十四歲ニテ後陣ニアリシニ、戰、俄ニ終ハリヌ、卿、東照公ノ陣ニ馳セテ、戰ニ會ハザリシヲ憾ミテ泣ク、大河內正綱、座ニアリテ、公子ハ妙齡ナリ、此ノ後、屢、戰功ヲ立テ給ハム日アラムト慰メタリ、本書ニ引ケルハ、其答語ナリ。

二五四節　○「さかに」トイフ感動詞ニツキテ、因ニ言フベキヿアリ、平家物語ノ、那須與一ガ扇ノ的ノ條ヲ、栗山柴野先生ガ漢文ニ翻譯セラレタルハ、有名ナル文ナリ、然ルニ、其一節ニ、原文「判官、さかに、與一、あの扇のまんなか射て、敵に見物せさ

せよかし、どのたまへど、つかまつッども存じ候はず、云々、」トアルヲ、「判官曰、宗高、汝、射扇正中、令敵軍寓目、則如何、辭曰、臣、自料、不知其可能也、云々、」トセラレタリ、「いかに」トイフ語、元來、疑問ノ副詞ナレドモ、其意ハ失セテ、唯、呼ビ掛クル聲トナレルヲ曉ラズ、イカニ翻譯ニ苦心セラレタリケム、サレド、「せよ」ト、命令法ニイヒ、「かし」トマデ、確定シテイヘレバ、主從ノ相談ニハアラヌニ、心付カレザリシハ、イカニ、(則如何ノ三字ハ、全ク不用ナリ、學者モ、漢學ノミニテハ、埒明カズ。

二五五節　(本、四〇二、四〇六、四〇七、四〇八、四一二、「葛城」「高間」ハ、大和ナリ、源氏物語ノ夕霧ノ「かけ心ことをあらめ」ハ、「詞ニ掛ケバコソアラメ」ナリ。

○本書、四〇六節ノ「玉藻刈」ハ、枕詞ニテ、「辛」ト「刈」トヲカヨハセタルナリ、辛荷ノ嶋ハ、播州室津ノ沖ニアリ、古ヘ、韓船、難破シテ、荷物ノ漂着シタルコアリトテ、韓荷ノ島ノ意ナリト云、又、下ノ句ハ、「鳥ハ無心ナレバ、家ヲ思ハジ」トノ意ナリ。

○本書、四〇七節ノ後撰、五ノ「なべに」ハ、「並ニ」トイフニ同シク、(なべて)ナドノ「なべ」ナリ、)鳴キツルニ連レテ、ナリ。

○本書、四〇八節ノ後拾遺、十二ノ歌ハ、初面會ノ翌日ニ贈レル歌ナリ、「夜前、逢ヒテ程モナキニ、思ヒ出スハ、如何ナル心ナルゾ、今マデ相知ラデダニ年ヲ歴クリシニ」ノ意ナリ。新古今、十七ナルハ、「遁世セヌ人ハ、如何ナル心ニカ、人ニ惜シマレテサヘ、山ニ入ル月モアル世ニ、誰レ惜ムモノナク、入ラバ入ラルベキ人ノ、山ニ入ラヌハ、イカガ、」ノ意ナリ。

○本書、四一二節ナル萬葉、九ノ「風莫」ノ「莫」ハ、「早」ノ誤ニテ、風早ハ、紀州ノ地名ナリト云フ、「波ノ寄スル面白キ景色モ、賞スル人ナケレバ、徒爲ナリ、」ノ意ナリ。

同、十五ノ「武庫」ハ、攝津ニテ、今ノ「兵庫」ナリ。

二五六節　(本、四二四、以下三節)古今、長歌ノ「わかゐ」ハ、「わかやぎ」ナリ、同、二十ノ歌ハ、「甲斐ノ山ヲ明亮ニ見タイモノヂヤ、然ルニ、心ナク其中間ニ横タハリテアル佐夜ノ中山ヨ、ソレガ爲ニ見エヌ、」トナリ、「こゝろ」ヲ「けゝれ」トイフハ、訛言ナリ、「佐夜ノ中山」ハ、遠江ニアリ。萬葉、一ノ歌ハ、婦人ノ歌ニテ、「イツマデモ若クテ居クイ、」ノ意ナリ。次ノ古今、二十ノ歌ハ、「峯ヲ越シ山ヲ越シテ甲斐ガ嶺ヲ吹キ越ユル風ヲ、人ニシタイモノヂヤ、ナア、人ナラバ、京都ヘ傳言ヲ頼マウニ。」ナリ。

○「が」「かも」「かな」ニ就キテハ、此ノ別記ノ第三四六節以下ニ、委シキ論アリ、尙、本

書ノ第五二八節ヲモ見ヨ。

二五七節（本、四二七、以下六節）「汝ガ名告佐禰」ノ「告佐」ハ、「宣る」ノ敬語ノ佐行四段ナル、ソノ第四活用ナリ、萬葉、一ニ、「刈る」ヲ「茅をからさね、」同十五ニ、「振る」ヲ「袖をふらさね、」同、十九ニ、「暮す」ヲ「今日はくらさね、」（尙、甚ダ多シ）ナドアル、皆、然リ。同、一ニ、「幣取りむけて、はや歸り許年、」トアルモ、加變ノ第四活用ノ「こ」（來）ニ「ね」ノ添ハリタルニテ、同シ、扨、後撰、十九ノ「君が代は、鶴の郡に、肖えてきね、定めなき世の、うたがひもなく。」（甲斐ヘ行ク人ヘノ贈歌ナリ、都留郡ヲ鶴ニ、うたがひニ甲斐ヲカケタリ、無常ノ世ナレド、長命ニテ再會セム、ノ意）トアルハ、加變ノ第五活用ノ「き」（來）ニ、半過去ノ「ぬ」ノ命令法ナル「ね」ノ添ハレルナリ、混ズベカラズ。又、萬葉、七ニ、「柴な刈りそね、」同、九ニ、「雨な降りそね、」（尙、多シ）ナドアルハ、異例ノ用法ナレド、禁止ノ語ニ添ヘテアツラフルニテ、ヤハリ、此ノ條ノ希望ノ「ね」ナリ。此ノ「ね」ヲ、「に」トモ轉用シタルアリ、萬葉、五（七）ニ、「ひさかたの天道は遠し、なほ〳〵に、家に歸りて、業を斯麻佐爾。」此ノ別記ノ第三三九節、參見）

○希望ノ「な」ハ、本書ニ擧ゲタル外ニ、「行きて早見奈、」（万葉、四）道を多豆禰奈、」（同、二十）出で走り、伊奈（往）奈と思へど、」（同、二十）ナド、動詞ノ第四活用ニ接シタルモノ、皆、是レナリ。

詞玉緒、七（二十五丁）ニ、「此ノなハ、イヅレモ、んト同意ニテ、「てな」ハ「てん」、「なな」ハ「なん」ナリ、但シ、んハ、ミヅカラノ事ニモ、他ノウヘニモワタリテイフヲ、此ノなハ、タダ、ミヅカラシカセソトスル事ニノミイフ。云々」トイヒテ、萬葉、十七ノ「越中國、國津御神は、旅行きも、爲知らぬ君を、めぐみ多麻波奈」（大伴家持、越中守ニ任ゼラレ、赴任ノ時ニ、姑ノ贈レル歌ナリ）ヲ引キテ、「コレハ他ノ上ニイヒテ、たまはなむトコヒネガフ意ニ聞エテ、例ナキ事ナリ。」トイヘリ、然レドモ、佛足石ノ歌ノ、「衆生すくひ、わたしたまはな、すくひたまはな、」ナドモ、同シ、自、他、ノ上ノ別ノミニテモ定メガタシ。「な」ハ、元來、一音ニテ、希望ノ意ヲイフ語ニテ、「む」トハ別物ナリ。

又、活語雜話、三篇（卅九丁）ニ、或人ノ說トテ、「玄なな、」ゆかな、」ナドノ「な」ハ、「ちぎりきな、」ナドノ「な」ニテ、「玄なむな、」ゆかむな、」我は戀ひむな、」ナドノ類）ナドイフベキ「む」ノ一音ノ省カリタルニアラズヤ。」トイヘルモ受ケラレズ。同書ニ、「萬葉ニ、

「れびはとかなな、我が手ふれなな、子等はあはなな、うら枯せなな、」わすれはせなな、」ナドノ「なな」ハ、「なむ」ヲ「なな」トイヘルナリ。」トイヘルモ、前條ノ詞玉緒ノ說ト同ジ事ニテ、受ケラレズ。或ハ、「我が夫を、筑紫へ遣りて、愛しみ、帶は等可奈奈、奇にかも寐も。」(萬葉、二十)ナドハ、「帶は解かなく、」ナリトイフ說モアレド、「とかなく、」ヲ「とかなな、」トイフモイカガ。考フルニ、コレハ、「解かな」ト希望シテ、更ニ、「契りきな」ナドノ意ノ「な」ヲ添ヘタルニテ、「夢ニ共寐せム、」ノ意ナルベシ、其他、動詞ノ第四活用ニ、「なな」ト接シタルハ、皆、推シテ知ルベシ、コレニテ、詠歎ノ「な」ト、希望ノ「な」トアルヿヲ解スベキナリ。又、萬葉、二ノ「秋の田の、穗向の縁れる、かたよりに、君に因奈名、こちたかりとも。」同、十四ノ「高き嶺に、雲のつく、如、我れさへに、君に都吉奈那、高嶺と思ひて。」ナドノ上ノ「な」ハ、半過去ノ「ぬ」ノ第四活用ノ「な」ニテ、下ノ「な」ハ希望ノ「な」ナリ、「よひ〳〵ごとに、打ちも寐ななむ」たる〳〵も、歸り來ななむ」ニ同ジ。萬葉、二ニ「淺香の浦に玉藻苅手奈、」ナドイフ「て」モ、半過去ノ「つ」ノ第四活用「な」ハ希望ノニテ、專ラ同ジ。

○「なむ」ノ希望ナルハ、論ズルマデモナシ、コレヲ「なも」ト用ヰタルモアリ、萬葉、十四ニ「上野ぬ、をゝのたゝりが川路にも、子等は安波奈毛、ひとりのみして。」トアルハ、「逢はなむ」ナリ。「な」ノ一音ニ、希望ノ意アリテ、シレニ「む」、又ハ「も」ノ添ハリテ、「なむ、」「なも」トモナルハ、豆爾乎波ノ「ぞ」ニ似タル「なむ」ヲ「なも」トモイフト同ジ。

○以上、說ケルガ如クナレバ、此書ニハ、「ぬ」「な」「なむ」ノ三ツヲ、一ツニ合セテ、希望ノ、感動詞トシタリ、其ニ、動詞、助動詞、ノ第四活用ニ接スレバナリ。(ぬ)モ、「な」モ、他ニ紛ラハシキモノ多シ、其ノ接シタル動詞、助動詞ノ活用ニテ、別ツベキナリ。)

○曩ニ、語法指南ニ、コヽノ「なむ」ヲ、助動詞トシタレド、今ハ感動詞ニ改メタリ。

二五八節(本、四三四)古キ感動詞ニハ、書紀ノ歌ニ「よしゑやし、吾れはくるしゑ、」萬葉、(四)「我はさびしゑ、君にしあらねど、」同、(十二)「心はよしゑ、君がまに〳〵、」同、(十四)「我は待たむゑ、」ナドアリ、「よ」ノ如シ。(口語ノ感動詞ニ「ゑ」トイフモ、コノ遺ナラムカ、)萬葉、(四)紀の關守い、とゞめてむかも、」同、(十二)「家なる妹い、いぶかしみせむ、」以上、名詞ノ下ニ)同、(三)「玉の緒の、絶ねじい、妹と結びてし、」同、(七)「花待つい、間に、な

げきつるかも」續紀、(三十)詔「捨伊波謗乎招都」(以上、動詞等ニ)ナドモ「よ」ノ如シ。

二五九節　(本、四三五)「行かむや、見むや」ノ類ノ「む、や」ヲ、從來、別ニ一語トセリ、サレド「行かむ、見む」ノ下ニ「よからむ」ナドイフ意ヲ略シテ、希望ノ意ハ、其略セル語ニアルナルベシ、因テ、本書ニハ「や」ノ條ニ收メタリ。

二六〇節　又「れとらましやは、來べき春かは、ひとりかも寐む」ナドノ「やは、かは、かも」ヲモ、一語トシ、反語トシタルガ多ケレド、是等ノ「や、か」ハ、疑ヒノ「や、か」ニテ、其「や、か」、即チ、反語トナリテ、下ニ「は、も」ノアルトナキトニ關セズ、因テ、是等モ、皆、放ナテ「は、も」ノ條ニ入レタリ。(本書ノ第五四一節以下ヲ見ヨ)

二六一節　○此ノ篇ニ感動詞トイフモノ、從來ノ語學書ニハ「詠歎ノ詞」、「歎息ノ詞」、「ながめ」ナド稱シテ、スベテ、豆爾波ノ中ニアリ、サレド、別ニ、自ラ、一類ノ語ナレバ、此ニ集メテ、一門ニ立テタリ。

二六二節　○洋文典ノ譯語ニ、歎息詞(Exclamation.)或ハ、間投詞(Interjection.)ナドイフモノ、即チ、感動詞ナリ。其「間投」トイフハ、語句ノ間、那處ニモ投ゲ入レラルベキモノナレバイフナリ、(間投ノ譯ハ、旨甚シ、投間ナルベシ)サルニ、我ガ感動詞ハ、言語ノ上ニ居リ、中ニ入リ、下ニ添フナド、其用法ニ、各、規定アリテ、而シテ、他語ニ移動ヲ及ボスヿモ、少カラズ、宜シク慣用ノ法ニ從フベシ、妄ニスベキニアラズ。歎息詞ノ名、妥ナラズ、(なげく)ハ、長ク息突クニテ、七情ニ通ズレド、歎息ハ、喜、樂、愛、欲等ニ通ゼズ)本書ニイフ感動詞モ、感詞トセバ可ナラム、ト思ヘド、冠詞ト紛ヒ易シ、感言、最モ佳ナレド、他ノ「詞」ノ字ト、不倫トナル、因テ、今ハ、姑ク、感動詞トシタリ。

二六三節　(本、四三七)八品詞ノ、互ニ相合ヒテ、熟語、疊語トナルキハ、其個々ナルキノ意義語性ヲ變ズルヿアリ、因テ、此ニ一括シテ、再說ス。

○助動詞ノ、動詞、又ハ、他ノ助動詞ト合フモノモ、畢竟ズレバ、熟語ナルベシ、サレド、前ニ、各條ニ說キ了ヘタレバ、別ニ、此ニ言ハズ。又、接頭語、接尾語ノ、他語ニ接シテ成レルモノモ、熟語ナレド、接頭語、接尾語ハ、他ニ接シテ熟語トナルガ本分ナレバ、別ニ言フマデモナシ。

二六四節　(本、四三八)熟語ハ、個々ニ解剖シテミテ、益アルベシ、例ヘバ「松山、谷川」ハ、各、名詞ナリ、「酒樽、船歌」モ、各、名詞ナレド、上ナル語ハ「さか、ふな」ト語尾ヲ變ズ「淺瀨、黑

雲」ハ、形容詞ノ語根ト名詞トナリ、「一年、五月」ハ、數詞ノ語根ト名詞トナリ、「唐織、京染、教草、讀物」ハ、名詞ト、動詞ノ名詞法トヲ上下ニシタルナリ、「天津風、沖津浪」ハ、二名詞ノ間ヲ、豆爾波ニテ繋ギタルモノナリ、其他モ、推シテ知ルベシ。

○上、從ニシテ、下、主ナルモノ、尙、多シ、「朝日、月夜、子ノ上」、(兄)竹ノ子、(筍)皆殺、(壓)相對死、(悄死)誰彼時、(黃昏)彼誰時、(昧爽)稻負鳥、(鵯)太鳥、三日月、弓張月、蝙蝠傘、鳶合羽、大和錦、武藏鐙、鎌倉彫、奈良晒、嚴物作、草物言、金時計、銀煙管、猿腰掛、(草名)烏豌豆、(草名)斑無鶉、根無葛、憂木苺、黃小雁皮、(草名)赤鼻小鯛、細根大根、申食國政大夫、內兵庫正、生キトシ生ケル物、生ク日ノ足ル日、天祝詞大祝詞言、八坂瓊五百筒御統珠、天津日高彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊、龍宮乙姬、元結切片、(海藻名)

二六五節　(本、四三九)上、下、共ニ主ナルモノ、縱橫、讀書、雨風、月日、天地、前後、長短、輕重、浮沈、有無、實否、」

二六六節　(本、四四一)本書ニ擧ゲタル「丈長」ハ、一種ノ製ノ紙ノ名ナリ、「車返、親不知」ハ、地名ニアリ、「豆廻」ハ、鳥ノ名ナリ。「言名付」(許嫁)ナドモアリ。

二六七節　(本、四四三)熟語ノ動詞「近寄る、遠離る、思計る、」(慮)天降る、高光る、戶指す、」(飼)名告る、」蟲食む、」(蝕)額突く、」(叩頭)引以る、」(率)支切る、」(遮)振放見る、」彌頻降る、新鋤返す、」讀み分け置く、」書い付け以て行く、」(續紀、天平勝寶元年四月朔ノ詔ニ「此遠聞食驚伎悅備貴備念久波、」又、「受賜里恐理戴持、」ナド續ケタルアリ、但シ、中止法ナルベキカ。

二六八節　(本、四四五)熟語ノ副詞「曰はく、」宣はく、」爲可からく、」(須)願はくは、」疑ふらくは、」頻りに、」打ち付けに、」絕えて、」總べて、」決して、」譬へば、」(假令)言はゞ、」何れか、」(孰)如何でか、」(爭)己づから、」(自)常し、」並に、」(長)然らぬだに、」

二六九節　(本、四四六)熟語ノ接續詞「然らば、」されば、」乍去、」何となれば、」

二七〇節　(本、四四八)事物ノ數多キヲ示シ、共ニ然ルヲ示スモノ、尙、アリ、「國々、村々、町々、島々、路々、家々、關々、辻々、門々、宮々、寺々、下々、」

二七一節　(本、四四九)副詞トナリテ、物毎ニ事毎ニ然ル意ヲ示スモノ、尙、アリ、「朝々、夜々、」色々、數々、聲々に、」區々に、」樣々に、」程々に、」又、「時々、折々、所々、」ナドハ、點々散在ノ意ヲ成ス。

二七二節　(本、四五〇)動詞ノ疊語ハ、「見る〳〵、見す〳〵、知る〳〵、泣く〳〵、泣き〳〵、待ち〳〵、取り〳〵に、次ぎ〳〵に、離れ〳〵に、絶え〳〵に、」助動詞ニ「行きつゝ見る、」(懊惱する、痛快する、繁褥する、)

二七三節　(本、四五一)形容詞ノ疊語ハ、「强々し、惡々し、苦々し、痛々し、冴え〳〵し、初々し、男々し、女々し、骨々し、黑々と、早々と、細々と、久々にて、」

二七四節　(本、四五二)副詞ナルハ、「はら〳〵、つら〳〵、かね〳〵、玄ぞ〳〵、しよ〳〵、たま〳〵、こも〳〵、れの〳〵、」

二七五節　(本、四五三)感動詞ナルニ「君に因り、よゝ〳〵〳〵〳〵と、よゝ〳〵〳〵と、ねをのみぞ泣く、よゝ〳〵〳〵と。(榮華、衣の珠)ナドアリ、「よゝ」ハ、泣ク聲ナリ。

二七六節　(本、四五四)接頭語ハ、洋文法ノ Prefix. ナリ、接尾語ハ、Suffix. ナリ。然レドモ、我ガ接頭語ハ、甚ダ彼ノ Adjective. ニ似タル所アリ、其說ハ、此ノ別記ノ第一三三節ニイヘリ。

二七七節　○「初花、初穗、初事、初冠、小舟、小笹、小家、小暗し、御位、御心、眞白、眞半分、素腹、素面、生絹、生地、辟事、辟覺、曲舞、ゐせ車、幾年、幾若干、直路、直走、諸聲、彌遠し、」

二七八節　(本、四六一)土佐日記ノ歌ハ、松ト鶴ト、互ニ伴侶ナリト思ハルヽヤウナリ、ノ意。

二七九節　(本、四六三、四六四)形容詞ノ語根ナラズシテ「あはれさを、何にたとへむ、」ナド用ヰタルハ、違法ナルベキカ。

○動詞ニ付ク「さ」ハ、形容詞ノ語根ニ付ク「さ」ト異ナリ、本書ニ擧ゲタル萬葉集、九、ノ歌(入唐使ニ贈レル歌ナリ)ニ「往方、來方」ト「方」ノ字ヲ當テ、(往方、來方、ト訓メルハワロシ、)古今集、離別ニ「玄たはれて、來にし心の、身にしあれど、歸るさまには、道も知られず。」(蜻蛉日記ニ「まゐるさまに、ゐ知らで、」ナドアレバ「方」ノ略ナリ。

徒然草ノ「あふさきるさに」ハ、詩經、關雎篇ニ「左右」ノ字ヲ、斯ク讀ミテアリ、「左方ニ右方ニ、又ハ「コナタカナタニ」ナドノ意ナリ。「かへさ」ハ「歸るさ」ノ略ナリ。「暮れはてぬ、かへさは遠れ、山櫻、誰が爲に來て、惑ふとか知る。」(千載、二)「かへるさを、いそがぬ程の、道ならで、のどかに峯の、花は見てまし。」(同、二)春深く、尋ね入るさの、山の端に、はの見し雲の、色ぞ殘れる。」(新古今、二)晴れ曇り、降りもつゞかぬ、

雪雲の、あふさきるさの、月ぞさゐたる。(夫木、十八)ナドモアリ。又「白菅の、眞野の榛原、ゆくさくさ、君こそ見らめ、眞野の榛原。(萬葉、三)ナドハ、名詞ヲ、直ニ副詞ニ用キタルナリ。

○因ニ云、奥州、水戸、肥前佐賀、等ノ方言ニ、豆爾乎波ノ「ヘ」ノ意ヲ「さ」トイフ「右さ行く、前さ出る、上さあがる」ノ如シ、コレモ「方」ノ約轉ナラムカ、更科日記ニ「この曉に、いみじくれはきなる人魂のたちて、京さまへなむ來ぬる、と語れど、」

二八〇節　(本、四六五)拾遺、十三ノ丸小菅ハ、荆三稜トテ、水澤中ニ多ク生フル草ナリト云フ。

○貫之集ニ「秋の田の、穂にし出でぬれど、打ちむれて、里遠みより、雁ぞきにける。」所ル用法モアリ。

二八一節　○左ノ數語ノ如キハ、一個ノ名詞ノ意義ヲナシテ、上ナル語ハ、却テ下ヲ形容スルモノナレド、尙、獨立ニハ用ヰヌ語ニテ、接尾語ノ如シ。

二八二節　か。(家)　處ヲイフ。「山が、住か、隱が、」

「こゝ、かしこ、」ナドノ「處」ノ轉ナリ、常ニ「家」ノ字ヲ當ツレド、家ノ字音ニハアラズ。

か。(日)　日ヲ數フルニイフ「ふつか、いつか、はつか、みそか、百か、幾か、」

二八三節　へ。(重)　重ヲイフ「みへ、をへ、はたへ、千へ、幾へ、」

べ。(邊)　邊ヲイフ「山べ、川べ、磯べ、」

べ。(部)　群ヲイフ「下べ、物のべ、忌べ、」

二八四節　て。(人)　人ヲイフ「射て、讀みて、爲て、」

り。たり。(人)　人ヲ數フルニイフ「ひとり、ふたり、みたり、よたり、幾たり、」

二八五節　(本、四七〇)此ニ擧ゲタル「たし」ハ、接尾語トセズ、動詞、助動詞ノ第五活用ニ接スル助動詞ト立ツベキカ、徒然草ニ「ありたきものは、云々、」ナド用ヰテアリ。(宇治拾遺ニ「御見參に入りたがり候ふ、とぃへば、」○「めでたし、うれたし、」ナドノ「たし」ハ、「痛し」ニテ、「甚し」ノ意ナリ、「いたくなわびそ、」ナドノ「いたく」是レナリ。(漢語ニ、痛快ナド用ヰル痛ノ意)

二八六節　(本、四七一)「あがら」ノ語原ハ、「の」ト「から」(自)トノ轉ナリトモイフ、或ハ、「長ら」ニテ、延ブル意ナラムカ。

○「讀みながら考ふ」ナドモ「讀みて、そのまゝ考ふ」ノ意ナルベケレド、「讀む」ト「考ふ」トノ兩爲ニ渉レバ「つゝ」ノ意ヲモ成シ、更ニ轉ジテ、「讀み」ヲスレドモ、「考へ」ヲモスル意トナリテ、「なれども」ト、反對スル意トナルナルベシ。

二八七節（本、四七三）「ゑかしながら」ナドヲ、反對ノ意トスルハ、後世ノ用語ニ就キテイフ、古クハ、「そのまゝ」ノ意ナリ。

二八八節（本、四七四）此ニイフ「ものから」ノ「から」ヲ、本書、第四七九節ナル「故に」ノ意ノ「から」ト、誤用スルモノ、往々アリ、彼ハ「なれど」ノ意トナリ、此ハ「なれども」ノ意トナリテ、正反對ナリ、注意スベシ。「ものから」ノ「もの」ハ、「ゑかするから」ノ「ゑかするながらに」ノ意ナルト同シ。又「みながら」（悉皆）モ「みながら」ノ意ナレド、コレハ「ソノマヽ」ソレゴメニ」ノ意ノ方ナリ。

○古今、十四、ノ歌ナル「空蟬」ハ、「世」ノ枕詞ナリ、「人言」ハ、「うはさ」ナリ、下ノ句ハ、「互ニ忘レハセヌナガラ、オノヅカラ、トホノクノデアラウ、ト思ハル」ノ意ナリ、戀歌ナレド、友人間ノ事トモ說カルベシ。

二八九節（本、四七五）古今、四、ノ歌ハ、「女郎花ハ、天ノ川ニハ生ヘヌモノニテアリナガラ、何故ニ、毎年、秋ナラデハ、開花ニ逢ヒカヌルモノカ。」ノ意ナリ、牽牛、織女、ノ兩星、毎年、一回、七月七日ノ夕ニ、天河ニテ逢フ、トイフ「アル」ニ寄セテ、詠メル歌ナリ。萬代集ノ歌ハ、「三月晦ノナルベシ。

二九〇節（本、四七六）堀川後百首、王昭君、「行くすがら、心もゆかず、別れ路は、なほ古里の、ことぞかなしき。」公任集、「小忌衣、摺りすて着つる、露けさは、春の日すがら、またぞ忘れぬ。」

二九一節（本、四七七）「がてら」ハ、糅テ雜フル意ナラム。雲林院ハ、京都ノ西北郊ニアリ。

二九二節（本、四七八）「がてに」ハ、「難氣に」ノ約カ、「難ねに」ノ轉カ。萬葉集ニハ、「知りがてぬかも、」「入りがてぬかも、」ナドトモ用ヰタリ、古今、二、ノ歌ナル「藤波」ハ、藤花ヲ波ニ見做シテイヘルナリ。

二九三節（本、四七九）「から」ハ、「かれ」（故）ノ轉カ、トモイヘド、「かれ」ハ、他語ノ上ニ用ヰ、「から」ハ、下ニ用ヰル差アリ、（サレバ「かれ」ハ、「かゝれど」ノ約トモイフ、）或ハ、「から（自）して」ノ意ナリ、トイフ說モアリ。

二九四節（本、四八〇）「雨雲の、よろにのみして、ふることは、我がゐる山の、風はやみなり。」

(伊勢物語)此ノ如キ用法モアリ。又、助動詞ノ「べし」ノ語根ヲ「佐保山の、はゝそのもみぢ、散りぬべみ、よるさへ見よと、照す月影。」(古今、五)ナド用ヰタルモ、コレナリ。

二九五節　(本、四八一)後拾遺、十三、ノ歌ハ、橋ノ縁ニ「蹈ミ」トイヒテ、文見ニカケタリ。

○天然ノ作用ノ絶ゑみ「絶ゑずみ」降りみ降らずみ」ナド、イフ語ニ、他動詞ノ「試ル」ヲ用ヰルモ、姑ク、非情ノモノヲ有情ニイフナリ「時雨せり」紅葉せり」ノ「せり」ノ、自動トナルガ如シ。

此ノ「み」ヲ「見」ト混ジ思フベカラズ「梓弓、引きみ、ゆるべみ、思ひみて」見ゑみ見ゑずみ」「とみ、かうみ、見れど」俗ニ「見てみる」眠てみる」ナド「見」ト「試」トヲ解剖シテみるベシ。

二九六節　(本、四八二)「毎に」ノ語原ハ「異に」ニテモアラムカ。此ノ語「宵々ごとに」打ちも寐ななむ」(伊勢物語)時々ごとに、ゑ念じ得ず」(帚木)ナド用ヰタルアリ。又「野邊ごとの、ちゞの草葉に、むすべども、いづれもれなし、秋の白露。」(續後撰、十)宿もせに、朝ごと稲を、乾すよりは、はてを結ひてぞ、掛くべかりける。」(堀川百首)「はて」ハ、稲ヲ懸ケテ乾ス木ナリ、)ナド用ヰタルモアリ。

二九七節　(本、四八四、四八五)此條ノ「心かり」モ、豆爾波ノ「心かり」ト、語原ハ、同ジク「計」ノ意ナラム、サレド、用法、意義ハ、異ナリ、「山の井の、淺き心も、思はぬを、影心かりのみ、人の見ゆらむ。」(古今、十五)「我ガ思フ心ハ、山ノ井ノ如ク淺クハナキニ、君ハ、何故ニ、影ノ見ユルノミニテ、寄リ付カヌヴ、ノ意ナリ、)ナドノ「心かり」ハ、「のみ」ト重用シテ、紛ラハシケレド、二ツナガラ、豆爾波ノ方ニテ、斯ル時ノ「のみ」ハ、「イットテモ」ノ意トナルト云フ。

二九八節　(本、四八七)「づゝ」ハ、一箇、二箇、ナドノ「つ」ヲ重用シタル語カ。

二九九節　(本、四八八)「なぞ」ハ、「何ぞ」ヲ、音便ニ、「なんぞ」トイヘルヲ約メタル語カ。

三〇〇節　(本、四八九)「がに、がね」トイフ語ハ、萬葉古義ノ附錄ノ雅言成法(下、四十九)ノ說、得タルヤウナリ、今、其大意ヲ摘ミテ、左ニ記サム。

「がに」ハ「之似」ニテ「がね」ハ「之根」ナリ、其語ノ起レル所、固ヨリ別ナリ、然ルヲ、詞玉緒ニ「がね」ハ「豫」ノ意ニテ「がに」ハ「豫に」ヲ約メテイヒタルナリ、トイヘルハ非ナリ、古今集ノ頃ヨリ「がに」ト「がね」トヲ、一ツニゴギラハシ「がね」ノ辭ハ失セテ、「が

ね」トイフベキトコロヲモ「がに」トノミイヘルハ、イミジキ變異ニテ、奈良ノ朝ヨリアナタナルニハ、當ラズ、萬葉、四、(三十五)「路に逢ひて、笑ましゝからに、降る雪の、消ぬべ消ぬ香ニ、戀ひ思ふ吾妹。」同、八、(三十九)「秋田刈る、假庵もいまだ、こぼたねぬ、雁がね寒し、霜もれきぬ我爾。」ナドノ「消ぬがに」ハ、「消ぬといふに似るべかりに」ノ意ナリ、「置きぬがに」ハ、「れきぬといふに似るべかりに」ノ意ナリ、落ツル所ハ、「消ぬなむべかりに」、「れきなむべかりに」ノ意トナル、コレヲ「消ぬべき豫ての設けに戀ふ」、「置きぬべき豫ての設けに寒し」トシテハ聞エズ。

萬葉、十、(十四)「梅の花、吾は散らさじ、あをによし、奈良なる人の、來つゝ見之根。」同、(二十)「橘の、林を植ゑむ、ほとゝぎす、常に冬まで、住みわたる金。」同、十二、(四)「里人も、語りつぐ我禰、よしゑやし、戀ひても死なむ、誰が名ならめや。」ナドノ「がね」ハ、右ニ引ケル十ノ卷ノ歌ニ「之根」ト書キタル字義ニテ「云々セムソレガ根本」トイフ謂ヨリ起レル語ニテ「ソレガ爲」トイフ意ニ落ツルナリ、「奈良なる人の來つゝ見るが爲に、梅の花を散らさじ、ほとゝぎす、冬まで住み渡るが爲に、橘の林を植ゑむ」ノ意ナリ、中昔ノ詞ニ「后がね」、「聟がね」ナドイヘルモ、「后になるべきそれが根ざしふるまひ」ノ心ナリ。古今ニ「泣く涙、雨と降らなむ、わたり川水まさりなむ、歸り來るがに。」トアルハ、作者ハ「かへり來るべかりに」ノ意ニテ、詠ミシカハ知ラネド、古ヘノ定ニテ言ハヾ、必ズ「がね」トイヒテ「歸り來るが爲」トイフ意ニ見ベキナリ、又、拾遺集ニ「山里に、知る人もがな、ほとゝぎす、鳴きぬと聞かば、告げに來るがに。」トアルハ「告げに來るが爲」ノ意ト聞エタレバ、古ヘノ定ニテ言ハヾ、コレモ必ズ「がね」トイフベキナリ、斯ク「がね」トイフベキ所ヲモ「がに」トノミイヘルハ「がね」ノ詞ヲ失ヒテ、ソノ言ノ似タルニ因リテ、意ヲモ言ヲモ、一ツニマギラハシテ「がに」トノミイヒタルナリ、云々。

三〇一節　(本、四九〇)以上、他語ヲ副詞トスル接尾語ノ、「ながら」、「がてら」、「からに」、「べかり」、等ハ、豆爾波ノ「から」、「だに」、「さへ」、「のみ」、「べかり」、「つゝ」、等ト、同趣ノモノナルガ如ク見ユレド、用法ノ異ナルコト、此ノ別記ノ第二五一節ニ辨シテオケリ。

三〇二節　(本、四九三、四九四、四九六)主語、又ハ、文主ハ、英文法ニイフ Subject ニテ、說明語ハ、Predicate ナリ、客語ハ Object ナリ、修飾語ハ Modifier ナリ。

○「園の」ハ「梅」ノ修飾語ナリ、「我が」ハ、又「園」ノ修飾語ナリ、「中に」ハ「咲き」ノ修飾語

ナリ、「雪の」ハ、又「中」ノ修飾語ナリ、次下ノ例ニモ、此ノ如キガ多シ、然レドモ、煩ハシケレバ、略シテ、一々別タズ、合稱スルコトアルベシ。

三〇三節　(本、四九七)禁止ノ語モ、説明語ナリトハ、禁止ノ副詞ニテ修飾セラレタル動詞モ、説明語ナリ、ノ意ナリ、尙、此ノ別記ノ第三四四節ヲ見ヨ。

○「皆人は」ノ歌ハ、古今集ノ十六ニアリ、良峯宗貞、仁明帝ノ寵ヲ受ケ、帝、崩御ノ後、僧トナリ、(僧正遍照、是レナリ)明年、衆、皆、喪服ヲ脱シタル時ニ詠メルナリ、「花の衣」ハ、花ヤカナル衣ナリ、「苦の衣」ハ、僧衣ナリ、「我ハ、今ニ、涙ニテ袂ハ乾カズ、人人ハ、花ノ衣ニサヘナリタリ、我ガ袂ハ、セメテ乾キナリトセヨ。」ノ意ナリ。「花の」「苦の」ハ、「衣」又ハ、「袂」ノ修飾語ナレド、姑ク合セテ客語トシタリ、(次ノ歌ノ「我が宿」ナドモ然リ、他モ推シテ知ルベシ)「乾き」ハ名詞ニシテ、「乾きをせよ」ノ義ナレド、「乾きする」ニテ、一ノ自動詞トシテ、「せめて乾くゑかりも乾け」ノ意トモ見ル。「苦の袂」、「呼掛ノ主語ニテ、「せよ」、命令ノ説明語ナリ。

○「今更に」ノ歌モ、古今集ノ三ニアリ、此ノ歌ニテハ、「時鳥」、「呼掛ノ主語ニテ、「歸るな」ヲ禁止ノ説明語トシ、「鳴け」ヲ命令ノ説明語トス。而シテ、本書ノ第五〇九節ニイフ主語一ツ(時鳥)ニテ説明語二ツ(歸るな、鳴け)ノ例ナリ、且、初ノ三句ハ本書ノ第五一一節ニイフ倒置句ナリ。

○拾遺、十三ニ、「夏草の繁みに生ふる、まろ小菅、麻呂がまろ寐よ、幾夜歴ぬらむ。」ノ下ノ句ナドハ、呼掛ノ主語ニ、常ノ説明語ヲ用ヰタリ。又、「君、驚かせ給ふべきにあらず」ナドイフ句ノ「君」モ、呼掛ノ主語ニテ、下ハ、打消シテ、命令ノ意アリ。又、「音のさやけさ」、「うつろふがうさ」、「言ふ由もがな」、「ひとり行かなむ」ノ類モ、文ヲ結ビテ、説明語ノ力ヲ成ス、是等ノ事ハ、本書ノ第五二七、第五二八節ニ説クベシ。

三〇四節　(本、四九八)土佐日記ノ文ハ、土佐ノ國ノ海岸ノ宇多トイフ地ノ海上ヲ、航行スル時ノ文ナリ、「その松の數」ハ、主語ニテ、「あらむ」、「歴たり」ノ二ツノ説明語アルナリ、(本書ノ第五〇九節ヲ見ヨ)又、「數」ニ「幾そゑくあらむ」ハ、善ケレド、「數」ニ「幾千年歴、」トハ、年數ヲ歴テ數ノ殖エタルヲイフニカ、或ハ、「その松の幹、」ナドイフベキヲ、舍マセタルモノカ。「その松の數」ノ内ニ、修飾語モアレド、今ハ、合シテ一主語ト見タリ。又、「ろの松の數」ヨリ「歴たり」マデハ、本書ノ第五一〇節ニイフ